
魔王陛下のヒマ潰し

尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王陛下のヒマ潰し

【Nコード】

N5422K

【作者名】

尋

【あらすじ】

異世界に召喚されたオレの目の前に現れたのは、妖艶な美貌をもった魔界の王だった――

座右の銘は「美形は滅べ」な一般人のオレと、暇人で無敵な超絶美形魔王のデュラン。
ついでにその愉快的仲間…じゃない人(?)たちとの、心温まらないぐだぐだな日々。

異世界とオレ（前書き）

以下の話は勇者もいなければ、特殊な力も無く
何の問題も解決する事の無い「オレ」が常にマイペースにだらだと
喋っているだけの話です。

それでもよろしい方はお進みください。

異世界とオレ

異世界召喚物。

今更くどくと説明する必要はないだろうが「え？ 何ソレ？」
という人の為に説明しよう。

誘拐だ。以上。

何、はしよりすぎ？ じゃあもう少し詳しく言おう。

合意の場合も無くは無いけど、大抵は強制連行されて知らない世界で騒動に巻き込まれ——というファンタジーの定番、お約束パターンの1つだ。

マンガでも小説でもゲームでも昔から何度も何度も繰り返されている奴。今更そんなの誰が読むのかと思うけど、まあオレみたいなのが読むんだろ。うん多分。ま、でも所詮はファンタジー。現実になんか事が起つたら普通に大問題。大騒動。ありえないって分かっているから娯楽として楽しめる訳だ。逆に言えば娯楽じゃなければ楽しめない。

どうも、オレはその「楽しめない」状況に直面しているようだった。

てゆうかさつきまでオレ、普通に学校で授業受けてたよね？

その場面が何故にどこぞのアニメにしか出てこないような真っ白な宮殿っぽい空間に切り替わってるんですかね？

足元はふわふわの毛足の長い純白の絨毯で、天井は真っ白な——
えーと、大理石という事にしておこう。とにかく白い石っぽいツルツルした天井。

そして目の前にはやっぱり白い寝椅子が一つ。素材は不明。むしろ知るか。

そしてその寝椅子の上にはこれまたお約束の超絶美人が寝そべっていて、オレの方をしげしげと見ていた。

足首まで届きそうならさらさらつやつやの黒いストレートヘア。

それつけまつ毛ですよ？ というようなバシバシに長いまつ毛。生まれてこの方日焼けした事なんてごさいません、というような白い肌。

淡く微笑む桜色の唇。すらつと高い鼻に凜^{りん}とした眉。

八頭身どころか九頭身なスタイル。しかも身長多分180越え。

どこのモデルだよアンタ。

これで尖ったエルフ耳と紫の瞳。

もはやお約束がてんこ盛り過ぎてどん引きレベルである。

てゆうか、何か少女漫画とかにありそうなキラキラオーラのエフェクトまでかかってるし……。

はつきり言おう。

これがオレの妄想ならイタすぎて死ぬる。

なので出来ればこれがオレの夢とかそういうオチはやめてほしい。そうなると二つ目の可能性として異世界召喚ってことになるんだろうけど、妄想と異世界召喚どっちがマシなのかビミョーだなあ……。

でも妄想とかあり得ないんだよね。
なぜなら。

「ふむ」

しげしげとオレを見ていた美形が口を開く。
勿論、だみ声なんて意表を突く事はしない、「甘く蠱惑的な優しい声」だった。

「よし、お前にしよう」

「死ね」

オレ、美形の男とか大っ嫌いなんだよね。

魔族とオレ

沈黙が重い。

いや、やつぱり初対面の相手に「死ね」は拙かっただろうか。でもいきなり訳分からんところに誘拐されたあげく、目の前に紫の目の超絶美形が背景にキラキラ背負って優雅に寝そべってるんだよ？ 殺意抱かないほうが変じゃん。

だから誰もオレを非難することは出来ない——と、思う。だと良いな。

というか、逆切れされて問答無用で抹殺されたらオレどうしよう。今自分の部屋とか整理されたら軽く恥で死ねるんですけど。

オレがそんな事を考えている目の前で、にっこりと寛大な微笑を浮かべる美形のにーちゃん。

「良い反応だ」

え？ 何その反応。もしかしてマゾですか？ 美形で男でマゾですか？

それなら速攻で逃げるぞオレは。

「この状況で逃げても自滅するだけと思うがな」

美形っぽく、長い黒髪を指先で無駄に色っぽい仕草で弄りつつ微笑む相手。

……ま、確かに地理感無い所で逃げ回っても疲れるだけで意味なさそうだ。やめよう。

「賢明だな」

「ってオレの考え読むな。気色悪い。てゆうか誰？ むしろここはどこ？ オレは誰？」

「記憶喪失ネタか」

花も恥じらう微笑みで言うにーちゃん。

その顔で記憶喪失ネタとか言うな。違和感バリバリだろうが。

「まあ、質問に答えるでしょう」

寝そべった状態から起き上がる美形にーちゃん。ああ見てるだけでイヤだ。鳥肌が立つ。

しかも起き上がった座る際に足を組むとか何の嫌がらせだろう。そんなに足が長いのが自慢か。そーかそーか、ちよつと表で話しようか。

「まあ落ちつけ、ただの癖だ。それにお前の足が平均より短いのは私のせいではないぞ」

「だから思考読むな。セクハラで訴えるぞ」

「何処に？ という突っ込みはこの場合するべきか？」

「……。えーと、じゃあ神様に？」

異世界だかは不明だが、どこでも宗教はあるだろうし。

「ふむ、まあそれは無駄だな……。ここは魔界だからな」

「はい？」

「魔界だ」

「……魔界」

「大事な事なので二度言いました」

いや、だからその顔でそういうネタって似合わないから。てゆうか詳しいなあオイ！

「当り前だろう。呼ぶなら下調べぐらいしておくものだ」

「やっぱりオレ呼ばれた訳？」

「そうだな」

「呼んだのはアンタか」

「そうだな」

にこやかに頷くにーちゃん。

ちなみに背景にキラキラのオプション付き。そのうちバラが咲きそうだ。

うわー……首絞めてやりてー……。

このまま魔王討伐とか勇者とか言い出したら迷子になろうが自滅しようがオレは逃げ出すぞ。

……ん？ 魔界？

「ちなみに二つ目の質問への回答。私はディアヴォロス・デュランだ」

「……。でいあぼろす」

「ディアヴォロス」

ちつ、細かい奴……美形の癖に。

「種族名だ」

「……つかぬことを伺いますが、魔族ですか？」
「魔族だな」

美形の魔族だった。

……ダメだ。体が完全に拒否反応起こしてる。

てゆうか、今時美形の魔族とか痛すぎるからやめようよ。どこの設定だよコレ。責任者出てこい。そして一遍世間の厳しさ見直してこい。

はぁ……まあいいや。取り敢えず確認が先だ。

「で……何故にオレが誘拐された訳？ 生贄？ まさか魔王になれとか？」

「まさか……そんな理由で呼びよせなどしない」

「じゃあ何？」

「暇だったからな」

「よし、今すぐ絞める。むしろ殺す。てゆうか死ぬ、本気で、全力で」

ああ多分今オレはむっっちゃ笑顔だろうな……。――。

人は怒りが過ぎると笑顔になるのだ。

しかし、美形のにーちゃん。もといディアヴォロス・デュランとかいう何処の厨二設定ですか？ な名前の魔族はまるで動ぜず優雅に腰かけたまま、微笑ましい物を見る目で怒り心頭のオレを眺めているだけだった。

なんか、色々と殺意わく要素満載だなオマエは。

「暇とかで召喚すな！ アンタ常識ねえのか！」

「別に良いだろう。ちゃんと迷惑が行かないようにしているぞ」

「十分迷惑――！」

オレの人権は無視か！ さすが魔族だな！

「ふむ……まあ、そのうち帰してやる」

「今すぐ帰せ」

「それは駄目だ」

「何で」

険悪な顔で睨んだオレに「ーちゃんはここやかにこのたまった。

「久しぶりに楽しいからな、私が」

「どんだ俺様なんですか。」

魔王陛下とオレ

あんまりな理由にさすがのオレも絶句していると、唐突に後ろの方で扉が開く音がした。

振り返ると、今度は銀髪金目に執事服姿のにーちゃんが入ってくる所だった。

てかこいつも美形か……しかも爽やか正統派美形。何？ 異世界の魔族って皆こんなばっかですか？

「陛下！」

今、陛下とか言った？

「どうしたセシェン。散歩の時間が待ちきれないか」

「わたくしは犬ではございません。それよりも先程の……」

と、そこでオレに気づいて硬直する二人目の美形にーちゃん（ただし多分魔族）セシェン君。

いや、普通に目の前に居たよねオレ？

何で今気づく訳？

むしろ最初は華麗にスルーしてたって事ですよねその反応。

「……人間」

「暇だったからな、呼んでみた」

「何をまたなさってらっしゃるのです！」

あ、しかし反応はわりと常識人っぽいぞセシェン君。

「どうか、拾った場所に返して来て下さいませ」

「私が責任を持って養うから問題ないだろう」
「いけません」

オレは捨て猫ですか。拾ってくれと言った覚えはないが。

「てゆうかさ……」

「どうした？」

「陛下？ ってことは定番の魔王だったりするの？ えーと……」
「デュランで結構だ。そして質問への答えは一応その通りだ、と答えておこうか」

いちいち言い回しがキザなのどうかして欲しい。

しかも無駄になまめかしく微笑んだりしないほしい。死にたくなるから。

「陛下……いい加減そうやって人間を連れ込むのはおやめ下さいと何度も申し上げたはずですよ」

オレの存在ガン無視だなあセシエン君。

まあ、良いけど。こっち見られるとかむしろ願い下げだし。

「別段問題無いだろう」

「大ありだろ」「大いにございます」

うつかりハモってしまった。

暫くの沈黙の後、銀髪のセシエン君は咳払いして話を戻す。

「陛下。人間相手に戯れをなさるのも程々になさいませ。これでも何人目ですか？」

「そんな事も覚えていられんのか？ その年でそこまで物忘れが酷

いとは可哀そうだな、セシェン」

「そういう意味ではごさいません！　とにかくこの人間も早く元の場所へ」

「断る」

愉快そうに笑う魔王様。

あー、これ完璧にオレをだしにこの真面目で常識人っぽいセシェン君をからかってるな。

そういう時こそスルースキル発揮の場面だろ。正面に居たオレ素無視したみたい……いや、別に根に持ってる訳じゃないけどね？
本当に。

「この人間は気に入ったからな。まあ、その内きちんと帰す」

「あー、質問良い？」

「どうぞ」

中途半端に手を上げたオレにセシェン君が何か言いたげな顔をしたが、先にデュランが許可したので何も言えずに黙りこむ。うん、君の事は今度から心の中で「苦勞人」と呼んであげよう。
それはさておき。

「気に入ったってさっきも言っていたけど……何で？　話聞いているとオレの誘拐が初犯ってわけじゃなさそうだけどさ」

「ふむ、その態度が気に入ったからな」

あ、誘拐とか初犯とか流しやがった。

「態度……」

「何人か呼んでみたのだがな」

憂わしげな溜息をつくデュラン。
だから無駄に色気を振りまくな。フェロモン男かお前は。

「まず最初に驚く」

「ふむ」

「そして次に私に求愛を始める」

「……ああ」

「煩いし不愉快だから、そこで元の場所へ返送していたのだがな。
お前の場合その心配はなさそうだ」

「ああ、オレあんたみたいなキザで美形とか嫌いだから」

「美形？」

眉をひそめるデュラン。絵になるのがうざったい。

「そういう言葉はやめて貰いたいものだな」

……。はい？

きょんとしたオレにセシエン君が小声で注釈を入れてくれる。

「陛下はこのほか容姿を褒められるのがお嫌いでいらっしやいますので」

「ええ？ あんなフェロモンボンバーで、上下白の服とかで決めちゃつてくるせに？ ナルシーじゃあ無いの？」

「……仰つてる意味が分かりかねますが、陛下はそういうお方でいらっしやいますので」

律儀に返してくれるセシエン君。美形の癖に良い人だね。魔族だから人じゃないけど。

「仲が良いな」

ひそひそ話に入れないのが残念なのか、デュランが少し苦笑して
そう言った。

いや、良くないから。

設定説明とオレ

まあ、何だかんだでセシェン君はオレを帰せとデュランを説得するのを諦めたらしい。

根性が足りないぞ。もっと頑張れよ。

上司に逆らう気概を持て。そんなんじゃ将来大物になれないぞ！

そんな冗談はさておいて……普通魔王っていうのは魔界のトップの事だろう。

それがこんなジャイアンでいい加減な奴で務まるんだろうか。他人事ながらちよつと心配になる。

しかも家具から壁から真つ白な部屋に、白の上下で黒いアクセサリーじゃらじゃら付けてるフェロモン魔王とか、色々終わってる気がするんですけど。

「ああ、問題無いぞ」

デュランがしらつとした顔で言う。

「その辺りを一応説明してやろう。お前もしばらく此处に滞在するのだからな」

「オレの意見は無視ですか。そーですか」

「悪くは無いぞ此处も」

いやそついう問題じゃ無いから。

「まあ、そもそも魔王というのは魔界で最も強い魔力を持つ者の称号であつて、魔界の為政者とイコールではないからな。現実に魔界の政治を動かしているのは東西南北の各区域ごとに存在する有力な

種族の当主だ」

「ああ、つまり魔王になるだけなら中身は空っぽでも強けりゃオツケーと」

「まあそういう事だな」

「陛下に対して何という無礼な事を……」

その陛下がオレに対してやった事はもつと無礼です。

「つまり、あんたは能力的にトップだけど魔界の統治では無い訳ね」

「まあ、そうだな。よって暇となる訳だ」

「ならば仕事をなさってください」

「気が向いたらな」

……ダメな人が此処に居る。人じゃなくて魔王だけど。

セシェン君の暗い表情が少しだけ気の毒だ。諦めの色が大半な辺りが特に。

「ああ、ついでだから紹介しておこう。これはセシェンだ。セシェン」

「……。セイリオス・セシェンと申します。陛下にお仕えしております」

最初の三点リードに彼の葛藤を感じる。

「見た目は今はこれだが、こいつも魔族だ」

一方、独り優雅な暇人魔王、デュラン。

誰かこいつを殺してくれないだろうか。

「まあ、魔界だからな。普通の住民は皆魔族だ。人間が居ないでも

ないが……この辺りには住んでいないな」

「へえ、魔界にも人間居るんだ……。やっぱり奴隷の村とか？」
「失礼な」

セシエン君が眉をしかめる。

「陛下はそのような真似はなさいません。人間はきちんと保護されております」

「保護？」

「物質界では異端視されて住めなくなつた者の避難所だな。主には魔力過多、身体特徴に異常や障害を抱える者。そういう者をこちらで引き取る訳だ」

「ふうん……で、オレもそこに住む事になる訳？」

「まさか」

紫の目を軽く見開いてデュランは艶笑する。

「それでは私の退屈が紛れないからな。此処に住んでもらうぞ」
「いやだ」

即答。

誰が悲しくて顔の良い男（まあ魔族だけど）に囲まれた場所で生活せにゃあならんのだ。

どんな罰ゲームですかこれは。

「ふむ、そうか……さて、セシエン。お前が中を案内してやれ」
「無視か！ 分かってたけどね！」
「安心しろ」

微笑むデュラン。

「セシエンはお前を齧ったりなどしないから」

ポイントが違う。わざとだろうってメエ。

苦勞人さんとオレ

ヒ口。です。空気が重いのです。

今オレの目の前を歩いているのはセシェン君。

傍若無人で誘拐犯な魔王陛下に奉公している可哀そうな魔族さんだ。

基本美形は嫌いだけど、ここまで扱いが不憫だとさすがのオレもちよつとだけ同情してしまう。

しかしこの人あからさまにオレの方に向かって「人間なんて見たくない」的オーラを出しているんだけど……ちよつとムツとしなくもないぞ。

オレ誘拐された被害者で、文句は言っても謝るとか遠慮するような覚えは無いんだし。

「お客様」

セシェン君が振り返ってオレを金色の目で見る。

デュランを前にしていると霞みがちだが、セシェン君はさっき言ったように正統派の美形だ。

爽やかで真面目そうで、まああれだ。好青年って奴。

小説とかマンガとかでそういうのがバンバン出てくるのはまあフイクションだから良いとして、現実でこれってどうよ？ しかも多分また「美形な高位魔族」とかいうお約束設定がくっついてくる気がしてならないんですけど。

「何でしょう」

一応敬語で返す。

美形だからっていきなり死ねとか勢いで本音を言うほどオレは下品じゃない。

え？ さっき言ってたって？ さて何の事かな忘れたよ。

「まずは陛下がご迷惑をおかけした事をお詫び申し上げます」

うや、意外とまともな対応。

最初があんな俺様気質の魔王様だったから魔族ってああなのかよ
と思っていたが、どうもあの人が規格外らしい。そりゃそうだよな。
皆あんなのばっかじゃ魔族とつくの昔に滅びてるだろうし。

「陛下は何と申し上げますか……少々変わってらっしゃいまして」

「見れば分かります」

「……………」

「え？ 何？」

「何と申しますか、陛下が貴方を手元へ残した理由が分かった気が
いたします」

マゾだからですか？

魔王様は反抗期がお好き。しゃれにならんし大して上手くも無い。

「陛下は服従する者があまりお好きではなく、このような館に居を
移されてる方ですから」

ほー……って好き嫌い多いなあ、魔王の癖に。

お前はどこぞの食わず嫌いの幼稚園児ですか。

まあ、その駄々を通るからああいう性格が出来あがったんだろう
けど。

親の顔が見てみたい。ちゃんとしつけろよ。親だろ？

「てゆうかさあ、それなら魔王止めれば良いじゃん……じゃないですか？　魔王なんて傳かれる最有力候補でしょ。それとも魔王って自主退職できないんですか？」

「陛下でしたら可能でしょう。ただ、何かお考えがあるようで退位なさるおつもりは無いようですが」

「お考え、ねえ……」

「我ら魔族は陛下には逆らう事は出来ません。それ故に陛下は人間を好まれるのかもしれませんが」

「ふーん……人間で逆らうオレはアイツの好みのだ真ん中だったって訳ですか」

こんなことならネコかぶつとくんだったなあ。

まあ、人の思考を勝手にストーリーキングする魔王相手にネコかぶる意味があるのかはビミョーだけど。

うん、これ以上考えるのやめよう。ウツになるきがするから。

「とは申しまして人間覇^{なにとそ}頂など陛下ぐらいですので、何卒屋敷の外には出られませぬよう」

「危険ってことか」

オレには異世界に召喚された途端に無敵になるとか、そういうオプシオンはついてこなかったらしい。

今こうしていても普通にセシエン君の歩行速度においていかれそうだし、体力だって心労も重なったせいでそろそろ尽きそうだ。内から湧き上がる大いなる力とかさっぱり感じない。

他は王道ファンタジーの癖にこういうところだけやけにリアルだな。

ま、これはある意味当然かもしれない。

オレは選ばれし勇者じゃなくて、選ばれた魔王の暇つぶし相手なんだから。

「陛下の領土に踏み込む者など滅多におりませんが」

「なんか身を守る手段とか無いですかね？ こう反則的に強くなれる魔法の武器とか」

「失礼ですがその腕で武器を扱うのは難しいかと存じます」

「デスヨネー」

アウトドア、インドアで言えば圧倒的にインドア派だしね、オレ。

「じゃあ、護衛とかお願いできません？」

「それはわたくしが承ります」

「良いんですか？ 一応（あのワガママっ子）魔王様にお仕えしてるんですよ？ 他の兵士とかでも……」

「何か形容詞が入ったような気がいたしますが……生憎他にはおりませんので」

「適任者がいないって事ですか？」

良いのかそれで。

ここ一応魔王城だよね？ 見た目はどこぞの洋館風高級ホテルだけど。

「いえ、わたくし以外の者がおりませんので」

「はい？」

「陛下が皆解雇なさいましたので、僭越ながらわたくしが一切を取り仕切っております」

「それ、イジメじゃね？」

すげえ。おし。みたいだよセシエン君。何処まで不憫なんだ。

「じゃあ、料理作ったり掃除したりしてるんですか？ 一人で」

「さようでございます。ですので、貴方の護衛も必然的にわたくしとなります。ご注意ください」

「うん……なんかゴメンナサイ」

「いえ……陛下のなさる事ですから」

遠いまなざしが「もう慣れました」と語っている。

何と言うか、とても可哀そうだった。

美形は嫌いだけど、ここまで哀れな人にこれ以上心労を重ねさせるのはさすがに気が引ける。

「外には出ないようにするから……うん、なんていうか……頑張ればいつか報われますよ」

「ありがとうございます」

らしくないオレの励ましの言葉に、セシェン君は丁寧に頭を下げて苦笑した。

その表情までバッチリ苦勞人氣質が表れているのがさらに哀愁を誘うのだった。

視点変更とオレ

「こちらがお部屋になります。何か不足がございましたらお申し付けくださいませ」

そう言って苦労人ことセシェン君が案内してくれたのはスイートルームみたいな部屋——ではなくて、まあまあ普通のサイズの部屋だった。とは言ってもオレの部屋が多分余裕で五つは入るな。うん。ちなみにそれは見えてる所だけの話で、クローゼットやらトイレやら風呂やら含めたらさらに広くなるはずだ。ちくしょう、やつば金持ちだよな魔王だし。ブルジョワめ。

上でトランポリンとか出来そうなでっかいベッドに敷いてあるシートがピシッと整っているのを見ると、多分これをやったのはセシェン君だろう。

君、A型だなきつと。

「あの」

「はい、何でございましょう」

「回りくどいの嫌いなんでバシッと聞いちゃいますけど、セシェンく……さんって人間嫌いですよね」

オレの質問に窓を開けて換気していたセシェン君が振り返る。

銀髪が光を浴びて天使のわっかみたいになっている。絵になるのは美形の特権だろう。

あ、ちよつとむかついてきたぞ。

「昔ほど嫌いではございません」

結構穿った質問だったが、セシェン君の答えは静かだった。

「陛下にお付き合いするうちに慣れましたので」

「あ、成程」

むしろ嫌がつているセシエン君を嬉々として人ごみの中に突き落とすタイプだもんな、あの魔王様。

絶対やっている。賭けても良い。

それも多分暇つぶしとか思いつきで実行してるはずだ。スーパ。ひとし君使っても良いぞ。

「ですが……今までの人間の所業を甘受する気にもなれませんし、陛下のように人間達の文化に価値を見出す事もできません」

「人間の所業」

「温和なスライムの村を襲って焼き払い、略奪の限りを尽くし、領土を侵略し、或いは死体を向こうに持ち帰って弄び、その皮を剥いで身にまとい、遺族の目の前に晒す……一例ですがそういう事ですよ」

あー。つまり人間の側からすればそれはダンジョン攻略とか、モンスター討伐とか、あるいは防具強化とかになるんだろう。

けど確かにされる側からするとそういう見方もあるかもしれない。レベルアップの為の狩とか、ね。

「【蝕】の来る度に警備を強化はしておりますが、人間のやり口は狡猾かつ残虐、陰惨を極める物が多くトラウマを抱える者も少なくはございません」

「……うん」

「ですので……陛下のように彼らの文化に価値を見出す事もわたくしには出来ません」

「ふむ……。うん、まあそうなんだろうね。それでもオレに色々と

世話してくれるのは陛下の命令だから、か」
「それもございます」

ま、執事さん兼コックさん兼庭師さん兼お掃除人兼その他もろもろのセシエン君だからなあ。

「ま、そんならさ。無理にオレにまで敬語使わなくて良いですから」
「陛下のお客様にさような無礼を働いては一族の恥となります」
「人間に敬語の方が嫌じゃないんですか？」
「陛下の為に生きる事こそがわたくしの全てですので」

うーん、何か誤解されそうな台詞をさらっと吐いてくれたが、多分使用人のプロとしての意識なんだろう。

でも嫌々敬語使われてもなー……慇懃無礼にはならなくても何となく分かるあの感じて結構気持ち悪いんだけどな。ほら、分かるでしょ？ あれだよ、あれ。

「まあ、でも敬語とか落ちつかないんで……良ければ適当に崩して下さい。これは客人としての要望ですから」
「畏まりました」

本当に聞いてた？ 畏まりましたってもの凄い勢いで敬語ですよ
ね？

「では失礼致します」

今のも敬語ですよね？
どうしようかな……同情するの止めようかな。

ま、とにかく今は体を休めるのを優先するべきだろうとオレは判

断してベッドにダイブする。

異世界来てみたは良いけど藁のがちがちのベッドでしたとかいう殺意のわきそうなオチはなく、ベッドは普通にふつかふかで気持ち良かった。うーん、極楽。

……。そこ、白い目で見ないように。

デュランほどじゃないが結構長身（そして足長い……嫌いだ）のセシエン君が執事さんらしく颯爽と歩くのにくつついていくのが、万年整列の時に腰に両手当てるオレにとってどんだけ大変か分からないだろう！ ああ分かってたまるもんか！ ちくしょう……悲しくなってきた。

もうやめて！ オレのライフはゼロよ！

なのでベッドのふかふか具合が天国に思える。

……魔界だけどね！

「寝よう……うん、夢オチかもしれないし」

この期に及んで往生際の悪い事を呟きつつ、オレは目を閉じた。

おやすみなさい。

良い夢を。

そしてオレが行方不明の間頼むから誰もオレの机の中を搜索とか
しませんように。
切実だから。

視点変更とオレ（後書き）

どうも作者です。

此処まで読んでくださった奇特な貴方。ありがとうございます。お疲れ様です。

アクセスを先程確認したのですが、意外と見てくださった方がいらつしゃったようで恐縮というか……大人しく感謝します。

お気に入り登録してくださった見知らぬその貴方、ありがとうございます。

あくの強い一般人と、この後続くはずの非常識な魔王と苦勞人のセシエンの掛け合い、拙いものではありませんが少しでも楽しんでいただければ幸いです。

作者拝

「ご招待とオレ

わあい、夢だったー!!

とかいうオチはやっぱり無く、次にオレが目を覚めたのはセシエン君のノックの音だった。

「お食事の用意が整いましてございます」

うん、ばりばり敬語だねセシエン君。

「あ、今行きますんで……」

ここで喧嘩して飯抜きとか嫌だったので、オレは取り敢えずセシエン君を見習って事実をスルーしつつ、寝てる間に顔にプリントされてたシーツのシワをゴシゴシして、それから身なりを整えた。

とは言っても、唐突に召喚されたオレが着替えとか持つてる訳がない。

むしろ持つてたら気持ち悪いだろう。

つまり身支度と言っても別に大したことはしてない。

制服のシャツの裾を引っ張って一応形を整え、寝ぐせを手櫛で撫でつけただけである。

うむ、オツケー。

よし、腹減ったから食いに行こう。

願わくば蛇の丸焼とか、サソリの姿焼とか、カエルの卵とか出てきませんように。

「お待たせしました」

「良くお休みになれましたか？」

セシエン君は律儀にもドアの外でピシッと立って待っていてくれた。

さすが不憫でも執事。

この人、実は結構凄いいんじゃないだろうか。

まあこんだけいびられてるっばいのに逃げ出してないだけでも十分凄いいんだとさ。

「お陰様で」

「では参りましょう。陛下がお待ちです」

「……。陛下？」

「はい、お待ちでいらっしゃいます」

「あのー、何でオレと陛下と一緒にご飯しなきゃならないんですのうか」

「陛下がそうお望みですので」

あの野郎……。脳ミソ沸騰してるんじゃないだろうな。

そもそも何が楽しくてオレの呼びつけるんだか。変な趣味とかないだろうな。

てゆうかさあ、セシエン君も空気読めよ。

陛下がお望みだから、って協力するからあのワガママ魔王様がつけあがるんだろ。

多分オレの視線が相当じつとりしてたんだろう。

セシエン君は申し訳なさそうにオレの方へ頭を下げる。

「陛下が食事をなさるのは珍しい事です、何卒ご協力願えませんか」

いや、そんな子犬みたいな目で見えるなよ……残り少ない良心が痛

むじゃないか。

「しっかし、どんだけ食わず嫌。王決定戦……」

「は？」

「いやナンデモナイデス」

さすがにセシェン君は知らないか。

あの魔王様だけ特殊っていうか変人というか奇人で変態っぽいし。

「まあ、一度ぐらいなら」

優しいなあオレ。

でも、多分食事中に我慢ゲージが振り切れる気がする。

ま、体育の成績2で一輪車も竹馬も乗れないオレが無双してもほとんど意味無いだろうけど。

「てゆうか、あのデュランって普段食事しないんですか？」

「なさいませんね」

「トイレも行かないとか」

「はい」

いや冗談で言ったんだけど。

あれか、トイレにもいかないしオナラもしないという美形補正ですか。

それとも魔族はトイレ行かないのかな。

いや、しかしオレの部屋にはしっかり水洗トイレ（座式）がついてたし……まさか気遣いとかだったらイヤだなあ。

というか一つの部屋に風呂とかシステムキッチン（IHクッキングヒーターっぽいもの）が揃っている時点で不自然だよな。

ま、冷蔵庫無かったから何もできないんだけどさ、あのキッチン。

意味ねえ。

「陛下ぐらいになれますと、何もせずとも生命に問題はござい
ませんので」

「ああ、魔王補正か」

「補正？」

「いや気にしないでください……」

なんつーか、セシエン君にそういうのを教えちゃいけない気がする。
る。

この人「白い子」だから、教える自分が外道になりそう……。。

「でも、それなら食べなくて良いじゃないですか」

「なりません」

「いや、オレにそこで強く言われても……」

「失礼致しました。しかし、規則正しく適切な食事を行う事は精神
面の安定や体内魔力の循環、肉体の再構築には必要なものでござい
ます」

「ああ、何となくイメージ的には分かる」

「陛下は我ら魔族にとってはかけがえのないお方であらせられます。
その陛下のお世話を預かるわたくしとしましては、陛下には是非き
ちんと食事を取って頂きたいのです」

健気だなあ。

でも、それって暗に君達の魔王様のダメっぷりを暴露してるって
こと気付いてないよね？

健康管理ぐらい今時小学生でも自分でやるぞ。

それをお世話係に依存って、ねえ？

「まあ、事情は分かったけど……」

「陛下には色々と思う所もあるのは存じ上げておりますが、何卒お願い致します」

そう言われるとなあ……。

まあ、おなか減ってるから食事自体は大歓迎だし。

そんな事を考えたり、くだらない事を喋ってる内にオレとセシエン君は覚えは無いけど何の部屋かは良く分かる扉の前にたどり着いていた。

ドアまで白って、あんたどんだけだよ魔王様。

「招待とオレ（後書き）」

どうも、作者です。

11時まで寝てました。

土曜出勤の人が聞いたら呪い殺されそうな話です。

さて、お読みいただいた皆様ありがとうございます。

寝ている間にも目を通して下さった方がいらっしゃるようで有難い事です。

（何故か早朝五時の数が急に増えている辺り、何があったのかちょっとときになりますけど）

文章評価とストーリー評価にポイント入れてくださった見知らぬどなたかのお気持ちを無碍にしないよう、頑張りたいと思います。

作者拝

食事会とオレ

相変わらず白すぎて眩しい部屋の真ん中には、いつの間にか丸いテーブルが用意されていてその上に二人分の食事が並んでいた。

そして一方には眩しいゴージャスオーラを背負った魔王様が優雅に腕を組んで座っていた。

やべえ、部屋の白さが目に痛いより先にこの人のキラキラっぷりが精神に痛い。

「来たか、座れ」

命令すんな。

そして妖艶に笑うな。

ついでに足組むな。オレへのいやがらせか。

そんな思いを熱い視線に込めつつ、オレはセシェン君との約束の手前黙って席に着く。

あー、やっぱり良い椅子使ってたんなー。

はい、突然ですがここでクイズです。

今オレの目の前にあるテーブルとイスの色を当ててください。

……。

……。

……白デス。

本当に疲れるなこの魔王様。

あ、しかし食事は意外と普通だな。
多分ポタージュスープっぽい物に、多分サラダっぽい物。それから前菜のカルパッチョっぽい物にパンに魚っぽい物のポワレっぽい物。

「つて、オイ！」

「どうした」

「なんだこの正体不明のオンパレード！　パンしか確定できる物ないじゃん！」

「お前は馬鹿だな」

慈愛に満ちた女神の微笑みをオレに向けるデュラン（ただし中身は男で魔王で暇人で性格悪い）。

「気候と土地と水が違うのだぞ？　同じ動植物が採れるはず無いだろう」

「それにしてもこの水色にピンクの水玉のサラダ菜もときには軽い悪意を感じるぞ」

「気のせいだろう」

上品にナイフとフォークを扱いながら微笑むデュラン。

「茶目っ気の間違いだな」

「今すぐこのナイフで刺して良いか？　いやむしろ断っても刺すそこに直れ」

オレの殺気にも愉快そうに笑って座っているだけのデュラン。
オロオロするセシエン君。胃とか痛めてそうだ。

ついでにナイフを握るオレもこの場に居るよ。あくまでついでだ

けど。

「まあ落ちつけ」

「オレは十分落ちついている。で、魔族の頸動脈ってどこ？」

「料理を作ったセシエンに失礼だと思わないのか？」

「む……」

「お前の出身世界とて外国に行けば見慣れぬ食材もあるだろう。だが歓待の意を示して相手が料理をお前に出している場合でも、お前はそうしてホストに刃を向けるのか？」

「あ、やっぱデュランってホストなんだ」

「^{ホスト}食事会の主人であって^{ホスト}歓楽街の王の意では無いぞ」

「はいはい……」

まあでも正論だし、約束しちゃったし……食べますよ。ええ、食べてやりますとも。

「まさか人間には毒ですとか混ざって無いよね」
「問題無いぞ」

パンをナイフで切りながらデュランがあっさりと言う。

「そう言う事の無いようにその体はカスタマイズしたからな」
「食材に気い使えよ……」

人体改造すんなコラ！ 他に妙なことでねえだろうな！！

「ん？ 何をそんなに怒る。感謝する所だろう」

「誰が見も知りもしない変態魔王に体改造されて喜ぶんだ！ 何処のマゾですか！ てゆうか他に何した。絶対なんかしてるだろ！

吐け！ 吐けー！！」

「重力などの環境対応性能の調整と、強度、言語変換、感覚系統の誤差修正システム……まあ、後は色々だな」

「人の体を何だと思っている……」

「食事中ぐらい少しは落ち着いたらどうだ？」

「お前のせいだ！ お前のっ！」

コノヤロウ……。澄ました顔で食事しやがって……。

ああ、でも怒鳴ったら喉乾いたし、毒じゃないなら食べるか。

オレは席に座りなおして、さっきのピンク水玉サラダ菜もどきをフォークでグサツとやる。

「む……」

あ、旨い。

歯ごたえはレタス系のシャキシャキした奴で、後味はレモンっぱい爽やかな香りがする。

見た目すごい割に味はまともだな。

「……」

「あ、うん……美味しいよ。ありがとうございます」

心配そうにさっきからのやり取りを見守っていたセシエン君に、

一応笑顔で告げておく。

それにセシエン君もホツとしたのか笑顔を返してくれた。

ちなみに彼の分の食事は此処には無い。

ま、執事さんだからデュランと同じテーブルで食事とか出来ないんだろう。

「何かお気に召したものや、お好きな味がございましたらお申し付けくださいませ」

「うん、いや基本オレあんまり好き嫌い無いから……納豆は駄目だけど」

匂いがねー……。

ねばねばなのは好きなんだけどさ。オクラのマヨネーズ合えとか旨くね？

「ナットー？」

「あ、やっぱこっちには無いのか。うん、まあ匂いがきつい奴じゃなければ良いから。どっかの誰かさんと違って食わず嫌いとかしないし」

「それは偉いな」

あんたが言うな、食わず嫌い。

思いつつ、オレはパンを取って手でちぎる。

「う……」

「イナスのステーキを手掴みでは、豪胆だな」

「お客様、大丈夫ですか？」

パンじゃ無くて肉なのかよー！

食事会とオレ（後書き）

誤字等訂正・補記

雑談とオレ（前書き）

比較的まじめ　あくまで当社比ですが

雑談とオレ

まあ、そんなこんなで最初にテーブルの上にあった皿は空っぽになった。

今はその皿は下げられて、デザートのカーク（これは見た目までもだった）と紅茶を頂いている。

目の前のデュランは珈琲を飲んでいる。

何故か知らないが珈琲とか紅茶はオレのいた世界と一緒にようで、デュランはセシェン君に豆をミルで挽かせるところからやらせていた。おかげで空間には珈琲の良い匂いが漂っている。

ちなみに料理はどれも意表を突かれたものの、味はとても美味しゅうございました。

セシェン君がこれ全部一人で作って配膳してるんだよなあ。

君は将来良いお嫁さんになれるよ。

そしてこれを食べたく無いとかぬかしているその魔王様。全世界に謝れ。

「少しは落ち着いたか」

「落ちついたけど、原因のテーマにそれを聞かれるってのは納得いかないんだけど」

「まあ、そうかもな」

可笑しそうにクス、と手を口に添えて笑うデュラン。

……。

見るんじゃなかった。

「で、この後オレにどうしろと？」

「別段どうせずとも良い。見ているだけで飽きないからな」

「二。動ですかオレは」

「そう言うお前は何か質問は無いのか？」

「質問、ねえ……聞いたら答えてくれるわけ？」

「気が向けばな」

「じゃあ今すぐ死んでくれない？」

「断る」

ま、そう言うよな。

てゆうか話題振っついて「気が向いたらな」ってナメてんのかオマエ。

「出来る約束しかしたくないのでな」

「知るか。まあじゃあえーっと……オレが帰る方法とか。アンタじゃないと帰せない訳？」

「いや、そうでもないな」

デュランから返ってきた答えは意外なものだった。

「私で無くとも戻るだけなら可能だ。もっとも無事に帰りたいなら勧めないがな」

「体改造された時点で無事じゃない」

「調整しなければ無事では済まないのだがな」

「……小理屈魔王め」

「それはどうも」

むかつく。

はあ、でもまあ分かった。つまり無事に帰りたければここで辛抱しろと言う意味だろう。

そしてそれ以上の情報をオレに渡す気は無いらしい。それだけ分かれば収穫としては十分だろ。

「じゃあ……この世界について教える」
「ふむ」

デュランが深い紫色の目を瞬かせる。

「酷く漠然とした問いだな……」
「うるせえ」
「分からない単語や確認したい言葉はあったか？」
「ああ、うん……まあわりと」

言葉が通じてしまう分何となく分かった気分になってるけど、実際聞いてみたら違うとかありそうだし。

「じゃあ、基本的な所っぽい感じのから……魔界、魔族、魔王……はやっぱり良い。後、種族とか人間と魔族の関係とか」
「ふむ」

オレの言葉にデュランが妙に満足げに、しかし優美に頷く。
その後ろに控えたセシェン君はなぜか「驚いた」的な目でオレを見ている。

それは「驚いた、そんな事も知らないのか？」なのか「驚いた、もつとバカかと思っていた」なのかどっちだ？ どっちでもイヤだけど。

「では、魔界から説明しようか。この世界には一般的に三つの界が存在する」

珈琲のカップを置いてデュランが足を組みかえる……ってだからやんなソレ。

「天界、物質界、そして魔界だな。天界は天使が統べる世界。物質界は人間の世界。魔界は魔族の世界。まあ、そう思っておけば問題ないだろう。ああ、ちなみに普通は行き来は出来ないぞ」

私には容易いが、と付け加えるデュラン。

さすがナルシーフェロモン魔王様。言う事がイチイチ自慢っぽい。

「じゃあ、世界には大きく分けてその三つの種族が居るんだ」

「天使と人間と魔族の区分の事か？ それならば種族とは違うな。種族と言うのはウサギと犬のような事であって、金属と苔という物では無い」

「分かるような分からないような……で、その天使と人間と魔族の差って何？」

「生命維持の方法だ」

「ふむ？」

「天使というのは生命維持機能を背部の翼に集約している。それによつて長寿と魔力保有量の増大を可能にする事で生き延びる方法を選択した。基本は特権階級にしか出来ない方法だったからな……まあ、そういう権利意識が現在も残っている」

「ふむ……」

なんかそれ天使のイメージと違うねえ？

まあデュランは魔族だからその辺の魔族主観フィルターがかかってんだろうけどさ。

「魔族は逆に魔力そのものを主食とする。要は根本さえ食べれば何となると言つ環境適応型の方法を選択した結果だな。お陰で種族は最も多様だ。セシエンのようなドラゴンもいれば、最弱にして最も成功した種族と言われるスライムも居る」

「え？」

「どうした」

「セシェン君ドラゴンなの？ 見た目人間じゃん！」

「ああ、あの姿は人化と言つてな……一定ランク以上の魔族ならば誰でも使えるいわゆる擬態だな」

「陛下がこの姿をお好みですし、屋敷の管理にはその方が便利ですので」

へー……あれか、お約束の「私の真の姿を見せてやろう！」って奴か。

しかし、つてことはこの美形のにーちゃん達、実際の姿はすっぴーブサイクだったりするのかもしれないのか。

そう考えると、ちよつとぐらいコイツ等の存在許してやっても良いかなーとか思わなくも無い。

あ、でもやっぱデュラン。お前はムリ。

迷惑すぎるしその美形オーラとかが殺意を誘うから。

オレの内心に気付いているのかスルーしてるのか、デュランは知らぬ顔でカップを手に取りまた一口飲む。そしてオレを黒く長く伸びた爪で指す。

切れよ、爪ぐらい。

思わず後ろに逃げちゃったじゃないか。

それに他人を指さすのは失礼とか知らないのか。この非常識め。

「そしてそのどちらも選ばなかったのが人間だ。お前のように周囲の資源から生命維持に必要なものを吸収して生きる訳だな」

「ふうん……」

「つまりは選択の差と言う事だな」

指を戻し、デュランは珈琲を飲みほして一度そんな風に話を区切った。

裏話とオレ（前書き）

サブタイトルが無いせいで全部消えた……
書き直します。

あと300ユニーク突破感謝。それからお気に入り登録お二人目にも多謝です。

裏話とオレ

「で」

空になったカップに紅茶を注ぎ足してくれるセシェン君に軽く頭を下げつつ、オレは話を次の話題に移す。

「やっぱり魔王がいるなら勇者も居る訳？」
「いるぞ」

何故か苦笑交じりに返してくるデュラン。

……いや、目を合わせないようにしよう。精神的にあんな物見てるのは良くない。

一般人の皆も、魔王様と話す時は魔王様から離れて気持ちを明るくしてみようね！

「ただし、勇者と言うのは魔王とは違って特に定義は無い。名乗った者勝ちだな」

「へー……。選ばれし！ みたいな無いか」

「まあ、実際には人間側にもプロの戦闘集団が居るからな。通常の魔族にはそいつらが対応する事になる」

「ふむ、地球防。軍みたいなもんか」

「そんなものだ。ついでだからお前の人間と魔族の関係についても触れておこうか」

言いながらセシェン君に流し眼を送るデュラン。

コラ誘惑するな。

……と、思ったがセシェン君の方はいたって真面目な表情で一礼してすつと後ろに下がった。

そして「御用の際は呼び下さいませ」と告げて部屋を出てゆく。

……なんだ。人払いならぬ魔族払いだったのか。

「てゆうかさあ、聞かせたくない話なのか？　魔族と人間の関係って」

「まあ、色々と事情がな。セシエンは頭の回転が速いから余計な情報を与えたくない」

ふむー？

まあ良いですけど。オレこの世界の事情とかどうでも良いし。

「さてと……」

テーブルに両肘をついて指を組むデュラン。

近寄るな気持ち悪い。

「先刻教えたように通常、魔界と物質界は干渉だ。だが特定の時期になると二つの世界が接触し誰でも行き来が可能になる。これを

【蝕】という」

「ありがちな名前……」

「分かりやすくて良からう」

まさか命名あんたじゃないだろうな、デュラン。

「まあ、接触するだけなら問題は無いのだがな。これが人間側から見れば魔族が出現した事になる。そして魔族の側としては人間の侵略と見える」

「不毛な」

「不毛だな」

頷くデュラン。

てゆうか呑気に頷くなよ。他人事じゃねえだろアンタにはさ。

「まあ不毛ばかりでもないぞ。人間側にはな。何せ魔界は資源の宝庫だ。一部の者にとってはこれは一獲千金の機会となる。」

「そうすると、利益目当てで勇者とか防衛軍の後押しをする連中もいる、と」

「そう言う事だ。戦火が拡大する一因だな」

ふーむ。

まあ分かりやすい構図だが、そうすると魔族の側の意図がちよつと見えない。

ただ攻められたから守りますというだけで終わるだろうか？ いや、フツーに考えて変だろ。

じゃあ、何の得が？

「そこはまあ、プライドの問題でな」

「プライドとな」

「基本周縁部に住んでいるのはスライムでな。最初に被害を受けるのも彼らの場合が大半だ」

「で？ まさかそのスライムのかたき討ちとか言わなよね？」

魔族がそんな熱血ぞろいだったら退くぞ。

どっちかというと、魔族なんだから「やはりスライムこときでは……」みたいなイメージだろ。

「まあ、別段かたき討ちでは無い。同種族間なら無くも無いがな……」

「じゃあ何故に？」

「これも話が戻るが、魔界は領地毎に有力な上級魔族が統治している。これを貴族と言って」

「あー、聞こえない聞こえない」

思いつきオレは耳を塞いで叫ぶ。

精神衛生上聞いてたまるか。上級魔族とか貴族とかドンダケだつっの。寒すぎる。

そのオレを見て、デュランは黙って指をパチンと鳴らす。

勝手に手が下に降りた。

「その貴族が自分の領地を人間ごときに侵害されたとなれば」

「待て待て待て待て！ 今のイベントをあっさりスルーして話を進めてんじゃねえ！！」

「待ってやろう。それで、どうした」

「何だ今の！」

「魔法だ」

「ナルホドネー。魔法力ー。納得シチャッター、魔法ツテスゴイナア……とか言うんでも思ったかあっ！」

オレは椅子を蹴って立ち上がる。

「お前オレの体にマジでなにしゃがった！ 絶対なんかバイ仕掛け作ってるだろ！ 絶対服従属性とか着けてたら本気で殺すぞ！」

「馬鹿だな。お前は」

とろけるような微笑を浮かべるデュラン。

「そんなものがついていたら私を殺せるわけがないだろう。論理が破綻しているな」

「よし、殺そう」

「まあ、つまり貴族としての沽券に関わる故にスライム数匹の被害でも放置できない訳だ」

流しやがった。

この行き場の無い怒りと振り上げた拳をどうしろと？

「デメエは何様だ」

「魔王様だな」

そして古すぎるギャグとか言わないで欲しい。

就寝時間とオレ

まあ、聞く事聞いたらあんな奴に用は無い。

と言う事でオレはさっさと魔王陛下の部屋を出て自分用に貰った部屋に帰った。

途中で迷子になったとかは気にしない。

部屋が遠くて疲れたのも気にしない。

だって歩数が違うんだ。つまり消費エネルギーが違うんだ。それにサイズが小さければ筋肉の総量だって違うんだ。だからしょうがないだろ。

……何だよ、憐みの目とかで見てんじゃねーぞ。

「疲れた……むしろ身も心も汚染された気がする……」

せめて普通レベルの容姿の魔族とか居ないのか。

まあ、ここには居ないんだろうけど。

セシエン君が自分以外は解雇されましたってたし……くそ、またあの無駄色気のせいかな。

しかし、どうすつかねえ。

着替えが無いのが結構いたんだよね。下着とかこのままずっとこれ一枚とかマジで勘弁して欲しいし。

しかしセシエン君はこっちの世界の洋服とか下着とか知らんだろうし、魔王陛下は知っているだろうが頼みたくない。生理的にムリ。

何より美形の男どもにそんな事で世話になるとかどんだけコンプレックス増大ですか？

オレには羞恥プレイを楽しむような性癖は無い。

しかし、それでも着の身着のままオンリーの生活はしたくないしなあ……。

制服のまま寝たらシワが寄るし。

アイロンかけるのは面倒だし、制服高いんだよなあ。うち私立だから。

「うーん、でも多分服飾文化はそう変わらん気がするんだけど」

セシエン君のあれはバリバリ執事服だったし。

デュランのアレは気にしない。コスプレする趣味もオレには無い。とにかく、人間が居て、人化とやらができる魔族も居るならどこかにオレが着れる服も売ってるんだろう。

それを何とかして手に入れば問題は解決だ。

問題は店とかあるのかとか、それ以前にオレが無一文だっていう事なんだが、その辺はあの魔王様のサイフにたかれば良いだろう。呼びよせた責任だ。

ほら、豪邸住んでるみたいだし財力に余裕はあるはず。無問題。

「よし、明日払わせるか……」

後は……何だろう。

直に帰す気は向こうは無いみたいだし、帰れないならやるべきことは。

だめだ、眠い。

眠っちゃだめだ。死ぬぞ。いや死なないけど……むしろ死にそうに眠いけど。

「あかん、もう、むり……」

さっき食事前に寝たはずなんだけど。

オレが覚えてる最後の記憶はソレだった。

癒し系とオレ

今日も天気だ、空が青い。

「か……」

オレは今巨大ショッピングモールに居る。

いわゆる郊外型大型店舗みたいな感じの場所だ。天井はガラスっぱい透明なドームに覆われて、そこからさんと眩しい太陽の光が降り注いでくる。

周りには色取り取りの看板を掲げた店が立ち並んでいる。そして。

「いらっしやいませー」

（多分）笑顔で声をかけて来る鳥の頭に二足歩行の獅子の体の奴。その店の前でモノを物色してるのは上半身はおばちゃんで下半身が蛇の奴。

かと思うとお前ジ。リから来ただろ！ という感じの黒くてふさふさした感じの毛玉の群れとか、柴犬にしか見えないが色が緑なわんこ達とかがその辺を歩いている。

いや、そんなRPGお約束な奴らはどうでもいい。

「かわいい——！！！！」

何だあれ！ 何あれ！ 何なんだあの可愛いすぎるコンチクショウは——！！

ドラク。とか、ぷよぷ。とかに出てきそうなまるっこい一頭身の体。

ぷにぷにつやつやな肌。

でっかくて小動物みたいにつぶらな瞳。

マンガっぽくデフォルメされてる感じの口。

ぽにんぽにんと跳ねて移動している半透明なあの癒し系最強物体は。

「スライムがそんなにお気に召しましたか？」

「うん、生きてて良かった」

やっぱり予想通りスライムだった。

これもまたお約束だが……いやしかし、可愛すぎる。キモ可愛い。マジで好みだ。連れ帰りたい。

と、オレがガン見しすぎたせいか、向こうにいたそのスライムがこっちを見た。

そしてオレの付き添いで来ていたセシェン君に気がついてこっちに跳ねてやって来る。

お、セシェン君の足元で止まったぞ。

結構ちっさい。猫ぐらいの大きさだな。

抱き上げてナデナデしてえ。

「これはこれは、もしやセイリオス・セシェン様ではございませんか？」

うわー、アニメ声だ。てゆうか喋ってる。可愛い！癒される。

「ええ、そうです」

「やはり」

まるっちい目をきらきらと輝かせるスライム。あー、何か純真っぽいなあ。

てゆうか、勇者の卵はこれを殺してる訳か。
信じられん……こんなに可愛いのに。

「あの、そちらの方は？」

いかん、見過ぎたか？

「こちらは……当方でお預かりしておりますお客様です」

セシエン君、ナイスフォロー。さすが苦労してるだけあるね。
オレもそのフォローに乗って姿勢を正す。

「どうも、ナカバです」

「スライム・スライス・スランバースです」

え？ スライムの輪切り？ ……じゃなくて、長いなあ名前。
いや、確か最初に来るのは種族名だって話だからスライス・スランバースが名前なのか？
でも魔王より名前長いとかどうよ。レベル1スライムだぜ？

「スライスとお呼び下さい」

スライス
輪切り君と言っらしい。

「本日は何かお求めですか？」

「服とか身の回りの物をちょっと……まあ色々と環境が変わりました」

「そうなんです。人型をお探しですか？ それなら色々揃ってますよ」

店なんか多いっぱいしね。これで一着しかありませんとか聞いたら暴れるぞオレは。

うん、でもなんか……こういうの、魔界っぽいなあ。
ちよつと感動。

ん？ いや今更なのは分かってるよ？

でもさー、いくらデュランがエルフ耳だからって（うざい）美形の人型だったし、セシエン君も色を別にすれば普通に好青年だし、そんなんで魔界とか言われてもピンとこないって。

でも今周りに居るのはRPGとかでおなじみのモンスターだ。
しかも癒し系なスライムの輪切り……もといスライス君。
こつちきて安らぎを感じたのはこれが初めてかもしれない。あ、
いやふかふかベッドが先か。

「セシエンさん。確かまだ仕事残ってたよね？ オレ、もうここまですで良いからさ。帰ってあのダメな人の見張りしてきて良いですよ」
「ダメな人？」

「……。左様でございますか」

さすがに魔王陛下ですとは言えないか。
しかしなぜセシエン君はオレから視線をそらしてるんだろう。しかも軽く冷や汗っぱいものが見えた気が。

「しかし、お一人では……」

「スライス君が案内してくれそうっぱいし」

「お望みでしたら喜んで」

「……。ではスライスさん、恐れ入りますがこの方の案内をお願いしてもよろしいでしょうか」

スライム相手でも低い物腰のセシェン君。

ふむー。

ドラゴンってなんかランク上っぽいイメージだったけどそうでもないかね。

単にセシェン君の苦勞人属性のせいか？

「はい、分かりました」

ぐっじよぶ癒し系。

スライス君が引き受けてくれた事でセシェン君も踏ん切りがついたらしい。

オレの方へ深々と頭を下げる。

「では、お氣をつけて」

「送って頂いてありがとうございます、セシェンさん」

「お帰りの際や何かございましたら、それでご連絡くださいませ。すぐに伺います」

律儀やなあ。

うん、でもどっちかっていうとどうでもいいからさっさと立ち去ってほしい。

君が隣にいるせいで周囲の視線がさっきからビシバシとオレ達に飛んでいること、自覚してるよね？

……それともこれぐらいの視線いつもの事だから気にしてないの

かなあ？ んー？

笑顔でオレが沈黙していると、セシェン君は何か察したのか微かに表情をこわばらせ、

「……。では」

よし、去った。

残ったのはオレと、癒し系魔族のスライス君だけ。

「じゃあ、宜しく願います」

「お任せ下さい！」

ちくしょう、こいつ可愛いなあ。

癒し系とオレ（後書き）

【作者後記】

本日最後のUPとなるかと思いますが、ここまで読んでいただきありがとうございます。

今日一日で累計400以上のお客様が来て下さったようです。
お気に入り登録して下さった方もお二人増えました。

では、またのおこしを心よりねがっております。

作者拝

お買物とオレ

ワープゾーンって奴は初体験だったけどかなり便利だなコレ。
利用方法はいたってシンプル。

1、案内板を見て、行きたい場所へのマークと同じ円形の中に入る。

2、数秒間静止する。

はいこれであなとも今日からワープゾーンマスターです！

ちなみにスライス君の説明によれば、移動する気が無い場合は上を素通りする事も出来るし、いつまでも上でぼーっと寝転んでいる事も可能らしい。まあ寝転んだ場合移動してきた奴が大型魔族の場合ぶちつと腹のあたりで潰される可能性もあるからお勧めはしないそうだけど。

「大型魔族ってどんなサイズ？」

「最低でも5セクパはありますよ」

「……」

セクパって何だ。パーセクの勘違いか？

そっか、翻訳機能をどっかのマッドサイエンティストがヒトの体に勝手にくつつけてくれやがったらしいが、こっち独自の単語までは翻訳できないのか。ちっ、役に立たない美形だな。配慮しろよ。

「服関係はこっちですね」

ぼへんぼへん、と音を立てて跳ねつつオレを案内してくれるスラ

イス君。

ちなみにここに来る間にスライス君のお仲間らしき色違いのスライムとか、どこかで勝手に商標権無視してつくっちゃいました、的なスライムのパチもんっぽい奴とかと何人かすれ違っている。

ま、多分亜種って奴だな。

「そうです」

一先ず一番近い店から中に入って服を物色しているオレの傍で脚立の上にのっかっていたスライス君が跳ねた。……これって多分額いたんだよね？

「僕らスライムが一番多様な形を持っていますから。ナカバさんの近所にもいたでしょ？」

イマセン。セカイガチガイマス。

「居ましたね」

適当ににつこりして話を合わせるオレ。

空気が読めないようじゃ、元居た場所じゃあやってけない。あ、この服良いかも。籠にボンと放り込む。

「でも、オレ魔界来たばかりなんで良く分かって無いんですけどね」

これはセシェン君との打ち合わせ通り。

いわく、事故でたまに魔界に落ちて来る人が居るんだそう。オレはその扱いになるらしい。

確かに事故トラブル（どっかの馬鹿自分至上主義者のわがまま）のせい

で魔界に落^{ゆっかい}つこちたんだから間違^{まちが}って無いっちゃあ間違^{まちが}って無いもんな。

……。

よし、帰りに何か武器買^かって帰ろう。彼の為に。

そんな思いを胸にそつと秘めて、オレは取り敢えず試着室に持つてく服をぼんぽんと籠の中に放り込む。

うし、こんなもんだろ。

「一度に持ち込む服の量は三着までにお願いします」みたいなセコイルールは魔界には無いらしいから、取り敢えず欲しい分だけ籠に詰め込んだぞ。

……問題は重いつてことだけど。

「それならライトで軽くすると良いですよ」

はい？ スモ。ルライトで小さくしろってことですか？
いやそれどこのド。えもん？

「ライトですよー。あれ？もしかしてナカバさん魔法苦手ですか？」

「ええ、と言うか……使った事もそもそもないと言うか、知識もほぼゼロというか」

「あ、そうだったんですか……」

すみません、と謝るスライス君に何かこっちのほう^{こちら}が恐縮してしま^まう。

これが某オレサマ気質のアホウなら即死刑だが、スライム相手に

そんな風に思うほどオレは人間やめて無い。

手を振って気にしませんよー、と意思を伝える。

……ん？ ジェスチャーってこっちも同じ意味になるんだろうか？

ああ、何か通じたっぽい。フィーリング万歳。

「かけておきますねー。『望む 羽 羽 解き放つ 助けの力』」

スライス君の体が淡く光る。

と、急に籠が軽くなった。

「……おお」

「軽くなりました？」

「何かすげー！ 本物の魔法っぽい！」

「……本物の魔法なんです」

「あ、ゴメンしよげないで。本気で謝る。土下座しても良いからってゆつかそういう意味じゃなくて」

謝り倒して取り敢えず落ち込んでるスライス君の誤解を解いて、オレは改めて籠を持った手を上下させてみる。うん、軽い。こりや便利だな魔法。

「さっきのって呪文？ 望むなんちゃらーって言う」

更衣室に入って着替えながら尋ねるオレ。

「はい。ナカバさんも直に使えるようになりますよーきつと」

「へー、そうなんだ。そんな簡単？」

「デイスペルですから」

デイスペル？

「明かりをつけたり、火をつけたり、小さな傷を直すような日常用の魔法の事です」

ふんふん……げ、これ着てみると微妙だなー。よし、これはナシ。

「じゃあ、この店内の明かりも魔法？」

「そうですよー」

「あのワープも？」

「あれもそうですけど、初級じゃないですねー」

魔法にもやっぱり分類とかランクがあるらしい。ライトは便利っぽいから使えるなら覚えようかな。

それはさておき雑談の間に一通り試し終わったんで、オレは更衣室の外に出る。

気に入らんかったものは返して、良いと思った奴を色違いを含めて幾つか買っておく。

金も荷物入れも腐るほどあるからちよつとした豪遊、大人買いだね。

他人の金での買い物って楽しいなあ！

「じゃ、次下着売り場行きたいんだけど」

「はいはい、ご案内します」

……そう言えばスライス君。君つてもしかして素っ裸じゃあるまいな？

お買物とオレ（後書き）

【作者後記】

祝自分！

と言う事で貴方が記念すべきお気に入り登録4人目の方です。
恐れ入りますありがとうございます。

途中で書きたいエピソードだけ決めておいて、後はノリで書いてます。

その他大勢とオレ

下着も買った。靴も買った。ついでに何かうつかり要らないもんまで買ってしまった。

何この万能包丁。

売ってたおばさん（と思われる喋るキノコ）、上手だったもんなー。

「現実から目をそらすな」

あ、ばれた。

えーちなみに現実って何？　ってな人の為に……このネタ前にやったな。

じゃあ略。

では、普通に紹介しよう。

右からザコA、ザコB、ザコC、面倒なので以下略。

「うおいつー！」

何か背景が涙目で突っ込んできたような気がするが、まあ所詮背景なので気にしない。

美形な男は虫唾がはしるが、別にオレはブサイクが好きな訳でもないし。

如何にも覚えても無駄そうなオーラが体からにじみ出てるし。

「ナカバさん……」

「はいはい、何でしょう」

「ピンチじゃないですか？」

「……やっぱり？」

まあ、アレですな。

お約束の柄の悪い連中に囲まれる非力な主人公ばい感じの奴。
てゆうか主人公非力じゃダメだろ、と毎回オレはあの手を読むた
びに思うんだがどうなんだろう？　ちなみに非力な美少女が襲われ
てる所にカツコよく登場するキザな美形。アレがオレは一番嫌いだ。
絶対お前出番まって何処かで隠れてただろ。ストーカーかよ。

「ナカバさーん」

「どうしたね、涙目の輪切……スライス君」

「地味に名前間違えないで下さいよー」

「ごめんごめん。いや何かつい……で、何？」

「何と言いますか……この事態どうするんですか？」

「うーん、どうしよう」

スライス君はこの怯えっぷりからするとこの子は戦力として期待
できない。

で、オレはどうかと言うと自慢じゃないが逆上がりが出来ないオ
レに何か期待するのは間違っているだろう。

つまり、戦力ゼロ。むしろマイナス補正。

一方でザコの皆さまは何か手に物騒なもの持ってるし、筋肉むき
むきっぽいし。

「いや、あそこのカルシウム全開みたいな奴は例外か」

「スケルトンで何が悪い！！」

カチカチ骨を鳴らす骨格標本。

スケルトンは嫌いじゃないよ？　むしろデザイン的に結構好みだ。
が、お前はちよつとなー。

「……ナカバさん」

「うんー？」

「この状況どうするんですかー……」

「お金で解決？」

財布はデュランのだし。

「無理ですよー。人間が大金持つてるなんて分かったらさらに危ないですよー」

涙目で震えるスライス君。

畜生、可愛いなあこの子。お持ち帰りするぞコノヤロウ。

さてと、現実逃避終わり。そろそろ対策考えないとやばい。

三つくらいは考えてるんだけど一つは永久に閉じ込められそうだし、一つは結構ダメだったら終わりの的なアバウトさだし、最後の選択肢はまああんまり選びたくない。確実だけど。

しょうがない、二番目で行くか。

オレはデュランから預かっているi podもどきに触れる。

操作方法はえーっと……ふむ、これで良いか。

「よし、じゃあ逃げよう」

「この状況で何処に逃げるんですか？」

うむ、壁際追い詰めは王道だからね。

だが、オレには便利グッズがついている。ま、戦闘なんて格ゲーか戦略系ぐらいしかやったことないし、大して強くも無いがボタン操作とかはある程度慣れてるし。

「じゃ、行きますか」

ではお約束。

それ、ぽちっとな。

便利アイテムとオレ

以下、今朝の回想。

「良いぞ。好きに行つて来い」

意外とあっさり風味なフェロモン魔王。

今朝もバックにすっかりキラキラオーラを背負っている。

いい加減はすせよソレ。やってて恥ずかしくないか？ てかこのスポットライト美白効果だよ。照明さん、もっと光落として！。

「じゃあ金くれ」

「ならばこれを持って行け」

ポン、とオレの方に何かを投げてよこすデュラン。

きやつち。

ふつ、運動神経と本体の接続が八割切れているというオレだから落とすと思っただろう。

残念だったな、デュラン。

「……って何これ。さいころ？」

「キューブだ」

一辺が1cmほどの正六面体。どの面にも何の模様もなくツルツルである。

まあ、確かにキューブだな。

「これがこつちの金？」

「違うな」

「じゃあ何だ。さつさと話せ」

オレの言葉にデュランの後ろでセシエン君が微妙な表情をしているが、当の本魔王が気にしてないので何も言えないらしい。というか、こいつ相手に回りくどい言い方してたら日が暮れるだろ。その辺セシエン君も分かるよね？

分かれ。

「まあ、あれだな……スぺアポケ。トだ」

「……スぺア。ケット？　つまり何でも出て来ると」

「ここにある物の一部だけだがな」

「意味ねえ……」

「そうでもないぞ。まあお前たちの持っている携帯よりかは少々多機能と思えば良い。逆に言えば携帯で出来る事は全て出来る」

「ふうん……でもメール送ったりする送り先はどうなる訳？」

「キューブの所持者間のみだな。つまり、私かセシエンだ」

「意味ねえ……」

しかしと言う事は計算機能とかメモとかネット……はこの世界にはなさそうだがGPSはあるかもしれない。

「それと収納、取出……まあお前にはそれだけあれば十分だろう」

「でもこんなちつさいのでどうやってそれをやれと？　ボタンも無いじゃん。上下左右も不明だし」

「操作は画面を見て選ぶだけだ」

パチンと指を鳴らすデュラン。

と、オレの目の前に親指と人差し指で四角を作った時ぐらいのサイズの透明な画面が浮かび上がった。

「ほー……指鳴らせないんだけどこれ出せる?」

「別段鳴らす必要はないからな」

「じゃあドウシロト?」

「まあ落ちつけ。お前の使いやすいような形にしてやろつ」

再びパチンと指を慣らすデュラン。と、掌の上のサイコロもどきが唐突に形を変える。

「あ、i p o d」

「ではないが、まあ形状だけ似せておいた。電源ボタンで起動するぞ」

「ふむ……音楽聴ける?」

「聞ける事は聞けるな。こちらの曲になるが」

「ちっ……」

うん、でも大体これで使い方分かった。ここをこうでこうするとこうか。

「まあ不要なものはこうしてしまっておけば良い。出す時はこれだな」

「ふんふん。確かに。ペアポケットだなこれ。これもやっぱり魔法?」

「いや、ざっと数千年以上前の機械だな」
「ふうん」

まあそんな事があつたり無かつたり。いやあつただけどとにかく回想終了。

ここからずっとオレのターン。

「GO！」

決定を押すとでっかいタンスがやつらの頭上に出現した。当然落下。

「ぎゃー！」

「何っ？！ 空間転移魔法だと！！」

おー、混乱しとる混乱しとる。

しかし実際できるもんだなあ。これ結構ぶっつけ本番だったんだけど。

デュランの説明による「収納・取出し」。

それは簡単に言うとなん処でも好きな物を中に入れて、好きな物を好きな場所に取り出せるという事。

こんなちっこい物の中に何が入るんだと思ったが、実際にはこの中に入ってるんじゃないかと別空間から引っ張り出したり仕舞ったりしてるんだそう。

ちなみに入れた物は入れた時の状態のままで取り出せるのだそうだ。

生き物でも物体でも何でもOK。どうりで冷蔵庫ねえ訳だよなあの部屋。

しまう方は近くにある物限定だが、出す物かというとデュラン曰く「ここにある大抵の物は使って構わんぞ」と言う事だったので、つまりあの屋敷の中身ほとんどが使いたい放題なのだ。

好きな物を好きな時に好きな場所に転移できる。
ならこれを攪乱に利用できるかもしれない。

いやあ、咄嗟の思いつきにはよくやったよオレ。ほめてあげようオレ。えらいぞオレ。

ちなみに買い物した物はこれにしまって、お金はこれから出している。

「な、何なんですか今の」

「ん？ スライスも知らないの？」

「初めて見ました……その小さい札で召喚するんですか？」

「召喚……ごめん、その単語今はあんまり聞きたくない」

まさかオレの事もこれで呼び出したんじゃないだろうな……笑えん。

「とにかくパニックってる内に逃げよう。向こう多分誤解したから簡単に手出しは……」

「あんな人間は生かしておけん！ 捕まえろ！」

「逆効果っ?!」

やばい。そこは予想外。

どっちかっていうと「こいつは危険だ、近寄るのは避けた方が良いぞ」的展開を期待していたんだけど。

あ、そう言えば魔族って人間に対してやられるとかプライドに障るって昨日デュランが言ってたような——あ、あははは。うん、まあ何とか……。

「逃げよう」

「はい」

とにかく走るのも早くないし体力にも自信ないオレと、まるっこ
チビッコ体型で最弱のスライムなスライス君じゃ負けは見えている。
とにかくバンバン屋敷の物持ち出して落として、攪乱しまくるし
かない。

が、オレはすっかり念頭に無い事がもう一つあった。
平和ボケしたオレじゃあ、まあしょうがなかったんだけどさ。う
ん、オレ悪くないハズ。

ピンチ的狀況とオレ

ピンチと言えばピンチだ。

何がつて後ろっからゴツイ魔族どもがおっかけてくるのもそうだが、むしろ後始末が怖い。

うっかり操作ミスって関係無い店の屋根にテーブルぶちかましたりとかしちゃうてるし、後で絶対賠償だよな……うん、請求は魔王宛でお願い。

あと関係無いっぱいあっちのピンクのカエルさん。脅かしてゴメン。

「疲れた……もう走りたくない」

「もうですか……！」

「いや、現代っ子ナメないで……徒競走とかしてないし、オレ帰宅部だし……」

自慢じゃないがスポーツテストで下から数えた方が早い実績は伊達じゃないのだ。

……うん、分かってる。本当に自慢にならないのはさ。
だがそろそろ走ったせいでわき腹が痛くなってきたるし、息切れ
てます。

しかも走りながら操作ってむちゃくちゃやり難い。
歩きながら携帯打つのはわけが違う。

「頑張つて下さいよ！ 死んじゃいますよー！」

「オレを残して先に……」

「そんなことできません！ 一緒に逃げましょうー！」
「む……」

両目に涙（主に追っかけられてる間の恐怖によるものだ）を浮かべて叫ぶスライス君。

良い子だ。

「先にいったら絞めるよ。幾ら君が癒し系マスコットでも」と言おうとしていたさっきのオレは少し反省すべきだろう。

しかし、攪乱も現在ほとんど意味を成してない現状どうしたら良いのだろう。

というか物投げは最初の一回ぐらいしか役に立たなかった。

二回目からはあっさり見切られて、対応されるようになってしまったのだ。

なんだこのサイ。人的な、一度見た攻撃はきかねーぜ属性！でも考えてみたらこいつら皆戦い慣れてるんだよ。

戦闘民族なんだよ。

無理じゃん！

オレとかで相手出来る訳ねーじゃん！

取り敢えず進路妨害になるようにはしてるけどさあ！　それぶち破って来てるんだよあの力馬鹿どもは！

追いつかれるのも時間の問題だなあ……どうする？

「ひあ！」

妙な声で叫ばないようにね、スライス君。

「あ、む…向こうに！」

「はい？」

くいくいと裾を引っ張られてみれば、前方にさらに一匹。

全長5mはあるつかというでっかい白いワシコが座っていた。

「はあ？」

いやいやいやいや、挟み撃ちとかやめて！

はい、認めます。ピンチです。

こんなことならいつそ呼んじゃうか？ 美形男組。

わんことオレ（前書き）

いつの間にやら7人の方にご登録いただきました。
ありがとうございます。

お礼が遅れたというか……いつの間にやらと言うのは、考えつつ書いて確認忘れてたせいです。
途中で昼食とったり、リアイベやったりしているせいです。
色々ダメな感じです。

さて、今回はあの方が大活躍します。どうぞお付き合いくださいませ。
一瞬だけですけどね。

わんことオレ

実は、最終手段がオレには残っている。

方法は三つと言ったけど、まず一つ目が今やってる攪乱……いやもう攪乱というよりただの嫌がらせのレベルだけだね。上手くいったと思ったけど魔族舐めてた。

二つ目はこのキューブの中にオレとスライス君で閉じこもるシエルター作戦だ。

まああいつらが使い方知ってたら台無しっていうのと、これ一度入ったらどうやって出られるのかとか、何処に収納されるのかとか、その辺が全く不明なのでリスク高すぎて却下。

そして最後の一つ。

オレはそもそも魔王の被害者だから、セシエン君に助けを求めるという方法があるのだ。あの人も「用事あるならすぐ行くぜー」的発言をしてたし、護衛宣言もイヤそうだったけどしていた。一応本来の主人ことデュランの許可ももらっている。

例えばこんな感じだ。

『セシエン。ソレの世話は頼んだぞ』

『いや要らんし』

『畏まりました』

『あんたも同意すな』

『ふむ、良い返事だな。では今日のおやつはビーフジャーキーだな』
『ですから陛下、わたくしは……』

うん、相変わらず扱いが酷くて哀れだぞ、セシエン君。

とにかく、どうやって呼んだ呼ばない判断するのか分からんし、やってくるまでどれだけ時間かかるかも不明だが、セシエン君は呼

べば来ると言うまるでアツシー君のような立場にあるのだ。

まあドラゴンって響きのに強そうだし？多分ザコっぽい連中とやりあってもそれなりに平気だろう。精神力はデュランのお陰で相当鍛えられてそうだし。

あ、でもあの人スライス君相手に敬語で腰低かったような。

……意外と弱かったりするんですか？ セシエン君

「で、もう諦めてこの際美形でも良いから使っかなあ」

「何落ち着いてるんですかー!!」

「いや、むしろばにくってるからこんななだけどね……」

後門のザコ、前門のワンコ（ただし5mサイズ）。

うーん、挟み撃ちかあ。

前か、後ろか。

「よし、前！」

わんこの方が数少ないし！ でかいけど！

と思つた瞬間にオレの思考を読んだかのようにお座り姿勢だったワンコが立ちあがった。

それを見て改めて思う。

でかつ！ てゆうかでかつ！！ ゾウよりでかいぞワンコ！

しかも凶悪そうな牙とか見せないで！！ 如何にも肉食デスとかそんな感じの演出要らんから！

と。

ルオオオンとワンコが一声鳴いた。
瞬間オレ達の脇をなんかが吹き抜けて行った。

「……はい？」

嫌な予感。

いや、でも見ない訳にはいかないよな……仕方ない。
オレは自分の予想が外れている事を祈りつつ後ろをゆっくりと振りかえた。

ザコがみんな倒れていた。

……。

やっぱりね！！

「何か問題のある時にはお呼び下さいと申し上げたはずですが」

タフタフと石畳を踏んで近寄ってきたワンコが溜息交じりに喋った。

「いや、ゴメン。つか分かりやす過ぎる実力の差って感じだね……」

さすがにここまで来れば分かる。

意味ありげな前ふりとか、この銀色な感じとか、金色の目とか、良すぎる出現のタイミングとかここまでお約束満載で違ってるはずがない。

「セシェン君ワンコだったんだ」
「違います」

珍しく強い口調できっぱり否定したセシェン君は、真っ赤な口を開けて嫌そうな顔をした。

わんことオレ（後書き）

【作者後記】

……放置しすぎました。

12時から書きかけのままこの時間ってどうなんでしょう。ダメでしょう。

ともあれお気に入り登録に加えて下さった方ありがとうございます。
なお私は平日は勤めてますので、暫くは更新できません。

またのおこしをお待ちしております。

作者拝

お茶会とオレ

「セシェン様は魔界でもごくわずかな数しか存在しない高位魔族にして、ドラゴン種の白銀狼セイリオスでいらっしやるんです」

と、スライス君。

「白銀狼……見たまんますぎない？」

と、オレ。

「複雑怪奇にする理由がわたくしには理解できませぬが」

と、これはセシェン君の発言だ。

一瞬にしてザコ大勢を無力化したセシェン君は、苦勞人らしくそのザコたちへの説教をして、それから被害を調べて、お騒がせしたことを皆さんに謝っていた。

あのどっからみてもタダのどっかい白いワンコにしか見えない姿は魔界の皆さんには畏敬の対象らしくて、セシェン君が出ると何処もあつさり退いた。ま、オレとしては楽々つてもんである。

まあ、横目でじっとりした視線を送って来るセシェン君（ワンコばーじょん、牙ザックザク）がちよっぴり怖い感じだったけど。

そのセシェン君、今は人型に戻ってショッピングセンター内の喫茶店でオレ達とお茶してる。

ちなみにオレはセシェン君が人型に戻る際に素っ裸になったら本

気で急所蹴りかまそうかと思ってたけど、幸いもどつという仕組みか服もセットで出現した。ちなみに執事服ではなく、ぱりっとしたシヤツとスーツっぽいズボンというシンプルな格好で、そのセンスの良さとかが微妙にむかつく感じてした。はい。

「ドラゴンつてでつかいトカゲの人とかじゃないんだね」
「種族でございますので」

気のせいかちょっと言葉に棘があるセシェン君。
いや、確かにちよつと悪いことしたかな……と、思わなくも無かったり。

「でもさっきの真の姿の方が良かったよ。あのもつふもふなワンコ」
「ワンコではございません。強いて言うなら狼なのです」
「ワンコだったじゃん。でも角とか翼ぐらい生えるかと思ってただけど」
「翼ならございますが」

あるんだ。さっきなかったのに。

「狭い場所では周囲に被害のゆかぬよう、たたむぐらいは当然いたします」

それは狭い場所で周囲の被害出しまくったオレにたいする当てつけだな。

だがオレは見ていたぞ。

「でも店舗の被害とか一瞬で直ってたじゃん」

セシェン君が怪しげな小箱から取り出した黒い輪っかを地面に置

いた瞬間。

オレが投げて潰れた家具も、壊れた店舗も、食いかけの食べ物も何もかもが一瞬で復元された。

何の魔法か知らんが便利なもんだ。

あれが出来ると分かっただけでもっと派手にやったのに。

「あれは主のお陰です」

「あー、陛下か」

「陛下っ?!」

スライス君がテーブルから転げ落ちた。

「へへへへへへ、陛下ですかっ?!」

「あれ? スライス君大丈夫? 潰れてるけど」

と言うか何故に驚き?

「ナカバさん、は……その、陛下のお客人なんですか?」

「いや、被害者」

「陛下に限ってそれは無いです。冗談が過ぎますよー」

スライス君の反応からするとデュランの事じゃないんだろうか。

「陛下って魔王の事だよね? デュラン」

「呼び捨てなんてとんでもない! 陛下は陛下です」

「うーん……」

そう言われてもなあ。だってデュランだし。

「てゆうか、何でセシェン君知っててその事知らないのさ?」

「白銀狼はどなたも有名ですからー」

有名らしい。不憫だから？

「主都にいらつしやる白銀狼はセシェン様だけですからー」

「へー……何で？」

「未熟な者や老いた者は故郷に、それ以外の者は皆それぞれの主人の元でお仕えしておりますので」

「白銀狼を従えるほどの方となればそりゃあもう貴族様になりますからね」

「ふーん……」

つまり、セシェン君の種族である白銀狼というのはプロの執事集団で、しかも従える事が一種のステータスになるってことか。

だから、地方のお貴族様のもとに使える奴は基本散っている、と。

「でもセシェンさんが陛下の元にいらつしやっただんですねー……」

「この事は他言無用に願います」

「はい、もちろんです」

椅子の上に這い上がってきたスライス君が任せてくれと大きく頷く。

「てゆうか……スライス君はさ、魔王についてどういうイメージ持ってる？」

さつきからの反応見ている限りオレとは随分違った印象持つてるっぽいけど。

ちなみにオレのイメージは変人で暇人で駄々っ子な誘拐犯だ。

オレは何となくで聞いてみたんだけど、スライス君にはシヨツクだったらしく暫く凍ったように動かなかったが、やがて怯えた様子で小さく答えた。

「恐ろしいお方です」

「え？ そう？ 雰囲気が？」

「見た目ですよ」

スライス君。元が水色系なのにさらに青ざめて見える。

まるで内蔵撒き散らして死んでるゴキブリが入ったスリッパを知らずにうっかり履いてから気付いちやった人みたいな感じだった。

「即位式の時に一度だけお姿を拝見した事がありましたけど……」

「けど？」

「……………」

お、もしかや美形死ね仲間？ と思ったがスライス君の表情が真剣過ぎて聞けない。

ややあつて、スライス君は「今でもたまに悪夢に見ます」と小さく呟いた。

「陛下の容姿の醜悪さは有名な話なのですよ」

その後を引き取る形でセシェン君が言う。

醜悪とな？

まあある意味醜悪だけどさ、オーラとかきらきらしてるし。ただ普通に見れば美形だろ思いつきり。

「その醜悪さのあまり、魔王の醜さが我慢できないと吸血種のトツプであるヴァンパイアの当主が暗殺に動いたと言う話もあるぐらい

ですからね」

「はあ？」

魔族が魔王殺していいのか。

「殺せば次は自分が魔王ですしね」

セシェン君は当然のようにそう告げる。

「で、どうなったわけ？」

「返り討ちされたそうです」

ま、ピンピンして執事いじめに励んでるもんな、あの野郎。

「でも他を寄せ付けない今の魔王様でも、白銀狼だけは別格なんですよ」

尊敬です、という眼差しを向けるスライス君。

しかし実態を知っているセシェン君は黙ってごまかし笑いをする。一方のオレはそんなやり取りが可笑しくて笑ってしまったのだ。うん、何かゴメンね。

衝撃スクープとオレ

こちら現場の東海。です。

ただいまオレの目の前では宇宙大戦みたいな有様が繰り広げられています。

紫の軍師ビームっぽいものがガンガン飛んで、森林地帯がケーキみたいにサクサク切れてく。つーか決れて土ごと蒸発してゆく。

ここには資源を大切にとか、京都議定書とか、E.C。ファームとか無いのか。

てゆうか、これ見てるとさっきのピンチとかが何かものすっごい勢いでどうでもよくなってるんですけど。

ちなみに一番のスクープ映像はアレだ。

「セシエ————ン！！」

何処のオペラ歌手ですか？ てかあんたでもどなる事があるんだねデュラン。

一帯に響き渡った怒声にセシエン君がさあっと青ざめる。

おお、これもなかなかレアっばいぞ。

「何をしているセシエン！ さっさと来い！」

「魔王様お怒りじゃない？」

空中に浮かぶというお約束の格好のまま、普段の百倍はありそうなキラキラオーラ（しかも色は紫。悪趣味だ）を超サイ。人みたいに纏い、何かに向かってビームやら見えない波動（だ）と思う。いや、

見えないんだし分からんって）を撃ち続けているデュランを指すオシ。

「行ってきたら？」

「しかし、この状況でナカバ様をお一人にする訳には……」

「うむ、よしここに残ろう。オレが許す」

チキンとか言うな。

だって森が木とか土ごと一気に消滅してるんだぞ。

パンピーのオレが食らったら確実に死ねる。

美形に傍に居られるというのは屈辱だが、セシェン君背中だけ見ればまあ我慢できるレベルの人だし。いっそワンコ形態になつてくれればもつと助かる。そんな人間形態よりもっふもふの毛皮の方が絶対に良いって。

まあ、夏場に近寄ってきたら殺すけど。

だが、まあこれで盾は確保できたとオレが一安心していた所に全てをぶち壊すわがままキングの声が降ってきた。

「何をしている。さっさと従え」

従え、となっ？！

ああ、でもそう言えばこいつ魔王様だっけ。それにセシェン君はその執事だしてマテやその紫男。

「何だ」

「なぜに微妙にその右手の照準がオレ達っぱいんですか？」

「分からないか？」

こつちむいて喋ってる間にも次々に周囲へお盆サイズの魔法陣っぽいものを展開させて、方々に弾丸っぽいものをばらまいている環境破壊の申し子ことデュランはオレ達の方をみてニッコリと笑った。輝くような笑みだった。

「心配を取り去っておいた方が感謝されそうだからな」

「はいっ?!」

強制終了とオレ

本気で撃ちやがった。

お前は鬼か！ あ、魔王だっけ……じゃなくてさすがにこれは死んだ！

異世界にひまつぶしとかいうふざけた理由で呼ばれた上に、安心しそудとかいう意味不明な理由で勝手に殺された！

グッバイ皆さんさようなら！

来週からこの時間はウルト。Qの再放送が始まるよ！！

と、目の前でパンと音がして近づいてきていた死の予感があつさり消えた。

……へ？

「キューブの空間機能の一部だ」

相変わらず森林伐採、もとい森林消滅に励みながらデュランがこともなげにオレの疑問に答える。

「お前に害あると判断されたものは、自動的に触れる前に別の空間へ転移される」

「先にそれを言え！！」

じゃあ何だ？ さっきのショッピングモールでのピンチ……あれ？ あれってピンチだったっけ？ いやピンチだったよね？ 何かこれ見るとどうでも良い事っぽい気がするけどピンチだった。

ピンチだったはず。ピンチだったかもしれない。ピンチだったらいのになあ。

「じゃなくて何で黙ってたんだゴルア！ 返答次第じゃあタダじゃおかねえぞ！！」

思わずキャラ変わってるし、オレ。
それに魔王様は微笑んで、

「その方が面白いからだ」

「……。……セシェンさん。介さん、やっておしまいなさい」

「お気持ちはお察ししますが無理です……」

「それよりセシェン」

今あいつそれよりって言いやがった。

「ソレが無事だと分かっただろう。何をぐずぐずしている。あの馬鹿がしつこくてかなわん」

おまけにソレ呼ばわりかよ。

つとくに偉そうだなあお前は。反省する気ゼロどころかマイナスだろ。

「申し訳ございませんが、行つて参ります」

すまなそうなセシェン君。これで美形じゃなければ良い人なのになあ。

「うむ、我が護衛大儀であつたぞ」

そしてまだオレのキャラが戻ってこない。

おい、そろそろ帰ってこーいオレのキャラー。もう怒って無いから出ておいでー。

はあ。じゃあまあセシエン君も行っちゃったし、身の安全は確保されたつばいのでオレはここでのんびり見物でもしますかね。

どっこいせーと地面にヤンキー座りして、オレは周囲を見回す。
周りの森林地帯……元森林地帯はどこぞの魔王様のせいで大半が削られて視界は広々。行きは陽も差さぬ深き森って感じだったのが、今じゃどっかの露天採掘場のような感じだ。

しかし……。

何のかんのだ言いつつも自分最高俺最強つばい魔王様デランが、あんな風に声を荒げてセシエン君を呼びつけなきゃならない用事って何だろう？

実際魔王って確か魔界最強の称号じゃなかったっけか？

と、

「陛下おやめ下さい!!」

セシエン君の悲鳴。

嫌な予感。

ぼけっとしていた意識を奴らの方に戻すと、何故か空いっばいに広告が出ていた。

いや、広告じゃなくて何かの文字？ ホログラムっつーか。

「塵に還るが良い」

デュランの声。
文字が降ってきた。

強制終了とオレ（後書き）

【作者後記】

いつの間にかユニークアクセス総計が1000を超えてました。（正確には1359）

ありがとうございます。

うちいくつが自分かは考えるまい、うん。

本日も既に250人のお客様においで頂いてます。

さて、まだまだ魔王様のターン、続きます。

感謝をこめて 作者拝

次回予告とオレ

柏の森がデュランの家……っ！か屋敷？ 館？ の周りにはドーンと広がってる。

上から見ると完璧な円形なんだそう。

近くにはコンビニも無けりやATMも見当たらないなんて不便そうだと思うが、まあここには魔法とかいろいろあるし、住んでるのは何せ魔界最強（ただし性格最悪。顔は美形過ぎてこれまたアウト）の魔王様と、一応高ランクの魔族（隠しダンジョンとかで出てきそうな奴）でドラゴンでお世話の達人セシェン君（苦勞性属性付き）の二人だからあんまり不便さは感じないだろう。

まあデュランの方は無人島に放り出されても美形オーラを背負って優雅に足組んで座ってそうだし、セシェン君の苦勞は地理的なものよりむしろ主の問題児っぷりによるものだろうし。

なんて長々語ってみたけど結局何が言いたいのかと言いますとです、奥さん。

そのなかなか良い感じだった柏の森が全滅しました。

幹から葉っぱから根っこまで全部真っ黒に炭になってます。

炭になって無いのはそれより先にデュランのビームで消滅した所だけ。

おまいは巨。兵か。七日もかからず世界を焼き尽くしそつだなあ！

「……ふむ」

「ふむ。じゃねえ！」

「何だそこに居たのか。小さくて気付かなかったぞ」

「ちっさい言うな！ 人間の価値は身長できまるんじゃないんだぞ

！ つーが無視かよコラ！」

「冗談だ。落ちつけ」

眼に痛い紫のオーラを纏ったまま微笑するデュラン。殺意沸くなあ。

「というか何でそのオーラがさらにパワーアップしているのか小一時間ほど問い詰めたい。」

「ああ、これか……悪かったな」

デュランが呟いた途端、眩しかったオーラが普段の明るさより少し明るいかなぐらいレベルまでひっこんだ。

「どういう原理だ？ その背景効果。」

「セシエン、返せ」

「畏まりました」

「――帯を炭化させておいて平然としているデュランに、セシエン君がショッピングモールで使っていた黒い輪っかの入った箱を恭しく差し出す。そこから輪っかを取り上げて、デュランはそれを自分のエルフ耳に大量に着けている黒いピアスの群れの中に加え、パチンと閉じた。」

同時にオーラがネオン広告レベルからクリスマススの電飾レベルまで戻った。

「あー……」

「何だ」

「いや、どっかで見た事あるなーとは思ってたんだけどさ。ソレかーと思って」

「ああ、そうだな」

頷くデュラン。

てか、あれと同じモノが体中にジャラジャラつけてるのかコイツ。そりゃあ強くなるよなー。

「良いなあ……あ、そうだ。それ欲しい。頂戴」

ねだったオレにセシェン君が驚いたように目を向ける。

一方のデュランは面白そうだ、という感じで笑んでるだけだ。

「何？ ダメ？ 良いじゃん、そんだけいっぱい持つてるんだし。一個くらい記念にくれても」

この際出所がデュランだっという事実はまあ我慢しよう。水に浸して百回くらい洗えばきれいになるだろうし。

「まあ、構わんがお前が身につけても意味が無いぞ」

「え？ マジで？」

「魔力が無い者には何の意味も持たない代物だからな……まあ、後で一つやろう」

お金持ちは気前が良かった。

と、急にデュランの眉が片方だけピクリと動いた。紫の目が細くなる。

「もう復活してきたか……」

「何と言っ……」

「え？ 何が？」

もちろん最後のセリフがオレ。

何か二人の視線が同じ方向を向いている。
てか、そう言えばそもそも何でこんな騒ぎ（森林一ツ丸焼け）が
起ったのか原因まだ聞いてないや。

しかしオレはすぐにそれを知る事になる。
黒く燃え尽きた死の森から立ち上がったその姿。
それは、まさしく。

……次回に続く!!

これ、やってみたかったんだよねー。

次回予告とオレ（後書き）

【作者後記】

ここのシステムって良いなあ、と思ったことの一つ。

お気に入り登録して下さった方が他に読んでいる小説へのリンクが出る事です。

私自身は中華ファンタジーの某方の小説が縁でこちらを知ったのですが、他の方の小説が読み放題なんて……。

軽度の活字中毒の私にはたまりません。幸せです。

以上雑談でした。

皆様への感謝をこめて 作者拝

某ゴキとオレ

今年、オレは多分厄年に違いない。

なんでかつつーと、すぐそこに三人目が居るからだ。

何の三人目かって？ オレがこの世で最も嫌いなタイプの三人目だ。

中世ヨーロッパ貴族風のフリル衣装を着て、腰にはRPGで「魔法剣」に分類されてそうな剣が一つ。髪はお蝶。人もびっくりな金髪立てロール。顔は……まあ、何も言うまい。

それが今目の前でデュランに足蹴にされている。

「おお、麗しの私の陛下。今日も何とお美しい」

顔をぐりぐり踏まれながら恍惚とした表情で何かほざいていた。見なかった事にしよう。

「ナカバ、代わ」「ヤダ」

最後まで言わせるとでも思ったか、おろか者め。

いや待てよ。

考えてみればデュランは相当嫌がつてるみたいだし、ここで恩を売っておくか？

今のオレはキューブの空間なんたらのお陰で無敵な訳だし。

「交代したら元の世界戻してくれる？」

「……」

オレの言葉に渋い顔をするデュラン。

ちなみにつま先で金髪立てロールの顔面を踏ん付けて、なるべく自分から遠ざけつつ見ないようにしている。

よっぽどイヤなんだな。

何だっけ？ 確か容姿を褒められるのが嫌いだとか何だとか。こりゃ筋金入りだな。

ついでに言うのと踏まれている方はそれでもさっきから「相変わらずお美しい」だの「私の魂を奪った罪深きお方よ」だの「御身を彩る光にすら嫉妬してしまう私はどうしたらよいのでしょうか」だの何だの、鳥肌が立つような賛辞と齒の浮くような愛のセリフを吐き出し続けている。

うむ、なかなか根性あるぞ。

「てか、誰？」

「ゴキブリだ」

「金髪縦ロールなこゆい顔のゴキブリ？」

「違います！ とんでもございません！」

慌ててフロアに入るセシェン君。

「この方こそ夜歩く者たちの中でも最高位にして、魔族の中でもつとも優美であるとされるヴァンパイアの系譜を引く四大卿の一人ヴァンパイア・ヴィスカス・ヴェルレイン・ヴェーレンハウゼン・ヴォイロツシュ・ヴェルゼンスタイン・ヴァートリツヒ・ヴィンセント・ヴォイド・ヴァルティウス・ヴァー吉ニア・ヴィルヘルム・ヴィヴィリア・ヴァルバディアス・ヴォル・ヴォルヴォレ・ヴォヴァリヌス・ヴィリウス・ヴィレイゼン卿です」

……。何だっけ？

「ヴァンパイア・ヴィスカス・ヴェルレイン・ヴェーレンハウゼン・

ヴォイロツシュ・ヴェルゼンスタイン・ヴァートリツヒ・ヴィンセント・ヴォイド・ヴァルティウス・ヴァージニア・ヴィルヘルム・ヴィヴィリア・ヴァルバディアス・ヴォル・ヴォルヴォレ・ヴォヴァリヌス・ヴィリウス・ヴィレイゼン卿です」

何そのごごーのすりきれ。

「ヴィスカスで切っておけ。日が暮れる」

「それよりよく噛まないで言えたねって事誉めてあげたいんだけど」

「いえ、略式のお名前ぐらいは正確に申し上げてしかるべき事でございますので」

「さらに長いのか。しかも何か似たような名前がずらずら続いて何が何やら……」

「だから言っただろう。ゴキブリで十分だと」

イヤそうにぐりぐりと金髪の顔を踏みにじりながらデュランが腕を組む。

「しぶといところと言い、しつこいところと言い、倒しても倒しても沸いてくるところと言い、どう考えてもこれはゴキブリだろう」

「てゆうかそもそも倒して良い訳？ 魔界のお偉いさんじゃないの？」

「どうせ復活するから問題ない」

「陛下の炎でこの身を焼かれるなら光栄、むしろ本望です。ああ麗しの陛下……」

当事者間では合意済みらしい。

しかし……魔界の高位魔族って美形で男で変態ばっかだよ。

「いえ、ヴィスカス卿は陛下に関する事だけが少々特殊でございます

して……その他の事に関しましてはまともでいらつしゃいます」

小声でセシエン君が言う。

うん、でもそれってつまりデュラン関係はまともじゃないって言うてるって事気付いてる？

「まあ、陛下はあのように魅了なさるお方ですから……」

「ああ。あの駄々もれ無駄フェロモン」

「ふえるも……？」

アレ？通じない？

「あの紫の背景でキラキラしてる……小林幸。みたいな」

「ああ、陛下の魔力のことでしたか」

ああ、魔力だったのか……魔力だったのかよ！！

つまりなんですか？ あれは美形オーラじゃなくておどろおどろしい瘴気だったんですか？ どうりで戦闘モードだと目と心への痛々しさ加減が増す訳だ。

ん？ ってことはさっきの輪っかは……。

「あの黒いじゃらじゃらって魔力の制御装置っぽいもの？」

オレの問いにセシエン君は困ったように黙って笑っただけだった。その笑顔が「わたくしの立場からでは何とも申しあげかねます」と語っている。そっか、一応執事だったよね君。

しかしあの反応って事は当たらずとも遠からず、か。うーん、もし魔力の制御装置だって言うなら確かにオレには何の意味もないなあ。デュランも「はあ？お前じゃ意味ねえし。ムダムダ、ざまあ」的発言してたしなあ。

え？ 言い回しが違うんじゃないかって？

あの気障つたらしい口調が真似出来る訳ないじゃん。
文句あるなら試しに自分でやってみろ。その後自己嫌悪で死にたくなっても知らんけど。

そうこうしている間に急にあっちの方（紫フェロモン、あらため紫魔力と金髪ゴツキー）の方が静かになった。

あー、やっと終わったかーやれやれ。とか思ってたオレが甘かった。

うん、終わってたよ？ 終わってた。

ある意味、色々終わっていた。

某ゴキとオレ（後書き）

【作者後記】

書いている間に今入力した文字列が最下行に移動します。

変換すると記入している列が入力フォームの下に消えます。

書いてると画面がガクガク上下して、列が見える見えない見える見えない……ものすっごい書きにくいです。

そんな愚痴はさておき更新が滞ってる中訪れて下さる皆様ありがとうございます。

取り敢えずまだA42枚分は残っているのでちまちま入力して行く予定です。

よろしくお付き合いいただければ幸いです。

パノラマ風景とオレ

男女……中性的な美貌の男が貴族風の金髪美形を目の前に跪かせて、あまつさえ自分の指先を舐めさせてる。

一部の皆さんなら悲鳴あげて写メとりまくるようなシチュエーションなのかもしれない。

が、オレにとってはただひたすら現実逃避したい状況でしかない。よってサーチアンドデストロイしてもこれは正当防衛って事になるに違いない。

よし、GO！

「なああああにやっとなんじゃああ——！」

叫びつつ飛び蹴り……はオレの能力的に無理なので、ここはシンブルに膝かっくんをかました。びくともしなかった。

……。

うん、分かってたけどね。

ちくしょうこいつ何でもありだな。

おまけにその顔か。

いっぺん死ねばいいのに。

「どうした？ かまって欲しかったのか？」

「んな訳あるかいっ！」

「なら下がって大人しくしている」

言ってオレの首根っこをつかんで後ろにさげるデュラン。まてやこら。舐めてんのかテメエ。

てか下ろせー！　こういうのはもつと別の奴のお約束だろうが！
おいこらー！！

ん？　あれ？　なんか金髪ゴキがものすっごい顔してこつち睨んでるんだけど。

「……余計な事を考えるな。また不興を買いたいのか？」

何をー？！

……って今の声誰だ。

オレはあちこち見まわしてみるがセシェン君とゴツキーと変態魔王以外見当たらない。

しかも微妙に寒くなって来てるし。んー？　空も曇って無いし……風邪でも引いたか？

早く帰ってパプ。ン飲まなくちゃ。

「さて」

デュランがペイツとつまみ上げていたオレを地面に落とす。
うおっ！　びびったじゃねえか。離すならそう言え。

「セシェン」

既に変態こつこはやめたのか、金髪ゴキから指を引っこ抜いたデュランが何事も無かったかのように振り返ってセシェン君を呼ぶ。
それにセシェン君も心得た様子でどっかからフィンガーボールを取り出す。いや、マジでどっから出したんだ。

「お疲れ様でございました」

「全くだ」

「疲れた陛下のお姿もまた美しい……」

「煩い消えろ」

指を洗いながら吐き捨てるデュラン。
振り向きもしねえよこいつ。というか表情が明らかに「うんざり」と言っている。

「二度と現れぬと誓う代わりに今の一秒を得るか、それとも今すぐ立ち去り次の情けを乞うか決めろ」

しかもなんか酷めな二択。

しかし金髪ゴツキーことヴィスカスは恭しく頭を下げて、貴族っぽく一礼しただけだった。

「陛下の御心のままに」

瞬間姿が見えなくなる。

「うお、消えた！」

「移動したんだ」

うるさい。どっちだって同じだろうが。

「やっと出て行ったか……やれやれ」

「まさか本日いらっしやるとは……」

「セシエンがさっさと来ないのが悪い。お陰で無駄に疲れた」

そこで何故かセシエン君に責任転換するデュラン。

大人げねえ……美形だからって許されると思うなよ。むしろオレは美形だからこそ許す気無いが。

「それよりさあ……なんで360度視界くつきりパノラマ風景地平線も見えるよヴァージョンになってる訳？」

「ん？ 消したからな」

「移動したんじゃないくて？」

「いや、この場合は消滅で正しいな」

「……なんで？」

「あのゴキブリが……」

「お前がやったんだろうがあっ!!」

そこでも責任転換か！

「ああ……そうだな、現象は私だ。だが原因はゴキ」

「現象は、じゃねえ！」

「先刻から何をそんなに騒ぐ？」

「や・か・た!!」

ここで思い出していたきたい。

この柏の森、デュランの家を中心に円形に広がっているやつだった（過去形）。

その森が全方位見通し抜群ってことは館まで燃え尽きてんじゃん。燃え尽きてんじゃん！

どうすんだよ！ 野宿か？ 野宿なのか？！

「なんだ、野宿が良いのか？」

「読むな！ 読むなら正しく読め！ 読解力磨け！」

「ふむ、しかし三人分のテントか……何処にしまったかな」

「野宿決定?!」

しかも三人分のテントって、まさか三人で一つ屋根の下とか言い出さないだろうな。

何その拷問。絶対イヤだ。それに今日はお風呂に入るんだ。さっきそう決めた。

「露天風呂ぐらいなら作れるぞ？」

「**どんだけ待てと？**」

てゆうかこの辺温泉の元あるんだろうか？

「無ければ作れば良い」

「前向きに聞こえるけど、ものすっごいアバウトかつ当てずっぽうなことじゃね？ それ」

「いえ、陛下は……」

「まあ、お前があまり気が載らないなら前の状態で構わないか」

パチンと指を慣らすデュラン。

お、今度は暗くなった。……じゃない、これは、柏の木？　って

「さて、帰るか……」

つてスルーかよ！ つつこめよ！

「セシエン。疲れた、乗せていけ」

「畏まりました」

「お前も乗れ」

「いや……いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや……ちよっと待て」

「嫌だ、
疲れた」

さくつと断られた。

「まあそこで野宿したいのならば残っている。行くぞ、セシエン」
「はい」

セシエン君もそこで頷くなつて！

で、結局ワンコ形態セシエン君の背中に乗っけて貰ったオレだった。

パノラマ風景とオレ（後書き）

【作者後記】

例の「入力中の行が見切れる」現象ですが、どうもWebページの文字サイズ設定に問題があったようです。

文字サイズ小が好きなんですけどね。お騒がせしました。

気付けばお気に入り登録が18件に、評価は大分前に2人目の方にいただいてました。ありがとうございます。

特に明記した事はありませんが、誤字脱字の指摘、ご感想、叱咤激励なんでも基本歓迎しております。

とりあえず、今回はヴィスカスさん登場させるところまで終わりました。

やりたいイベントは最低あと1つはあるので、まだまだ続きます。どうぞ最後までお付き合いくださいませ。

作者拝

チートとオレ

「で……何で森が復活してるのさ」

「復活させたからな」

「蹴落とすぞ」

不毛な会話だった。

特に絶対に蹴落とせない辺りが。

というかセシェン君は後ろ姿はまあ一応まともなレベルにギリギリかすってる感じだったけど、こいつはアウトだな、とかオレはデユランの後ろに座りながら思う。

何この黒髪。

銀髪より色的によつぽど普通のはずなのに、シャンプーのCMによつてほどの艶サラつぷり。

ガム持ってたら即くつつけてやりたいくらいだ。

全部枝毛になってしまえ。

「陛下の魔法ですよ」

後ろからデユランへ呪いをかけてたオレに、犬型セシェン君が説明してくれる。

「陛下は大抵の者は一瞬で復元する事が可能でいらつしやいます。あの館も今までに何度も消滅しておりますが、状態は過去から現在に至るまで殆ど変化しておりません」

陛下のコレクションが増えたぐらいでございましょう、とセシェン君。

てか今までに何度も壊れてるのか。
その落ちつきっぷりは数々の破壊の末に築き上げられた一種の悟りですか。

しかし。未だに目の前のコレが信じられん。
きれいさっぱり消えたのが元通り、ねえ……うーん……。

「あの容赦ない破壊っぷりはこれが原因か」
「なるべく被害は抑えているぞ」

「どこがっ?!」

「あのゴキブリが悪い」
「だから責任転換すな」

うん、でも大体分かった。

つまりあのショッピングセンターでの不幸な事故を直したのと同じ事を、このあたり一帯にやってのけたってことか。
しかし、何でもありって言うか、何このチート能力。

「魔術だ」

面倒くさそう、と言うか明らかに言い方が投げやりなデュラン。
感じ悪いな。

「魔法じゃなくて?」

「そんな面倒な手続きを踏む気は無い」

「面倒なの?」

「陛下が変わってらっしゃるだけですよ」

苦笑いしているのが声で分かるぞセシェン君。
デュランは例によって全く気にしてない様子だけどね。あんたが

とことんマイペースだっけ言うのはもう分かっているから別に良いけどさ。

「じゃあ魔術って何？」

「……疲れているんだが？」

「オレも疲れてるんだけどね。誰かさんのせいで」

笑顔で返してみると、振り返った紫の目に見下された。

見下された。

見下された。

見下された。

「物理的にお前の方が低いのが悪いのでは……？」

「うつさい、縮め」

「面倒だ」

面倒なのか。てか出来るのかよ。

「出来るぞ……」

ダルそうにデュラン。

「魔術で？」

「そうだな」

「何でもあるんだな」

「そうでもないがな」

「魔法の上位版みたいな？」

「逆だがな」

「……。もしかして眠い？」

「眠い訳ではない」

嘘こけ、この野郎……。

予想通りふつかふかのセシエン君の背中に寝そべって、目を閉じてる時点でどうみても眠いんだろうが。

セシエン君が気遣ってくれてるお陰で揺れないし、寝心地良さそうだけどさ。

だけどさ！

「魔術って何」

「魔法の下位概念」

「……つまり？」

しつこく食い下がってみた。

いや、正直興味無いけどむかついたから。

「ゲームソフトの作成。ソフトが世界」

「……チート？」

「げえむそふとは？ ……いえ、失礼致しました」

セシエン君何気に聞いてたんだ。

デュランもそう思ったのかふつと息だけで笑う音がある。

「後でお前に説明してやっても構わんが、お前の嫌いな人間の技術だぞ」

「けっして嫌ってはおりませんが……」

曖昧に言葉を濁すセシエン君。

ふむ。

「まあ、お前に対する説明と、セシエンに対する説明を同時にやる

のもやぶさかではないが……後でな」

「どうやって同時にやるんだ」

「間に仕切りを立てればよいだけだ」

酷く大雑把な説明だった。

てかあんたの口は一つだろうが。

「お前たちの認識している音声など所詮は空気振動だ。口に頼る必要はない。何ならばセシエンには魔力を介して伝えても構わない」

「……セシエン君、今の翻訳して」

「わたくしに仰られましても……強いて申し上げるのならば。陛下ならば可能と言う事でございます」

「なんだこの無駄な感じに万能な設定」

「魔王らしくて良いだろう」

今、明らかにテキトーにコメントしたな。

「なら魔王らしく崇められてれば？」

「それは嫌だ」

「子供か！」

「眠い」

「しかもやつぱり眠いんじゃないか！」

「お静かに」

セシエン君、普通そこでデュランの味方する？

なんだよ、オレの味方はどこ？

まあ、美形の味方とか正直いらないけどさー。

良いよ。オレにはスライス君が居る。

おお心の友よ。今度リサیتالにでも招待するよ。オレ、カラオケとか嫌いだけださ。

……って、本当に目閉じてるよデュラン。マジで寝てる？

「寝て無い」

「なんだそりゃ」

「お前もとりあえず黙っておけ。ドラゴンの中でも高位の白銀狼の背中に乗る機会など滅多に無いぞ。普通は無礼極まりない行為だからな」

その無礼極まりない行為をセシェン君にやらせているのはお前だ。と、思ったけどこのもっふもふ&ふっかふかの毛皮ベッド（移動式で頭付き）が居心地いいのは確かだし。ま、いっか。

とりあえずオレはその日は家までセシェン君の背中で日向ぼっこしつつ帰る事になった。

チートとオレ（後書き）

【作者後記】

PVが18,000突破、ユニークが2,000突破しました。

（総計）

ありがとうございます。

ところでこれ、下書き保存とかできないんでしょうか？

毎度時間切れで落ちるたびに最初から書きなおしてるのですけど

……。

ごっきーことヴィスカスさん登場の話など、5回ぐらいやりなおしてるはずです。

もう一度機能見直してコンスタントに新作書けるようになっておきたいですね。

作者拝

夕食とオレ

夕食。

今回は一人で良いらしく、呼び出される事は無かった。
デュランは部屋でごろごろしているそう。

「セシエン君も食べてけば？」

「いえ、仕事がございますので
「そっか」

さっそくお風呂に入って、買った服に着替えて気持ちもさっぱり
しちゃってるんだけど、独りで食事ってなんかなあ。テレビあれば
良いのに。

「セシエン君は忙しいんだね」

「働いている方が落ち着きますので、陛下にお願いして今のよう
な形にさせていただいております」

典型的ワーキングホリックか。

しかし、こんな職場環境じゃあ、そのうち精神病んでぶっ倒れる
気がするんだが。

「お願いしてつてさあ……実際セシエン君一人で切り盛りしてる
でしょ？」

「左様でございます」

「それ、お願いって言っ？」

普通言わんだろ。

迷惑かけられーの、ワガママいわれーの、オレならとっとと退職

願出してるね。

「つかそもそも来ない。

初対面の時点で牛乳拭いたトイレ用雑巾投げつけて出ていく。
むろん、狙う先は顔面で。」

「……」

あれ？ セシェン君が停止している。

「貴方のその自信はどこから来るのでしょうか……」

「いや、ただ生理的にああいうのダメで。セシェン君も正直ちよつと」

「……はあ」

まあ、面と向かって「生理的に無理です」宣言されたんだからその反応で当然だな。

「まあ、魔族と人間ですしね」

いや、問題は顔です。主には。

毛先までおぞけが走る状態などつかの馬鹿魔王も居るけど。

「わたくしも本音を申しあげれば人間は好きではありません。前にも申し上げた通りです」

それでも仕事はしっかりやるんだから、プロなんだよな。こついつところか。

「陛下にはこちらに置いて頂いている恩もございます」

「そこは卑下しすぎだと思っけど……」

「わたくしのしている事など、陛下にとっては造作も無い事ですよ」

いやいやいやいや。

手を顔の前でバタバタと振りまくったオレに、セシエン君は「本当の事です」と苦笑する。

「わたくしがこちらに参りますまで、陛下はお一人ですべてなさってましたので」

「いや、でもセシエン君って使わない部屋までピッカピカに磨いたりとかしてるでしょ？」

「陛下から伺ったのですか？」

「うんにゃ、勘」

君はそういう人だ、セシエン君。

A型（推定）。

「そうですか……貴方も陛下に選ばれた方、でしたね」

イヤそっちの方向で納得されるのはものすごくイヤなんですけど、
というかどんだけ陛下大好きなんですかセシエン君。

突っ込むと怖い事になりそうだったので、取り敢えずおれは「とにかく」と話を戻す。

「デュランってどう見ても興味無い事には無関心って言うか、こんな無駄にばかりかい家持ってたってせいぜい二部屋しか使って無かったんでしょ？ 多分」

「一応魔界でも由緒ある館なのですが、陛下と同じような事を仰い……いえ、何でもございません」

以心伝心。目は口ほどに物を言い。

熱い視線に込めたオレの思いを汲んでくれたセシェン君はきっと有能な執事さんだと思う。

「しかし、わたくしが一時間で成す事を陛下は一瞬でなさる方ですので」

「一瞬って……っというに世の中の不公平の極みだなあいつは。それ例の魔術って奴？」

「さようでございます」

陛下の指パッチンか。

指パッチンで一人コンクリート詰めにして海に沈めるお偉いさんの話なら知ってるけど、指パッチンで森が蘇るとかは聞いたことなかったなあ。

どんな緑の指だよ。

「魔術って何？」

話題に出たついでに、夕方にデュランにはぐらかされた疑問をセシェン君に振ってみる。

まあ、主の事だから話せません、と来る気はするけど。

「いえ」

お？

「わたくしも実はあまり存じ上げておりませんので……」

陛下はご自身の事は最低限しか教えて下さいますので。と、複雑な表情のセシェン君。

なんか珍しいな。適当にごまかすかと思ったのに。
ふむ？

「あー……あれじゃね？ めんどいから」
「は？」

「いや、デュランって興味無い事とことん無視っつーか、やる気無い事はしないってゆうか、むしろしたくないからしませんとか、マジでこのわがまま五歳児だてめえ、ふざけんな、わがままにも程があるだろ、顔が良いからって皆が許すと思うな」

……あれ、セシェン君の顔色が悪い。

「疲れてる？」
「……イエ」

何か緊張気味？ なぜに？ WHY？
魔族なんだし堂々としてれば良いじゃん。美形だけど。……美形
だけど。……美形、だけど。

だめだよっぱり腹立つ。
そりゃあこっちはひんそーな人間のガキですよ。ひんそーですが
何か？ ひんそーで何が悪いチクシヨウ。

「……………」

「あ、で何の話だっけ？」

「お疲れの様子ですのでこれで失礼致します」

ものすっごい早口で言ってまわれ右して出てゆくセシェン君。
どうしたんだろ。

やっぱ執事だと忙しいんだなあ、きつと。

しかし、やって来て二日目での濃くなってゆく。

探しものとオレ

三日目の朝。

「ぎゃああああー!!」

「おや、奇遇だな」

「壁すり抜けて出て来んなあっ!」

何でもありかよ!

目の前の廊下の壁から普通に歩いて出てきたデュランにオレは全力で叫んでいた。

ちなみに反射的に殴ろうとして、逆につまづいてこけそうになった所を訳分からん力で修正された。

これも魔法ですかー、そうですかー、余裕ですかー。

「これか? これは壁では無い」

いず でいす あ うおーる?
のー いっ と いずんと。

「はい?」

じゃあなんだと?

「隠し通路だ」

「忍者屋敷かよ、ここは」

「ああ、つり天井もあるぞ」

「一応ダンジョンだったんだね、ここ……」

考えてみたら魔王^{ラスボス}が居る訳だし。

「いや、ただの趣味だ」

「死ね」

朝から挨拶抜きでこんな心温まる会話を交わしてみたりしたが、隠し通路かあ……気になる。

「どれどれ？」

ノックの要領で手をやってみるとスカッとした手ごたえがして、手首まで壁に埋まった。

「ほんとだ、何も無い……」

「さっさと引き抜いた方が良いぞ」

「何で？」

「抜けなくなるからな」

「先にそれを言え！！」

あぶねー。館のオプションになる所だった。

蠟人形にしてやろうか？

いえ、お断りします閣下。

「この向こうって何かあんの？」

「俺のラボだ」

「へー」

ラボってなんだったっけ？

「研究室だ」

「何の？」

「遊びの為の、だな」

「……」

「ん？ 空腹か？」

わざとやってんだろっ、てめえ。

まあ、実はまだ朝ご飯食べて無いからお腹は減ってるんだけどさ。
うん。

「あんたも食って無いんだろ？」

「俺は気分が乗らないから食べたくない」

またセシエン君が泣きそうな事言っなあ……。てゆうか、

「お前は幾つだ」

「24歳だ」

「嘘こけえっ！！」

どんなサバの読み方ですかそれは。

「昔はな」

「そりゃ昔は誰だって0歳ですよ」

オレもね。

……って、もしもーし？ 何さっきからガサガサとコーヒーマイルとか用意してるんですか？

「珈琲を作る準備だ。そんな事も見て分からないのか？ 可哀そうな思考能力だな」

「廊下のと真ん中で始めるな。そしてその笑顔を止めろ」

「場所が気に入らんなら変えるか？」

パチン、と指が鳴って場所がどっかの厨房っぽいところに変化する。

「さてと……」

「やばい、何だろっこの胸の奥から湧き上がってくる感情……そうか、これが殺意と言う奴か」

「ん？」

「こう……口の端に指突っ込んで、左右にぐいーっとかしたい」

「変わった自虐プレイだな」

「お前にだ！」

「やめておけ。一応犬歯があるからな。指を切るぞ」

冷静に諭された。屈辱だった。

「……って、犬歯？」

「これだ」

「いやだみたくないやめろへんたい」

「……何だそれは」

不本意そうなデュラン。

あんたみたいな奴が唇に指をあてるとかするのは、ウチの国では公然猥雑罪っていう犯罪なんです。

大体が艶めかしく舌とか動かすな。気持ち悪い。

「……。まあ、良いだろう」

肩を竦めるデュラン。

「まあ、とにかく……ディアヴォロスの犬歯はどの姿になっても残る特徴だからな。迂闊に触れるな」

「へー……変化してもそれで見分けられるってことか」

「残存特徴と言ってな……一番多いのは色だ。セシエンの髪と目の色も残っているだろう」

「ふむふむ、あれってわんこが本来の姿なんだよね？」

「そうだな」

「じゃあデュランは……蚊？」

「何故それを選ぶ」

「え？ うざいから？」

「ディアヴォロスはお前たちのイメージする悪魔だと思えば良い」

ゴソゴソと厨房の上の棚を漁りながら言うデュラン。

何か探してるのかな……見てるだけならお腹をすかせた子供がお菓子を探してるのと大差ない感じ。

実際、結構中身幼いよな、こいつ。わがまま五歳児。

「豆が無い……セシエンの奴、どこに隠した……？」

「魔術で探せばいいじゃね？」

「それでは面白くない」

さいですか。

お前の行動原理はよく分かった。

「で？」

「ああ……ここには無かった」

「豆の話じゃねえよ！」

とりあえず蹴っておいた。

びくともしない上にこつちが倒れそうになった。

助けられた。

「……。やっぱ豆探す」

「ほう？」

「探して踏みつけて粉々にして畑の肥料にしてやる」

「実に地味な仕返しだが……それはやめてくれ」

珍しく頼まれた。ちよつとだけスツとした。

まあ、探すけど。実際踏みつけたらどんな反応するかちよつと興味あるし。

「てかさー、探してないで買いに行けば良いじゃん。あんたなら移動とか楽勝とか前言ってなかったっけか？」

「移動程度なら問題ないが、物質界でしか売って無いからな……俺があまり世界間を行き来するとシステムが狂いバランスが崩れる」

「魔王だからか」

「生憎な」

生憎、ねえ……。

「自分でなりたくなつたんじゃないかなかったっけ？」

下の方の棚を探しつつ、オレは聞いてみる。

「なりたくなつた」というのは昨日ショッピングモールでの追いかけっこの後、お茶しつつ雑談してた時に話の一つとして聞いた気がする。

魔王を倒せば、倒した奴が次の魔王。

継承によって受け継ぐ事もできるらしいけど、デュランは単身魔王城に乗りこんで前の魔王を殺したらしい。その場に居た何万もの

配下諸共に。

そう考えるとこいつは大量殺戮者、いや大量殺戮魔物なんだけど……「コーヒー豆の袋探してこっやってガサガサやってるところ見ちゃってるとなあ……」。

「それも、何となく面白そうだからとか退屈だからとか言う理由だったわけ？」

「まあ、色々と必要でな」

「ふうん……で、今はもう飽きたって？」

「そう言う訳でもない」

「なら我慢しろや」

生憎とか言うな……って、ん？

「あ」

見つけた。コーヒー豆の入ってる袋。

探しものとオレ（後書き）

【作者後記】

読者の方がキャラクターに感情移入するように、書き手もキャラクターの状態に引きずられる事があると思います。

物書きさんの知り合いがそう多い訳ではないのであくまで仮定なのですけど。

ちなみに、私はその典型例でキャラクターが体調を崩すと一緒に具合が悪くなり、ピンチにさせると気分が一緒に落ち込んだりします。基本的に立場は「キャラクター」>>越えられない壁>私自身」です。マイナス方向に引つ張られるとコメディを書くはずが悲惨な方向に話が転がったりするのでなかなか難儀な性質です。

まあ、つまりそのせいで暫く筆が止まってました、という言い訳です。

キャラクターの上手な調教方法等、ご存知の方がいらっしやいましたら尋までご連絡を。

心よりお待ちしております。

ご来訪の皆様と、物書きの皆様へ尊敬の念を込めて

作者拝

白い歯とオレ

おー、これが例の探しものか。
よし、踏もう。

「だから踏むな」

奪われた。

てゆうか、どうやって奪った。

「ヒントをやるう。身長」
「……」

つまり、身長の差イコール手足のリーチ差。
よし、呪おう。

「無駄だから止める」

ちぢめー、ちぢめーと視線に呪いをこめているオレに手を振りつつ、デュランはコーヒーマイルを取り出す。

何か、普段と同じにやけ面なんだけど、どこことなく嬉しそうだなあ。

「珈琲好き？」

「ああ」

「紅茶は？」

「嫌いではない」

「ならさあ、朝ご飯食べてあげたら？」

オレの言葉にデュランがぱちりと瞬く。
視線はぱちり珈琲に向いてるけど。

「無理だ」

「食わず嫌い……」

「お前が食べておけ。少しはセシエンの励みになるだろう」
「お前がまず食え」

何処までわがままこいてりや気がすむんだ、こいつは。

「顔が良ければ皆が言う事喜んで聞くとってんなよ」
「……」

そこできょんとするな、きょんと。

「何を馬鹿な事を……」

眉を顰めるデュラン。

「俺の顔などお前と大して変わらん……待て、豆を捨てるな、落ちつけ」

「貴様は……貴様と言う奴はー!!」

何を平然と抜かしてやがるんだこいつは！ どっか可笑しいんじゃないか?!

「お前が変だ」

「真顔で言っな！」

「お前が変だ」

「笑顔で言っな！」

「わがままだな。五歳児かお前は」

「お前が言っな！」

「先刻から「言っな」の連続だな……」

苦笑するデュラン。

よーし……そっちがその気ならこっちにも考えがあるぞ。

「しゃがめ」

「何故だ」

「しゃがめ」

大事な事なので二度言いました。

デュランはオレの言葉に怪訝そうな顔をしたけど、一応指した床に体育座りした。しっかり手にはコーヒーマルを確保したままで。

お前、そんなにそれが好きか。

ま、良いや。これで手が届く。

取り敢えず豆をザラザラとミルの中に入れてるデュランの口に指を突っ込んで左右に引っ張る。

「……で？」

この野郎。この状態でも十分美形顔ってどういう作りしてるんだ。

「……で？」

「えーと……」

「何だ。そんなに犬歯に興味があったのか」

「んな訳あるかいっ！……って、あ、ほんとだ犬歯すげえ」

いー、の状態だから良く分かる。ちょっぴり歯科医の気分。

ちなみにデュランの歯には青海苔もついてなければ、コーヒース

テインもついてなかった。

o r a 2 ?

「犬歯つーより、何か牙って感じだね」

「ディアヴォロスの種族特徴の一つだな」

ガリガリと入れた豆を挽きながらデュラン。

こいつマイペースだなあ。口を左右に居引っ張られた状態で一切抵抗なしだし。

「上下左右で合計八本かあ。奥は臼歯？」

「そうだな」

「あとは何かあるの？」

「あと？ ああ……他の種族特徴の事か。此処で脱げと？」

「死ね」

「ただの冗談だ」

蹴飛ばそうとしたミルをさつと救出してデュランが肩を竦める。

お前の場合、常識過ぎて本当にやりそうだから嫌なんだよ。てゆうか真顔で冗談言つな。笑顔も禁止。

「泣き顔ならば可能、と？」

「やれるもんならやってみろ」

「ふむ……お前では大して面白い反応も得られなさそうだな。却下しよう」

ぐいぐい！

減らず口を思いつきり左右に引っ張ってみた。これ以上ちっとも開かなかった。

くそう……。

ん？ 減らず口？

「そう言えばこんだけ引つ張ってるのによく喋れるね」

「別に口を使って話しては居ないからな」

うん？

「頭の後ろにもう一つ口があって……」

「食わず女房か？」

食わずぎらい魔王ではあると思う。

「音は空気振動だからな。スピーカーは口が無いが人の声を発する事が可能だろう？ あれと同じ原理でお前と話している。まあ、調節すればこういう事も可能だ」

言って空中を指先で弾く仕草をするデュラン。

ジリリン、と黒電話の音がした。へー。

「器用だね」

「まあな……さて、そろそろ口の中が渴く。離してくれ」

ふむ。

まあ、本人が何とも思っただけで無い状況でやる嫌がらせほど空しいものは無い。やめよう。

手を離すと「ありがとう」とデュランは言っただけで、座っていた床から立ち上がった。

うーん、何か調子狂うよなあ。

というか、さっきの反応といい、今といい、これはもしかすると

……。

「なあ、ばあさんや」

「何かね、じいさんや」

「自分の顔の評価ってどうよ？」

「お前の顔か？」

「お前のだ！」

何が悲しくて美形にこの十人並みフェイスの評価をされにやならんのだ。

「俺のか？」

「ソウデス」

「さて……別段、普通ではないか？ 目の色以外は」

……。

「おーけー。良く分かった。つまり馬鹿なんだな」
「何故そうなる」

心外そうだった。

こっちが心外だバカヤロウ。

「とりあえず何か疲れた……朝ご飯食べてこよう」

「食堂は向こうだぞ」

「案内しろやコラ」

いきなり妙な部屋に連れ込みやがったせいで方向感覚狂いまくりますよ。

おまけに此処どんだけ広いと思ってんだ。

「……」

「未練がましく珈琲見ない！」

「空間を繋いで行けばすぐだろうに……」

「お前と一緒にするな！」

黙れこの非常識。

世界の不条理と不公平の代表が言うな。

「……分かった、案内しよう」

諦めたらしい。

つて、その手にはミルを後生大事に抱え込んでいる辺り諦めて無
いな？ お前は。

「俺は珈琲が欲しかったただけなのだが……」

何度でも言おう。

子供か、おまいは。

白い歯とオレ（後書き）

【作者後記】

ふり仮名に迷います。

どのあたりまで普通に読めるのか迷います。

顰める（しかめる・ひそめる）は大丈夫なのか。此処^{こゝ}は読めるのか。励み（はげみ）ぐらいはOKなのか……。

どのあたりの年齢の方が読んでいるのかによっても変わりますし、かと言って降りすぎると文章がガタガタして読みにくい。

結果として特殊な読み（通常はそう読まない）以外はすべてふり仮名をすつ飛ばしたりしています。ダメダメです。

お気に入り登録が22名に増えてました。

心臓が止まるかと思いました。

幸いにしてノミの心臓にも毛は生えているようで生き延びる事が出来ましたので、この場で御礼申し上げます。

ありがとうございます。もうしばらくお付き合い下さいませ。

六分咲き桜を窓辺に見つつ、感謝をこめて

作者拝

なれそめとオレ（前書き）

誤字と読みにくい金髪ゴ……じゃなくてヴァンパイア・ヴィスカス
さんの説明を変更しました。

なれそめとオレ

ガリガリ。

ガリガリ。

ガリガリ。

空中でコーヒー豆が挽かれている。

コーヒーマルはそこに目に見えない動く台があるみたいに、デュランの歩調に合わせて手元の高さに固定されたままだ。

「ねえ、そのミルが浮いてるのって魔法？」

「魔術だ」

「その魔術使って、もっとパパッと作っちゃえば良いんじゃないの？」

「間の過程を省略すると味が落ちる」

「何で？」

「雰囲気足りない」

そんな理由かよ。

「もしかして出来ないとか？」

「いや、出来あがった物を出現させるのは可能だ。魔術だからな……」

……

「何でも作れるの？」

「基本的にはな」

ガリガリ。

ガリガリ。

ガリガリ。

……はつきり言おう。うっさい。

「何を言う。こう言うのが風情があつて良いのだろうか」

「邪魔。やかましい。うるさい。むしろ騒音」

「……。つまらん」

精神お子ちゃま魔王様（自称24歳）。

それでも何かしたのか、ガリガリ響いていた音はカリカリレベルまで下がった。

どうやら消す気はないらしい。

「譲歩したぞ」

「いちいち偉そうだな……」

「まあ、偉そうなのはデフォだ。魔王っぽいだろっ」

「だからその顔でデフォとか言うな」

「俺の顔の何が珍しいと言うのだ」

全部。

そう言いたいのを堪えつつ（オレって大人だ）、何やかんやで昨日聞きそびれてた事を聞いてみる。

今が良い機会っぽいし。

「そう言えばさ、話は変わるけど昨日のアレ、何？」

「どれだ」

分かつてるくせにはぐらかしやがった。そんなに嫌か。

「金髪ゴキ」

「セシエンが説明した。以上」

早口だった。

おとなげねー……本当にこんなんで魔王やってけるのかな？ そ
ういや、この人一日中好き勝手やってるだけで、魔王らしい事やっ
てる所見たこと無いぞ。ダメじゃん。

「なんちゃら卿だっけか。吸血鬼のお偉いさんだっけ？」

「そうだな」

「……いや、そんな嫌そうな顔でオレ睨まれても」

「ふむ」

ぱちり、と紫の目が瞬き一つ。

「そうだな、悪かった」

「うむうむ。素直でよろしい。許してつかわそう」

「ありがたき幸せ」

オレの言葉にくつくつと喉を鳴らして笑うデュラン。
前から思ってたけど、こいつ意外とノリが良いというか、俗っば
いと言うか……やっぱ魔王に向いてないよなあ。

「まあ……そうだな。きちんと説明しよう」

「おう」

「あのゴキブリはヴァンパイアの当主だ。ヴァンパイア自体が魔界
の有力貴族の中でも筆頭……悪魔種のトップだから、実質上魔界の
為政者の頂点の一人と言う事になるな」

「ふむ」

「セシエンがヴィスカス卿と呼んでいただろう。あの卿という称号
は魔界のトップの一人である証でな、奴の他に後三名のみに与えら
れている。彼ら四名を総称して四大卿と言い、魔王ですら彼らの承
認抜きに魔王となる事は出来ない。それぐらい重要な立場に居るの
だが……実態は俺のストーリーカーだな」

あんな変態なのに実はすごい偉い人、じゃなくて魔族だった。

「で、何でそんな奴がストーカー？」

「まあ、奴のプライドが裏目に出た……というところか」

またプライドか。

「プライドは嫌いかな？」

「今井美〇のプライドなら好きだよ」

格闘技のあれはちょっと、だが。

基本的にああ言うのに熱くなれないオレのようなタイプが、ああ言うので熱くなっちゃう人達に混ざると疎外感が半端ない。

「魔族にとってプライドってそんな大事なもんなの？ 人間と戦争したり、ストーカーしたりさ」

「まあ魔族にとって、と言うよりも立場の問題だな。高位魔族ならば大抵は何らかの上に立って他を指揮する立場にあるのが普通だからな。その立場に対するプライドが無ければ、それはただの無能だ」「ふむー？」

「プライドという表現が分かりにくいのなら誇りでも良い。或いは責任感、拘り……まあ、過ぎれば毒となるがな」

珍しくマトモっぱい事を言うデュラン。

「まあ、高位魔族というのはそれを除いてもプライドや自意識、拘りが強い者が多い。それで、奴の場合は俺の事が気に入らなかったらしいな」

「あー。醜い、だっけ？」

「良く知っていたな」

「うん。昨日お昼食べてた時にちよつと、ね」

吸血種のトップであるヴァンパイア——さっきの話からするに金髪ゴキ、が俺様の美技に酔いな！ とデュランを襲って返り討ちされたとか何とか。あれ？ 何か微妙に違うような……ま、いつか。

でも、その時の話がどうして昨日のようなおぞけを奮うようなべた付きっぷりになるのか。

しかも、何かキモイ！ とかの逆……容姿大絶賛だったような。

「ああ、この姿は公には伏せているからな。この姿で魔王だと名乗る事は基本的に無い」

「へー……何で？」

「反応が鬱陶しい」

いや、その性格を知ったら普通の奴は退くから大丈夫だと思うぞ。あ。でも、中身知った上で残るような奴は昨日の金髪ゴキみたいな際物ばつかるうからそれも微妙か。

「ちなみに、公用ってどんな恰好してるの？ スライス君なんか思いついて青褪めてたけど」

「ん？ お前が見たら……発狂するかもな」

唇の端を吊り上げるデュラン。

悪役スマイルが良く似合う。

「ぐろい？」

「まあな。生物の根幹に働きかけ、嫌悪感を引き出すような形に細工してある」

「ふーん……で、とりあえずその格好がゴツキー君には気に入らなかったんだ」

「ああ、公示……要は魔王交代の宣言の直後に殴り込みに来たからな。あの時はまあまあ愉快だった」

愉快。

愉快、ねえ……こう言つたまにする発言が何か、ああ一応魔王なんだよなこいつ、って感じ。

「なにせ、第一声が「お前は醜いから魔王に相応しくない」……だったかな。うる覚えだが」

忘れてんじゃん。

「正確には奴の声を思い出さたくないから、この記憶には封印をかけているのだから」

訂正。封印されていた。

「で？ 結局返り討ちにしたんだっけ？」

「ああ、消し炭にしたのだったか。半殺し……いや、九割九分六厘殺しぐらいか」

サラッと酷い事を言うデュラン。

「そこはやっぱり九厘にしようよ」

サラッと返したオレも実は結構酷いかもしれない。

「でもその割には今ピンピンしてるよね。昨日も焼いても復活して

「たみたいだし」

「ああ……まあ、一応四大卿の一人だしな。殺すと面倒だから懲りたら治して叩き出す予定だった」

ああ、例の指パッチンね。

「まあ、その治療の際に少々しくじって……今に至る」

「肝心な所を省略しやがった!!」

そこが重要なんじゃないか！

叫んだオレにデュランはすっかり細挽きになった豆を袋に移しつつ首を横に振る。

「説明を拒否する。理由は述べない」

「どんな打ち切り漫画だよ！ 伏線回収すらしてねえじゃんか！」

「まあ、俺が教えなくとも第二、第三の魔王が……」

「だから乗るなって。乗る前に教えろ」

「血を与えたら懷かれた。終わり」

「……」

「待て、珈琲には手を出すな。お前は鬼か」

「あんたには言われたくない。で？ 何か言う事は？」

「その辺りはまた後でな」

デュランが指を差す。

「食堂だ」

なれそめとオレ（後書き）

【作者後記】

にぎやー！。

お気に入りが増え、またお二方増えて、24人になってます。

……いえ、嫌がってる訳ではけっしてないのです。

恐縮なのとありがたいのと恐れ多いのと恐縮（二度言った）のことで、基本ビビりな私自身が少々逃げ腰になっているだけです。

ここは一先ず、ありがたやー、ありがたやー、と何処かの崇拜のよ
うにひれ伏して拜んでおきましょう。
ありがたやー！。

南無南無……

作者拜

押し問答とオレ

逃げられた。

一瞬目を離れたすきにデュランが居なくなっていた。

指の動きにつられてドアを見て、顔を戻したら消えていた。

勿論コーヒーマイルと挽きたて豆も一緒に。

辺りに香りがまだ残っているのが、さっきまで現場にホシデュランが居た証拠だ。

……あの野郎、逃げ足速いな。

ゴツキー話の続きも気になってるけど、本当はセシェン君に借り返したかったんだけどなあ。

幾らオレがチビで記憶力悪くて見た目も平凡だとしても、本気で食堂まで一人でたどり着けない訳じゃない。何ならキューブのナビゲーションシステムを使えば行けるし、セシェン君なら呼べば迎えに来てくれるだろう。

そこをあえてデュランに案内させたのは、食堂に連れ込む為だったんだけど……うーむ、失敗か。

セシェン君、また落胆しそうだ。
不憫な。

「おはようございます」

ドアを開けると相変わらずピシッとした姿のセシェン君が爽やかな笑顔で挨拶してくれた。

うむ、頑張れ不憫執事。

ん？ 何か今オレ見て顔色変えたような？

「陛下の所にいらしたのですか？」

「お、さすが鼻が利くね」

わんこだしなあ。

「いえ、ナカバ様の体に陛下の力が移ってますので……」

じつと穴が空きそうな程オレを凝視しながら言うセシェン君。

げ？ マジ？

やばい、即行で体洗いたい。

ご飯も食べたい（何せ、いつも全部ちょうど良いタイミングでお皿出してくれてるから。冷めるともつたいない）けど、デュラン菌付けたまま食事するのは嫌だ。うっかりオレまで紫の謎オーラが出るようになったら人生終わるしかない。

「と言う事でお風呂にオレは行きます」

「は？」

「ではではこれにてサラバ……お風呂お風呂」

「ナ、ナカバ様！ お待ちください！」

セシェン君が頭痛をこらえるみたいに額を抑えつつ、オレを引き止める。

見れば顔が真っ青だ。

「何？ 具合悪いの？」

「一度……お願いですから、これを」

セシェン君が取出したのは小さな箱。

見た目はあれだ。良くプロポーズとかの時に「君にこれを」とかキザいセリフを吐きつつ渡してそんな感じの指輪の入れ物の奴。黒一色の表面は多分ビロードだな。

「いや、オレはセシェン君の味噌汁とか作るの無理だし。あ、でもセシェン君のスープは美味しかったよ」

トマト味の野菜たっぷりスープ。ちょっと酸味があって良い感じだった。最後にカリッと焼いたガーリックトーストを残ったスープに沈めて、ふにゃつとなった所と一緒に食べると無茶美味かった。また食いたい。

「いえ、そう言う意味では……」

「あ、いや冗談だからマジな反応されても……。これ確かデュランの箱でしょ？」

「左様、陛下の……」

そこまで言って言葉が切れるセシェン君。

呼吸が荒くなってきている。

本当にヤバイ感じに顔が青い。朝礼の時によく貧血で倒れる女子が居るんだけど、その倒れる寸前の彼女のような顔色をしている。

「セシェン君。本気で大丈夫？」

「問題、ございません……それよりこれを……」

「いや、仕事熱心は分かるけどさ。まずはやすんだら？ セシェン君、結構肉体労働なんだしさ」

「いえ……今は、これを、お渡ししなくては……」

「いや、ぶっちゃけソレ要らんし」

魔王からの贈り物とか何か呪われそうなイメージあるしなあ。このIpodもどき、もといキューブは別だけだね。便利だし。

って、キューブ見てる間にセシェン君の顔色がさらにやばい事になってるよ。

えーと、こういう場合どうするんだっけ？

てゆうか、人間の常識が魔族に通用すんのかがまず分からん。

そもそもセシェン君、本当は犬だし。オレ犬飼った事無いし、小学校の「いきもの係」とかは面倒だからパスしてきたし、獣医の知識なんて当然あるはず無い。まあ、手っ取り早く言えばごくふつーの学生さんのオレに具合悪くなったワンコの対処法とかさっぱり分からんって事。

えーと、えーと……いや、やっぱり考えても分からん。分からない物は仕方ないから諦めよう。

取り敢えず寝かせておけば何とかなるだろ。

「さーさー、回れ右して戻りましょー」

これで肩に手を当ててくるつと進行方向ひっくり返して押し戻す、とかできたらカッコイイ。カッコイイが、180越えのセシェン君の肩押して方向転換とかオレには無理なのでとりあえず腹を押してみた。

さらに顔色が悪くなった。

……うん、考えてみれば具合悪い時に胃の上力いっぱい押されたらさらに悪化するよな。

「何か、ゴメン」

「それ、よ……り……こちら、を……」

むう、粘るなあ、セシェン君。

執事としちゃあ鏡なのかもしれないけど。

「デュランにオレがいらないって言ってたつっついてよ。どうせそ

の中身って例の輪つかでしょ？」

「左様でございます……」

セシェン君の声がレッドゾーンな感じになっている。
早く寝かさないとい。

……ってどこにつ？！

え？ えーっと、テーブルの上とか？ いやいや、それじゃ執事の活造りみたいな絵でシヤレにならん。それに皿とかどかしてる間にセシェン君がリバーズ起こしたら大問題だ。

そうすると床か？ いや、さすがに床はまずいだらう。
じゃあ天井？

「って何でやねん！！」

一人ボケ突っ込み。

っていかん、そんな事やってる場合じゃなかった。
見ると片膝床に着いた状態でかろうじて倒れないでいるって感じになってた。

おいおいおい。ヤバイ。今リバーズされたら確実にオレ被害者だよ。

「え、えーと……床で良い？」

「お願い、です、から……これ、を……」

「イヤそれはもう良いつて。それより休まないとセシェン君絶対まずいつて」

何か箱がオレと彼の間で行ったり来たり。

「お願いですから」

ぐっ、通しつけるセシェン君。

「いえいえ結構ですってば」

押し返すオレ。

「どうか、中の」

顔色がヤバイ。鉛色だ。目とか瞳孔が点になって、金色にぎらぎらしてて怖すぎるってば。

「あれを」

「いや、だから」

押し問答していたらオレの手に当たった箱がボンと落ちた。蓋が開いて黒い輪っかが転がり出る。セシェン君の顔がひきつった。

あ、何かまずい事しちゃった？

金色の獣の瞳がオレを見て、牙を剥いた。

押し問答とオレ（後書き）

【作者後記】

……な、何故にお気に入り登録者が29人に増えてるんでしょう（滝汗）

夢ですかね？ 夢オチですかね？（あ、喜んでますよ。嬉しいです。ただ恐れ多いだけで）

——などと若干逃避しつつ今晚は。尋でございます。皆様のお陰をもちまして、PV総計が3万、ユニーク総計が3,500を超えました。

こんな辺鄙な場所にありがとうございます。

誤字脱字の多い拙い文章ではありますが、どうぞ今後ともお付き合い願えれば幸いです。

作者拝

土下座とオレ

「大変申し訳ございませんでした」

セシェン君、平謝りの図。

「いや、こちらこそすみませんでした。マジで」

オレ、土下座の図。

お互いに面と向かい合って頭ペコペコ下げてるんだから、周りから見たら「お見合い？」的な光景になってるんだろうけどこれにはちゃんと理由がある。

肝心な所をすっ飛ばして説明をぶった切る、どつかの往生際の悪い魔王様ではオレは無いのでちゃんと説明しよう。

えー、さつきセシェン君に襲われました。

勿論貞操の危機的な話じゃなくて、どっちかつーと生命の危機みたいな？

いや、落ちつけオレ。若干混乱してるぞ。

こういう場合は順番に話の流れを追うのが一番だってじいちゃんも昔言ってた。

よし。

あのさ。ほらさつき、オレとセシェン君で箱の押し付け合いして

たじゃん。

で、あの箱が落ちた……いや、オレが落つことしました。
うん、ごめん。欲しくなかったから。

で、蓋がカパツとその拍子に開いて、中からコロコロっつと黒い輪っかが出ちゃった訳。

で……何かその時幻聴が聞こえたんだよね。プツン、って。
アレ多分セシエン君の我慢の緒が切れた音だと思う。

で、オレの後頭部が床に激突した。獣型の本性丸出しにしたセシエン君に正面から押し倒されたせいで。

そりやもうどーんと押し倒されたね。頭がゴーンって目の前星が飛んでたし。

あの時のセシエン君は確かにワンコじゃなくて立派な肉食獣……あれ？ ワンコも肉食か。まあ、あれだ。要は獣だったね。男はおーかみなのーよー、って奴。

ビーフジャーキーに飛びついた犬みたいに目が爛々としてて、本気で頭から丸ごと齧られるかと思った。

だってワンコ本体のあの牙の凶暴っぷりときたら「オレサマ オマエ マルカジリ」って雰囲気駄々漏れだったもん。

まあ、冷静に回想してみると、あれがオレにとって多分魔界来てから一番の生命の危機的状况だったんだろうけど、そんな絶体絶命のオレを救ったのは正義の味方でも無く、月に代わってお仕置きして回る女子高生でもなく、もちろん珈琲大好き魔王さんでも無く、コロコロっつと箱から転がり出た例の輪っかだった。

もはや目がいつちゃってたセシエン君にあの輪っかがちょこつと触れた瞬間、セシエン君の体から急に力が抜けて、ついでにその場にバツタリ倒れた。おまけに全身からバシャーっつと血が噴き出して部屋中スプラッタな事になった。

いや、どんな惨殺現場————ってゆーか、アレ見たらオレだって悲鳴上げちゃいますよ。

久々にビビりました。

心臓止まるかと思いましたよ。

あの状況で咄嗟に輪っかをセシエン君から離れたオレってけっこの偉いと思う。

自分で自分を褒めてあげたい。

で、オレの勇気ある行動でセシエン君は一命を取り留め、ついでに輪っかに触った事でオレにくつついてたデュラン菌もきれいさっぱり落ちたらしい。

まあ、オレの頭にはたんこぶができて、服は血まみれで、さすがに食欲も失せて、あんまりめでたしめでたしって感じにはならなかったけどね。

ついでに言うておくと、セシエン君の方は魔力を大量に失って人型には戻れなくなつてて、今は30cmくらいの白いふわふわ毛玉な子犬の姿になっている。

省エネモードだそうだ。

ま、オレから見てる分にはサン。オで売ってそうな子犬ぬいぐるみみたいにししか見えないけど。クラスの女子とか見たらキャーキャー喜んで抱きしめそうだ。今のセシエン君ならそれで潰れるかもしれないけど。

「酔つて度を失い、ナカバ様に危害を加えるなど……本当に何とか詫び申し上げれば良いのか……」

セシエン君、ほつといたら腹かつ捌きそうなくらいの落ち込みっぷりだった。

「いや、オレも悪かった訳だしさ。もう良いって」

あの輪っかさつさと受け取ればこんな事にならなかつたって事で、

要はオレがごねなきや良かつたって事。

それならそう早く言ってくれば良かったのに……。

「で、結局……えーと、コレって魔力を吸い取る道具って事で良いの？」

オレは指にはめた黒い輪っかをひらひらさせてみる。

それにセシエン君は「左様でございます」と頷く。

「実は危険物だったんだね……」

「はい。我ら魔族にとって魔力を奪われる事はすなわち生命の糧を奪われる事。死を意味すると申し上げても過言ではございません」

それでもセシエン君が生き延びてるのは元の魔力量が多かった事、オレが咄嗟に引き離れた事、あとコレがオレ用に精度を落として作った劣化版だからだそうだ。

劣化版かよ。何か微妙に釈然としないなあ。

「やっぱ劣化版の方が安かったりする？」

「いえ、これらは皆陛下ご自身が作成なさった物ですので、値段が付けられる品ではございません」

「え？ これデュランの手作り？」

「陛下は基本的に、身の回りの物はすべてご自分で作る方ですので」

美形で無敵で日曜大工な魔王……本当に無茶苦茶だなあ、オイ。

「それにしても、コレと同じっつか……もっとヤバイやつ装備してるんだよね、デュランは」

白い衣服に全身にちりばめた黒い輪の飾り。

劣化版でセシェン君が瀕死になるつつーのに、それを大量に身につけてるデュランって本当に何なんだろう。やっぱMの趣味があるんじゃないだろうか。

「いえ、陛下の場合は魔力の質が我らのようなものと違うのです」

もふもふ、わふわふなセシェン君がクッションの上にお座りした状態で首を振る。

「陛下の魔力はまさしく至高。極上の甘露のように芳醇で甘く、蕩けるように美味な魔力を潤沢にお持ちでいらっしゃいますので……あまりそのお力を周囲に広げては多くの魔族が魅了され、正気を失い、その魔力に耽溺してし、惑乱し、魔界は混乱の渦に巻き込まれる事になりますよう」

「あー、さっきのセシェン君みたいにか」

「お恥ずかしい限りです」

きゅーん、と頂垂れるセシェン君。

子犬姿でそれされるとちよっぴり罪悪感を覚えなくもない。

ま、つまりデュランと朝珈琲大搜索をやった際にデュランの魔力がオレに一部うつってしまい、それを嗅ぎつけたセシェン君がうっかりつまみ食い衝動に駆られた、ってのがさっきの騒動だったって話。

でもつまみ食いで頭からガブっとかされるたらこっちは良い迷惑だよな。

「デュランにもやっぱりガブつとやった事あるの？」

「とんでもございません！ そんな畏れ多い！」

「畏れ多いのか」

「陛下ご自身はその輪飾りもそうですが、あの高貴な存在感で他を

圧倒し寄せつけませんので……魅了される存在は多かれど、実際にお傍に寄れる者は少ないのです」

えーとつまり、飴と鞭ってことか。

魔力で引き寄せといて、存在感で威圧して遠ざける。なかなか難儀な奴よのう。

「何か魔力って本当に何なんだろ……魔族の主食だとか、テンプテーションだとか、話聞くほど訳分からんパープル・マジカル・パウーみたいなイメージになってくんだけど」

「仰る通りわたくしども魔族にとって魔力は主食ではございますが……あのようになんか常態でも魔力が色を帯びるのは陛下だけでございませう」

「そうなの？」

「はい、魔界を構成する最小単位たる魔力は通常は目に見えぬ状態で万物の内に存在しております。もちろん濃縮する、或いは属性を付加する事で目に見える形となりますが、あの色は『知識の頂き』オーリスが提唱した様に」

「ちよ、待つて待つて待つて」

「はい？」

「ごめんさっぱり分からない」

「……どのあたりが、でございましょうか？」

「え？ いや、なんて言うか全体的に？」

「……」

「あのー、その子犬姿で憐れむような視線向けるのはヤメテ」

美形ならまだしも、ミニサイズわんにそれされるときつい。

多分相当噛み砕いて分かりやすいように説明してくれてるんだとは思っただけだね、セシェン君だし。

が、いかなせんこの世界の常識はオレには常識じゃない。

当たり前のように出て来る単語が分からなかったり、分かったようなくつもりになっても内容が理解出来て無かったりする。

デュランはオレの世界の知識があるから、色々例をひいて説明してくれてたけどセシエン君に同じ芸当を望むのはかなり無茶ぶりすぎるだろう。つまり、行き詰り。

嫌な感じにお互いが沈黙してしまった。

先に態度を改めたのはやっぱりセシエン君の方だった。

「申し訳ございません。ナカバ様が異なる世界の方と存じ上げておきながら浅慮でございました」

「あー、いやそんなかしこまらないで」

子犬モードでそうやられるおと極悪人になった気分になる。

まあ、こつちがセシエン君の「真の姿」で、おまけにオレのせいで縮んでるんだけど。

むー、調子狂うなあ……。

土下座とオレ（後書き）

【作者後記】

お気に入り登録がお三方増えて32名になりました。ありがとうございます。

これは登録して下さった皆様に応えるべく何かせねば、と話を最初から読みなおしてみた所誤字が出るわ出るわ……
う、うん、直します。ちゃんと。そのうち（今直せよ）

テンポがいまいちな感じですが、次も子犬セッション君とナカバの話です。

説明が多くなるので、かつたるい方は読み飛ばしちゃってください。

……いや、でも読んでもらえたら嬉しいなあ、とかとか。

ぐだぐだ

作者拝

言い訳という名前のインターバル（前書き）

毎日更新挫折して誠に申し訳ございませんでした。
以下、状況説明

- 1 ・書いてる途中にPCの電源が落ちて消える
- 2 ・書いてる途中でうっかり窓閉じる
- 3 ・投稿したらサブタイトルが消えてて最初からやり直し
- 4 ・そして始まるセキュリティソフトのアップデート
- 5 ・何かもう色々で気力が尽きる……

あれ、可笑しいな。目から体液が……いや、出ませんけどね。気分です。

まあ、下書き保存しろって話ですね……特にあらかじめ書いていた奴と変更する場合は。

と、こんな調子で暫く立ち直れ無さそうなのでちらっと今回は息抜き挟みます。

人物紹介編&軽く裏話

言い訳という名前のインターバル

。ナカバ・マサキ

言わずと知れ……てると良いな。語り手の「オレ」。

話は主にこの子の視線で語られている。

セリフの端々から推測するにまだ学生らしい。小さいらしい。運動神経切れてるっぽい。

フルネームはナカバ・マサキ。

ナカバと呼ばれるのは実は嫌いだ、某魔王様がそんな意見を見無視して「ナカバ」と呼び、その執事君も当然のように主に従って「ナカバ様」と呼び、まあしょうがないので自己紹介で嫌々「ナカバです」と言ってる実はその辺空気読んでたりする人。

あきらめが良いとも言っ。

会話の隅々にネタが散ってる。ウォーリ。を探せ！と言う感じで探してみると暇つぶしにちょうどいいかもしれない。

ただし、何故そんなのを知っているんだというような古い年代のネタが結構多い為今時の若い子にはきついかもしれない。

ボケと突っ込みなら突っ込み体質。と、本人は言ってる。

どちらかと言うと折角ボケてもつつこんでもらえないから自分が突っ込みに回っているのかもしれない。

座右の銘は「美形は死ね」。でも美少女は別バラ。

男で美形で背が高く足が長い……と条件が重なることに殺意が増すらしい。

現在ワーストランキング2位がデュラン。

お陰で物語中で本当にデュランが美形なのか、無敵なのか良く分かんなくなってる。

○ディアヴォロス・デュラン

ディアボロスじゃなくてディアヴォロスな魔王様。

中性的な美貌、完璧に整った肢体、非の打ちどころのない容姿、色気を無自覚に振りまいているが別にサキュバスでも何でもない。

本人は自分の容姿には基本無頓着なので、それがナカバの怒りを買った。自業自得。

傍若無人、ナルシー、マゾヒスト疑惑、わがまま、食わず嫌い、精神年齢5歳児、ただし自称24歳、暇人、執事いじめ、愉快犯で誘拐犯、とナカバからの評価はボロボロ。

だが、真面目に評価するとほぼ神と呼んで差し支えない程の人。

比喻では無く指先一つで世界のあらゆる事象を好きに支配できる人。色々と思う所があるが、取り敢えず今はやる事が無いので不憫な執事をいじめたり、ナカバをからかってみたり、ゴキブリ退治にせいを出したりして時間を潰している。

根本は学者肌。研究者気質。技術屋さんなので思い立ったら自分でさくつと作成。

色々しゃべる割にけっこう肝心な事ははぐらかしているのは多分皆さんお察しの通り。

○セイリオス・セシェン・セイラム・セフィックス・シリウス

執事。常識人。不憫属性。良くも悪くも魔族的。

正式には白銀狼という従者のプロフェッショナル集団のドラゴン一族の出身。

銀色の髪に金色の瞳。爽やか系、正統派好青年。

本性は翼をもつ銀の毛並みの巨大な狼であって、けっしてワンコで

は無い。

あれはデュランがそう呼んでからかっているだけで、ナカバはそれに便乗しているだけ。

デュランとナカバの扱いが酷いせいですっかりただの苦労人なお兄さんになっているがこの人も本当なら凄い人。

デュランが例外的に身近に置いている唯一の魔族。

基本ご主人さま命だが、デュランに面と向かって意見出来る数少ない存在。

ただし、あくまで意見出来るだけで、聞き届けられる事はまずない。聞き届けられた場合はさらに状況が悪化する辺り哀れだ。相手が悪かったと思って諦めて貰おう。

美形の男でありながらナカバから（わずかだが）好意を受けるという偉業を達成している。

ナカバ&デュランのマイペース組だけだと明らかに脱線する話が無事ここまで来たのは一重にきっちりと律儀に仕事をこなす彼のお陰だ。

。ヴァンパイア・ヴィスカス・ヴェルレイン・ヴェーレンハウゼン
…以下略

ちらつとしか登場してないがこの後再登場の予定の魔族その1
名前が長いと言っなけれ。あれでも省略形である。

貴族だとみんなあんなものである。歴代魔王も以下同文。デュランが例外なだけ。

ゴツキーゴツキーと連呼されているが、この人も立派な美形男の仲間。

ある意味セシエン君以上に魔族らしい魔族。

金色の髪と紅色の瞳。名前から分かるように吸血鬼。

昔デュランの血を与えられ、それ以来他の血は不味すぎて受け付けなくなってしまった。その為、定期的に食事をしにデュランの元を訪れている。

そしてほぼ毎回デュランと追いかけてこを繰り返している。そしてそのたびに周囲に甚大な被害が出る。（ただし毎回デュランが一瞬で復元してしまう。エンドレス）

魔王信者。魔王シンパ。デュランを崇拜するあまり行動がストーカーと化している。

（ただしデュランは称賛の言葉の連呼が不愉快だという以外はいつでも良いので放置している）

えーと、ついでに一言。

嫌わないでやって下さい。けっして悪い人では無いのです。

○スライム・スライス・スランバース

ベーシックスライム。ごくごく普通の子。

スライムなので性別はありません。

セシエン君を見ては「おお、芸能人だ^{ドラゴン}」とか思ったり、魔王の事は畏れつつ敬ったり、いわゆる低級魔族のステレオタイプみたいな立場。

人間に対してわりと嫌悪感が少ない新世代の魔族。

ちなみにナカバは「キモ可愛い」「タイプだ」と絶賛していたが実際には評価は分かれる所だと思う。

スライムが種族、スライスが名前、スランバースが出身地名。

魔族の名前の最小単位がこの組み合わせ。

ちなみにデュランは出身が不明な為デュランで終わっている。

言い訳という名前のインターバル（後書き）

【作者後記】

評価103pt、お気に入り登録者数38名。

……何処の評価だろう？ とかマイナスな現実逃避はせずに素直に感謝するばかりです。

あ、ごめんなさい。ちょっと逃避しました。

画面を更新したら「ハズレ」とか赤字で出て、評価も登録人数も0に戻るとかありそうで……無いのは分かってるんですけどね。夢じゃないかなーと、今も（色々な意味で）思ってます。

この数字にきちんと自信と誇りと感謝を持って対応できるような物を書けるようになりたいものです。

皆様、本当にありがとうございます。

今はただ感謝することしかできませんが、いずれきちんとお返しできるように頑張ります。

作者拝

魔力とオレ

朝ご飯食べれなかったせいで、そろそろお腹と背中がくつつきそうです。

Q・どうしてお腹が減るのかな？

A・成長期だから！

まだまだ伸びる（はずだ）ぜ、オレの身長！

まあ、希望的観測はさておいて、セシエン君がもう一度ご飯用意してくれる事になりました。

ばんざい！

ちなみに最初に用意してあったご飯はセシエン君の血しぶきでトマトケチャップ色に変色した為、もったいないけどゴミ箱ポイポイと相成りました。

いや、幾らオレが普段「おのこしはゆるしまへんでー！」と思ってもオレは無理。

セシエン君は「陛下でしたら元の状態に戻せるのですが……」とか申し訳なさそうに言ってたけど、はつきり言っておこう。

だが断る。

一度あんな状態見ちゃってたら食べれません。

「セシエン君。皿ってこれで良いの？」

「はい、お願い致します」

子犬姿のセシエン君ではナイフを持ったり皿運んだり料理をするのは無理なので、出来合いのものでかるーくランチ的なものをする事になった。いや、魔力を使えば普通に出来る事らしいのだが、

こんなミニマムサイズになるまで弱ってるセシェン君にそれをやるほどオレ極悪人じゃないし。

まあ、卵を割れば5回に1回は殻を混入させるオレではあるが、皿を運んだりパンを切ったりするぐらいは出来るのだ。

「えーと、で何だっけ？ 魔力はつまり人間にとっての酸素みたいなものって事で良いの？」

「生きる為の原動力であり、この世界の大気中にも満ちておりますね……とは言え、目に見えるほどの濃度はございませんが」

クラッカーを缶から取り出して皿の上にザラザラーっとあけつつ尋ねたオレに、テーブルクロスの端っこを啜えて引っ張ってたセシェン君が顔を上げて返事をする。

「この大気中の魔力を集めて吸収するのはごく一部の魔族のみに可能な高等技術であり、それで生存を維持出来る者は更に限られます」

コホン、と咳払いするセシェン君。

ん？ 今の話の何処にそんなわざとらしい咳払いをする要素があったんだろう？

「しかし、呼吸で魔力を得るよりも食物経由での魔力の吸収の方がはるかに効率が良いのです。また簡易でもあります。よって多く魔族は主に食物から魔力を得る事で生存を維持しております」

「ふーん」

鼻先にセシェン君が乗つけて運んできたジャムの瓶を受け取りつつオレは相槌を打つ。

何々？ コケモモのジャムか。

コケモモ。

……コケモモって何？ まさか苔のジャムじゃないよね？ だったら嫌だなあ。

ちなみに今テーブルの上には他にチーズ各種（うち一つは蛍光黄緑色……チーズだよね？）、サワークリーム、スモークサーモン、生ハムとサラミ、レモンを絞りがけたエビのたたき、鶏のレバーペースト、茹で卵（大ききピンポンサイズ、白身が赤身）、アボガドディップ、トマトとバジル、蜂蜜、ジャム、バター、それから皮つきで洗うだけで食べられるちっちゃなオレンジやサクランボやキウイなど。

うむうむ、余は満足であるぞ。

さっそくクラッカーの上にサワークリームを塗って上にチビオレンジを乗つける。

「あ、そう言えば」

それを口に入れる直前で思い出し、セシェン君の方を見る。

……。テーブルの陰になって見えねえ。

「……あのさ、やりにくいから適当にその辺のつかってくれない？」

「いえ、しかし」

「下向きながらって食べにくいし」

食事中お喋り厳禁の家庭もあるが、うちはそこは大目に見る家だったし。喋る時は一部の魔王なんかは除いて基本顔見て喋るクセがついてるし。

取り合えず椅子を持ってきて、その上に箱やら缶詰を積み上げ、クッションを置き、その上にセシェン君をセットする。

よし。招き猫っぽくて良い感じだぞセシェン君。

思わず頭を撫で撫でしたら複雑そうな顔をされてしまった。あ、

ごめん。犬好きなんだよ。

気を取り直して席に戻り、手を洗ってから食事を再開する。

「そう言えば、さつき一部の魔族は仙人みたいに霞みだけ食べてればOKみたいな事言ってたよね？」

「いえ、大気中の魔力ですが……」

「デュランもそうって事？」

「陛下は少々特殊ですが、食事を必要となさらないのはそうですね」

「ふーん、セシェン君の料理美味しいのに勿体ないよね」

「恐れ入ります」

座布団の上で頭を下げるセシェン君。

「で、特殊って例の色の話？」

「いえ、それだけではないのですが……属性色以外の色を帯びるのは陛下だけですな」

「属性？」

「はい、原則として魔力にはそこに属性を付加することによって各属性の色を帯びるのです」

「ふむ？」

「これがベースの状態ですが」

と、顔を上げるわんこ。

その胸の辺りに何かがあつまってゆくのがオレにも何と無く分かる。

なんていうか、ほら、眉間指さされると触られてないのにムズムズしたりするじゃん。あんな感じ。

それがだんだん強くなって、やがてそこに唐突に直径1cmくらいの青白い光が出現した。

「おー、すげー。魔法っぽい」

「この状態ではただの魔力の固まりでございます。これに例えば火の属性を加えますと」

光が赤く変色する。

「このように」

「おお、成程ー。火があるって事は……やっぱり土とか風とか水もあつたりする？」

「仰るとおりでございます」

あ、やっぱり？ これまたありがちなあ。

ご存じだったのですか、と不思議そうに聞いてくるセシエン君のただの勘だからねーと適当に説明しつつ、オレは今までの話を頭の中で纏めてみる。うん、そうすると色々分からない事が出て来るよなあ。うーむ。

こういう場合属性って普通縛りになるはずなんだけどな。

「ナカバ様はご聡明でいらっしゃる」

あれ、何かセシエン君が見直した！ 的視線でこっち見てるぞ。

「いや、別にそう言う訳じゃないから……」

「流星は陛下の見込まれた人間……」

「結局陛下、が判断なんですね。てゆうかさあ、魔族って何か皆デユランの事好きすぎない？」

もうちょっと冷静に見てみるよ。

顔は確かにちょっとイケメンだが、中身はあんなだぞ？ いいのか？

その程度のつもりだったんだけど、勢いで聞いてみたらセシェン君の尻尾が頂垂れてしまった。

あれ？　もしかして禁句だった？

「我らは魔族ですから」

何かをかみしめるかのような低いセシェン君の声。

「魔族たるもので陛下に魅了されぬものは存在いたしません」

「美形だから？」

「いえ、魔力を糧とする我らだからこそです」

うーん、分かるようでわからないような？

「申し訳ございません。わたくしも何と説明すればよいか……ただ、我ら魔族にとって陛下は至高の存在。魂が陛下に従ってしまうのです」

「うわ、ナニソレ。何でもアリすぎない？」

魂の奴隷ってやつか。気の毒に。あんなやつなのに。

心底同情したオレに、しかしセシェン君は「陛下はそれをあまりよくは思ってるんじゃないようですが……」と暗い表情で呟いただけだった。

いやいや、そこはむしろ「ふざけんな、何贅沢こいてんだ！」とか怒鳴っていいところだと思っただけだ。

しかし沈痛な表情のわんにそんな事言えない。

無理。

何あの垂れ下がっちゃってる耳。しょんぼりな尻尾。無理だったば。

「まあ、うん……あんまりセシエン君が落ち込んでもさ、意味ないし。むしろデユランってそういうのうざがるタイプだしさ。だから元気だそう。ね？」

慣れない励ましとかしてみる。

……励ましてますよ？ 精一杯。

前に同じ事やったら何故か「お前には人間の心が無いのか！」とか逆ギレされたけど。失礼な。人間ですよ。でもセシエン君には効果があつたらしい。

「そうですね……陛下はお望みにはならないでしょう」

「うんうん」

「では、そろそろ失礼いたします」

「あれ？ もう行くんだ。わんこなのに」

「大分魔力も回復いたしましたので……仕事を片付けてまいります」

ハッハッ、と笑顔を作る子犬セシエン君。

ふむ、何かさっきの言葉が妙にお仕事意欲を煽ってしまったようだ。

「本来は最後までお付き合いするべきなのでしょうが……申し訳ございません」

「あ。良いつて。考えたらセシエン君忙しい人だったしね」

輪っかの事故で色々予定が狂って、仕事滞ってるだろうし。

「お食事が終わりましたら食器はそのまま結構です。宜しければ館の中を散策されてみてはいかがですか？」

「うーん……そうだね、そうしてみる。ありがと」

「いえ、ご用の際は呼び下さいませ」

そう言ってセシェン君はわんこ姿ながら見事に流れるようなお辞儀をし、そのまま座布団の上から床へひらりつと飛んで着地した。

ペチリ。

テチテチテチテチテチテチ……。

「ぶはっ」

「ナカバ様？」

「いや、ごめん、何でも無い……」

セシェン君の足音を受けて口の中の物吹き出しちゃったなんて……
… 言えないよなあ。

魔力とオレ（後書き）

【作者後記】

四月の雪と言えば普通は幻の代名詞だったような気がします。

お気に入り登録39名様ご案内、と言う事でその見知らぬ方、ありがとうございます。

トータルでのPVも気付けば4万を超え、ユニークも4500人を超えました。

皆様のご来訪が書き続けていく為の原動力です。

感謝してます。

コケモモはベリーの仲間。美味しいよ。

作者拝

探検とオレ

いやー、食った食った。

正直食べすぎたかもしれない。これは体重計が怖いぞ……まあ、体重計なんて4月の身体測定から乗った事無いけどね。体重ぐらいで騒ぐな。むしろ問題は身長だろう。

とはいえ、食べすぎは体に良くないので運動を兼ねてその辺をぶらぶらすることにした。

セシエン君から「中見てみたら？」という発言があつたと言う事はデュランからの許可はもう降りてるんだろうし、実際ちよっぴり興味が無くも無いのだ。

探検ごっこ。

「いい歳してどうよ？」とか「むしろオレみたいなものうるうる出来るって警備面でどうよ？」とか思わなくも無いのだが何せオレは暇だし、どう頑張ってもオレの細腕でデュランをどうこうできとも思えないのでまあ問題無いんだろう。

ちなみに各部屋はこのキューブが一種の通行許可証になってて、実は普通の魔族じゃ入り込めないんだそう。

つまりオレか、セシエン君か、もしくはデュラン本人。

どうしてもキューブ無しで入り込みたいなら、デュランからケツジユとかいう宝石を受け取る事。

ただしこれはデュランがヒッキーなのでほとんど不可能。

外に広がってる柏の森に踏み込む事自体、相当な度胸が必要らしいから実質ここは陸の孤島だってことだ。

ちなみにオレの部屋はオレのキューブが無いと入れないし、オレのキューブでは危険物がある所には入れない。で、デュランの部屋とラボについてはセシエン君もオレもデュランがOKしなけりや何処にあるかすら分からないのだそう。

ま、余談だけだね。

ってことでオレは現在もそもと館内を移動している。

客室フロアは見ても仕方ないので、今居るのは歴代魔王のコレクションの展示フロアである。つってもただ2階に上がったただけなんだけだね。

いやー、しっかし金持ちってやる事何処でも一緒なんだなあ。

絵、彫刻（何か訳分からん形してた。多分そう言う魔族が居るんだろう）、宝飾品（屋久杉でもぐるっと囲えそうなサイズだったけど多分首飾りだろう）、衣服。

うん、何か美術館でも見学してる気分だ。

どれも今でも使えそうにしっかり手入れされてるっぽいけど、これは多分セシエン君の努力の賜物だろう。

取り敢えず疲れたので展示してあった椅子に座って休憩する。飲み物持って来れば良かったな。

「えーと、どれどれ。うわー、まだけっこう見る所あるじゃん」

キューブを起動して館内マップを呼び出す。

無駄に広いんだよここ。

本当に。

絶対2人用じゃねえだろ。いや、あれはデュランのわがままだけか。

動く歩道でもくつついてれば良いのに。

「えーと、こっちがデュランの収集物コーナーか」

靴を脱いで素足をぶらぶらさせながらオレは独りごちる。独り言が多いのは昔っからだ。

「ふむ」

美術品を見るのは嫌いじゃないが、どっちかと言うとデュランのコレクションがそろそろ気になる。

何でかと言うと、デュランのコレクションについてセシエン君がこんな風に言っていたからだ。

いわく、「陛下は人間の使う物を集めていらっしゃる」と。

ナニソレ？ という感じだが色々聞きだした話を総合してみるとどうやら「機械」を集めているらしい。

何故に？ という質問にはセシエン君も「さあ？」と首を捻っていつもの通り「陛下は少々変わってらっしゃいますから」と最近ほぼお決まりとなりはじめてる台詞で締めくくっていた。

ま、多分そう言う事なんだろう。

だって魔界の一切合財は基本魔力で動いているんだし。石油も使わないし、電気もいらない、君（魔力）がいれば良い、的なシステムなのだ。

背景キラキラ効果に使うぐらい魔力有り余ってるデュランなら大抵の事は可能だろうに、なのにわざわざデュランは機械を使ってる。やっぱマゾなのか。

ま、お陰で魔力ゼロのオレでも使えるキューブとかいう便利アイテムが今手元にある訳だけど。

「こっちの世界の機械ってどんななかね」

さくつと異世界にコンタクトしちゃうデュランだから案外うちの近所から持ち出してるかもしれないし。

ホームシックという奴は今のところ無い（部屋いじられたらやだなぐらいには思ってる）が、ちょっとどう扱われてるか興味が無く

はないし。うん、じゃあ今度はこっち行くか。

「えーと、ナビどうやるんだっけ」

ナビ、と呟いた瞬間、出てきている半透明の画面の背景色が変わった。

同時に足元に何か線が出てきた。ドアの方向に向かっている。隣にはデジタル表示の数字。

「……えーっと」

試しに椅子から降りてみる。数字がピコンと音を立てて1つ減った。

ふむ。

後ろに似非ムーンウォークしてみた。数字がピコンと音を立てて1つ増える。

あ、やっぱり到着までの残り歩数なのか。

じゃあ、まあてくてく歩きますか。わたしは元気。それなりにね。

続くラインを辿っていくと、プレートのかった扉の前に出た。

「はいはい、しつれいしまーす……」

モ。イと目があった。

「……。部屋間違えましたー」

ボタン。

「っってお約束やってる場合じゃねえし!!」

ガチャと秒速でドアを開きなおし、オレは目の前にデーンと立ってるそれを再度確認する。駄目だ、どう頑張っても某孤島の石巨人にしか見えない。しかも目玉いり、帽子付。え？ あれって随分前に世界遺産登録されてませんでしたっけ？ 何でここ居るの？ 複製？ いや、勘だけどこれ本物だよな？

「……奴か」

誘拐に加えて窃盗かよ。何処の犯罪者だ。魔王だからある意味正解なのかもしれないけど。

まさか奥にスフィックスとか居ないだろうな。居たら全世界の考古学者が泣くぞ。

「この分だと何コレクションされてつか分からんな……」

大体モアイは機械じゃねえし。

溜息つきつつオレは折角なんで奥の方も見て回る事にする。

歴代魔王コレクションと同じ、黒いビロードの台の上に色んなものが陳列されている。

手動式鉛筆削り。

その隣に何かでつかい青い宝石（サファイア？ つばいけど何か違うような、まあいいや）がついた派手なネックレス。

サーモンと虎のミケ。……何だこのパチもん。

トイレ用サンダル。

コインロッカー。

点字ブロック。

アンパン。

駅の改札の機械。

溶けないアイスクリーム（イチゴ味）。

真っ赤なスポーツカー。

赤い風船。

黄色いハンカチ。

青いサンゴ礁。

緑のマキバオ。

ホワ。トハウス。

……はつきり言おう。

デュラン、お前元の場所に返してこい。

「つとくに何がしたいんだアイツは……」

ブチブチ言いながらホワ。トハウスの角を曲がり、オレの足がそこ
で何かをぎゅむりと踏んづけた。

「……あ」

足の下にゴキブリがいた。

探検とオレ（後書き）

【作者後記】

昨日から拍手機能をくつつけようと思い、その名も「Web拍手」というサイトに登録して来ました。

……来たんです。

でも、試しにやってみてもタグが直に表示されるばかりで……拙い私のスキルでは行き詰りになりました。つまり挫折してます。

うーん、多分入れ方が違うような気はするんですけどね。

そんな事でしたばたあがいている間にお気に入り登録41件に増えました。

ありがとうございます。

次でやっとこさあの人再登場です。この前一瞬しか出番がなかったのですが暫くGのターン。

反応が少々心配ですが気を引き締めて、尋、いつきまーす！

コレクションのラストの方で笑えた貴方はお友達

作者拝

放火魔とオレ（前書き）

下書きそのままだとやたらヘビーになってしまっているので、この場の思いつきで書きなおしてみました。

ぶつつけ本番。

私は多分本番に弱いタイプです。

放火魔とオレ

ホワイトハウスを抜けると、そこはゴキブリでした。

うむ、詩情も旅情もゼロな上にどっから抗議の声がきそうな出だしになってしまった。

まあ、そんなわけでゴツキーに久々に出くわしたわけだが、なに何でオレが悲鳴もあげずにこんなに冷静かというと、これが例のカサカサでツヤツヤな黒い悪魔じゃ無かったせいではない。

いや、だってアレ他の虫と大して変わらんし。

セオリー的にはあれが出現したら女子は悲鳴を上げ、男子は騒ぎつつ距離を取るべきらしい。だが、当時それを知らなかったオレは掃除の時間にどっからか教室へ降臨したソレをホウキとちりとりで挟んで捕獲し、邪魔だったので窓の外へポイと投げ捨てた。完了。たったそれだけのことだったのに、以来ゴツキーが出ると何故かオレにお呼びがかかるようになってしまった。

おまいらさあ、叫んでないで自分でゴ。ジェットとか使えよ。

あ、何か脱線してた。

まあとにかく、オレが足の下に踏んづけてしまったのは例の金髪縦ロールのゴツキーさんだった。

しかも、何故かデュランのコレクションの一部らしきキューピ。人形を懐に入れようとしていた。

その格好はどう見ても、

「……泥棒じゃん」

「なっ?!」

オレのぼやきにバサアツとマントを翻して驚愕の表情で振り返る

ゴツキーこと本名……何だっけ？

「何だ、私の陛下が飼っている人間か。驚かすな」

あ、本気で気づいてなかったのか。

ダメじゃん。四重奏の癖に。

いや、違うな。四魔貴族だっけ。それとも四天王……土のスカル
ミリョーネ？ いや、これも違う。てか、こいつ誰だっけ？

「あー、どちら様でしたっけ……？」

「私の名を聞いたのか、人間」

「いや、オレとそちらの他に誰も居ないし」

さすがにそのキューピーの名前とか聞く気はないぞ。

「そうか、我が名を知りたいと言うか。屑でゴミでミジンコにも及
ばぬ人間ごときが高貴なる私の名を」

……。

はあ、まあオレ人間なのは間違いないけどね。

「ふっ」

ベル。らに出てきそうなおビボーの顔に嘲笑うような表情を浮か
べて偉そうに胸を張るゴツキー（仮）。

「これだから人間は物を知らぬというのだ。良いか、名を尋ねる時
は先に名乗るのが礼儀と言うもの……そんな物も知らぬとはこれだ
から人間は低俗だと言うのだ」

「えーっと……」

いや、知ってるけど。普通に。てかそんな大威張りで言う事じやねえだろ。

うん、でもまあ確かに仰る通りなので、

「じゃあ、オレの名前はナ」しかし！ 我は人間ごときの名などまったく興味がない」

「……はい？」

「よって、貴様ごときウジ虫の名を聞く気はない」

なら、先に名乗るのが礼儀とか言うなよ。

「そもそも、塵芥に等しい取るに足らぬようなみじめな存在であるところの人間と高貴にして高潔なる我が出会うなどまずありえぬ事。まったく人間ごときには分不相応この上ない。本来ならば我が美麗にして華麗、この世で我が陛下に次いで完璧なる我の美貌を見ることなど人間には許されぬ事なのだ」

「……はあ」

「無論、それは我の完璧にして完全なる名においても同じ事」

「……そうなんですか」

「よって人間ごときに我が名を教えるはずもない」

「じゃあ良いです。ではさようなら」

「待て」

回れ右したオレの影を、ゴツキー（仮）の足が踏んだ。

……む？ 動けん。

もしかこれが噂の影縛りとか、影縫いとか、ちいちゃ。の影送りとか言う奴か。

おー、人生初体験だよ。

「我の名が知りたかろう？ 人間よ」

「いや、別に」

「我の名が知りたかろう？」

「や、だから別に良いですって。何か大変そうだし」

「我の名が知りたかろう？」

「人間には教えないんですよね？」

「我の名が知りたかろう？」

「……」

「わーれーのー名ーがー知ーりーたーかーろー？」

「……まあ、ちよつとぐらいは」

「そうかそうか、そんなに知りたいのか」

オレの影をすっかりキープしたまま得意げに頷くゴツキー（仮）。

いや、あそこまで食い下がられたら、断り続けるのも面倒だし。

てゆうか、こいつもめんどくさい奴だな。

「しかし、我が高貴にして音の一つ一つまで清冽にして清澄なる名は貴族であつてもなかなか口にすることを許されぬ、特別な名なのだ。この名を呼んでよいのは我の直系と我の愛する陛下のみ」

「はあ……で、結局誰なんですか？」

「気が短い奴め。これだから人間は成長せぬのだ」

成長の話はすな。

「まあ、特別に告げてやろう。有り難く聞くが良い」

「はいはい」

「我が名はヴァンパイア・ヴィスカス・ヴェルレイン・ヴェーレンハウゼン・ヴォイロッシュ・ヴェ」

「あ、そうだ。ヴィスカスだった」

思い出した。そんな名前だったよこのゴツキー。
ポム、と手を打ったオレの前で固まるゴツキー、改めヴィスカス
さん。

「……あれ？ 停止中？」

「——きが」

「飢餓？」

「——きが」

何か小刻みにプルプル震えてる。寒いのか？ いや、こいつの存在自体相当寒いけど。

「人間ごときが我が名を途中で遮った上に呼び捨てだと……」
「え？」

ビシリ、と何か音がした。

「寛容にも我が名を告げてやっている途中で遮った拳句、我の高貴にして優雅、遼遠にして繊細かつまったりとした味わいの我が名を」
「いや、確かにスイーツな名前だけど」

「人間ごときが……」

ギリギリと歯ぎしりするその顔はもう美形とは呼べない。こりや
般若だね。いや、般若だと女になるから、えーと、なまはげ？

と、何かヴィスカスさんの手に炎が出現した。
ふわりと巻き起った熱気に金色の火の粉が舞いあがり、オレの顔を熱風が舐める。

あ、れ？ 何かヤバげな雰囲気……。

「人間の分際で我を侮辱した罪、償ってもらおうぞ」

「いや、侮辱した覚えは……泥棒は事実だし……」
「もはや言葉は無用。人間の声など耳が腐るわ」

ゴオツとバックファイアのように金色の炎が伸びあがって天井まで届く。

火災報知器はどこ？ 条例で設置義務付けられてるのに何で鳴らない訳？

「屑は屑に、灰は灰となるが良い」
「っ！」

やばい、動けない。逃げられない。
目の前に熱風と同時に金色の炎が迫る。と、オレの30cmくらい手前でその炎が見えない壁に遮られて止まった。

「小癪な……空間転移だと……？」
「あ、キューブか」

これ、デュランの軍師ビームの時と同じだ。よし、頑張れキューブ。

ヴィスカスさん……もう呼び捨てで良いや、ヴィスカスがオレに炎が届かないのを見て舌打ちした。同時に炎の色が金色から青白い奴に変化して、更に火の粉を辺りに巻きあげる。お陰でホワイ。ハウスの柱がどろーっと蠟燭みたいに溶け始めてる。うわぁ……すげえ。

「この程度の壁など……我の炎の前では無力と知るが良い」
「いや、出来れば知りたくない」

そう言ってみただけ、何かさっきからオレの前でミシミシ言う音

が聞こえてる。

おいおいおい、しつかり防いでくれよ。オレこれ以外に頼るもん無いんだからさ。

そう思ってるのに何か微妙に炎の壁がこっちに近寄ってきてる。

これって、つまり押されてるってこと？ ヤバイじゃん。

見ればキューブの画面がチツカチツカ明滅してるし。ヒビが表面に入ってきてるし。やばいやばいやばいって。

思わず出。みたいだが、本当にやばいって。

「耐えろ、耐えるんだジョー！」

お前が倒れたら真っ白に燃え尽きるのはオレなんだからな。

そんなオレの応援も空しく、キューブに入った亀裂はどんどん広がって、ピシッという音と共に真っ二つに割れた。

炎が一気にこっちに来る。

「っ」

反射的に顔を庇った手に炎が触れる。瞬間、炎が火の粉一つ残さず消滅した。

「……あり？ 助かつちゃった？」

「……その指輪、は」

「あ、そっか」

セシエン君をさつき瀕死に追い込んだデュランの黒輪っか。今のオレの指にはそれが嵌ってるのだ。

そいつがさつきヴィスカスの放った（多分）魔法の炎を吸収した……って事だよな、今のは。そっか、魔法も魔力が無いと発動しないんだっけ。

「うわぁ……死ぬかと思った……」

「陛下とお揃い……私の陛下とお揃いの……私の陛下とお揃い……」

ん？ ヴィスカスが何か虚ろな目でぶちぶち呟いてるけど大丈夫かあいつ？

「貴様……何故貴様が私の陛下と同じそれを身に着けている……」

「ああ、これ？ デュランに貰ったから」

正確には押しつけられたんだけどね。

「な、何て羨ましい……」

どっから取り出したレースのハンカチを咥えつつ悔しがるヴィスカス。

羨ましいのか？ つけたら多分重傷負うぞ？ てか、リアルでそんな悔しがり方する奴初めて見たよ。

「かくなる上は、貴様を葬って我がそれを貰おう！」

「ちよつと待て、何でそういう暴力的思想に」

「問答無用。『紅く輝ける使者よ 高らか紡ぎし強者の歌声 万物を混沌へと返すは彼の翼 天空へ挑みし愚かなる者を焼き尽くす慈悲深き赤の炎よ 我が名に従い、我が命を聞き、我に背きし一切等しく灰燼と帰すが良い』！」

「イマジンプレイカー！」

影踏み続行で逃げられないからこの場で何とかするしかない。

吹きつける熱風に目を焼かれつつ、こっちも叫んで指輪をはめた手を突き出す。

消える炎。

「オレ、WIN!」

「まだ終わらぬぞ……」

「げっ、まだやるの?」

「無論」

ゴウ、と巻きあがる炎がヴィスカスの金髪を揺らす。

あー……目が完全にいつちゃってるよ。

「焼き尽くせ」

「太陽のガンレット!」

いや、あれは別もんだけどね。

よし鎮火。

と、思ったらそこで頼りの指輪もパキンとかいってぶっ壊れやがった。……あれえ?

そう言えば劣化版とかなんとか……。

「肝心のところで役立たねえー!」

馬鹿魔王がー!

叫んだ俺にヴィスカスは一瞬ぽかんとし、それから表情を取り繕って貴族っぽく優美な感じで笑い、

「万策尽きたようだな」

まあ、その通りなんですけどね。

「えーと、まあほら。お揃いも無くなったんでこの辺でオレ帰って

いいですか？」

「帰すと思うか？ 愚かなる人間よ」

「あ、やっぱダメっすか……」

「今度こそ、欠片一つも残さず燃え尽きるが良い」

ヴィスカスの掌の中にまた例の青白い炎が浮かぶ。

そう言えば赤い炎より青い炎の方が温度が高いって昔授業で習ったような気がするな……。

「我への侮辱は万死に値する」

屑らしく散れ。

そう言つてヴィスカスが放った炎はオレへと向かい——また、壁に遮られた。

クリスタルガラスみたいな氷壁。

「仰る事は御尤も。されど、我が主の客への無礼もまた万死に値するとは思われぬのですか？ ヴィスカス卿」

「……陛下の飼い犬か」

ヒュウ、と氷雪を含んだ風を纏い、オレの目の前に四足の白銀の獣が着地する。

「お待たせいたしました、ナカバ様」

おお、何か正義のヒーローっぽいぞセシェン君。

放火魔とオレ（後書き）

【作者後記】

気付けば評価が増えてました。ありがとうございます。

お気に入り登録の方も昨日……一昨日？ からまた増えて46名様となりました。

なるべく話が重くならないように気をつけつつ筆を進めたいと思います。

（うつかりするとヘビーになるので……）

次はラウンド2、セシェン君VSヴィスカスさんの予定です。

出だしのゴキブリ退治の話は実話だったり……

作者拝

格差社会とオレ

「あ、えーと……やつほー、セシェン君。多分、助かったありがとう？」

「大事ごさいませんか？ ナカバ様」

パトラッシュサイズにまで膨らんだセシェン君がオレに背中を向けたままで真剣な声で聞いてくる。

「あ、うん。まあ平気。デュランからもらったグッズが全部ぼしゃったけどね」

「ナカバ様さえご無事ならば、道具など良いのです」

おお、真顔でこんなセリフを吐く人を見る日が来るとは。
しかも、自分に向かって言われるとは。
しかも、相手がワンコとは。

うーん、人生何があるか分からんもんだねえ。

「セイリオス 白銀狼の小僧か」

周囲に某孤島の黄金の魔女っぽく金色の蝶（ただし実態は炎）を舞わせながらヴィスカスが笑う。

「また随分と情けない姿になり下がっているではないか。そんな有様で我の陛下の護衛を名乗るなど、良く恥ずかしげも無くそんな真似ができるものだな」

「ヴィスカス卿、何をなさっておいですか」

余裕ぶっこいてるヴィスカスに、あくまで静かに応えるセシェン君。

「昨日に続き突然のご来訪、如何に陛下が寛容なお方とは言え少々度が過ぎましよう」

「黙れ、下僕が」

「……セシェン君、何か下僕とか言ってきたけど」

「わたくしは白銀狼ですからね」

ひそひそと囁いたオレに同じく小声で苦笑交じりに返すセシェン君。

でもすぐにきりつとした表情（だと思う。ワンコだから良く分かんけど）でまたヴィスカスの方へ向き直る。

「どうぞお帰り下さいませ、ヴィスカス卿。陛下は本日はどなたにもお会いしないとの事です」

「ドラゴンごときに我は指図は受けぬ」

「陛下のご意思をわたくしはお伝えしているのです」

「その下等な存在を置いておくのもそうだと言うのか？ 白銀狼」

「左様でございます」

ふん、とその答えにヴィスカスが鼻を鳴らして冷笑する。

「成程……主に牙をむく出来そこないの駄犬の類と、魔力も持たぬ人間。屑同士が慣れ合うのは楽しかろうな」

「……」

ヴィスカスの言葉にセシェン君が瞳孔を細くして牙を剥き、ぐると喉を鳴らす。

「ヴィスカス卿。陛下の客人への侮辱は我が主への侮辱と受け取っても宜しいのでございましょうか？」

「主人？ 我が陛下が貴様ごとき出来そこないの白銀狼のスペアを認めているとは思っているのか？ 自惚れるな。身の程を知れ。今もそこにそうして立っているだけで精一杯なのであるう？ その様で貴様は陛下の何を守れると言うのだ？」

「……っ」

「力無きものは去れ。貴様は我の陛下に相応しくない」

「粘着気質のストーカーに言われたくないんだけど」

うつかり挟んじゃったオレの発言にヴィスカスが馬鹿みたいに口をあぐり開き、セシェン君まで目を丸くしてこっちを振り返った。

「……ナカバ様」

「あ、ごめん。ついうっかり本当の事を」

「に、人間が……」

「うつさい。変態、ドロボー、きしよいぞゴツキー」

毒を食らわば皿まで。ついでに素直な感想を述べてみるとヴィスカスの顔が赤くなった。

沸点低いなこいつ。魔界のお偉いさんならもうちょっと冷静沈着で居ろよ。

「その口焼き裂いてくれる」

「ナカバ様！」

「ぐえ」

素早く振りかえったセシェン君に服の裾を咥えられて後ろに引張られた。

く、首が抜けちゃう！

いや、抜けないけど抜けそうな勢いで頭が後ろにガツクンと。ついでに足がふわっとか浮いちゃって、気付けばオレはケツから展示品の中にあつた美容院の椅子にすっぱり収まっていた。

「ナカバ様、お怪我は？」

「う、うん……首が微妙に鞭うちになりそうな感じ以外は平気……」

ぐらぐらする頭をさすりながら、オレは座り込んだ姿勢で何とか顔を上げる。

見ればさっきまでオレが居たホワイ。ハウスの辺りが完全に炭化色に変色してごっそり消えて無くなってる。うわお……ウチは確かに火葬文化だけどさ、あれは骨も残らん。

首ぐいーんとかされて、まだちよつと関節がガクガク言ってる感じがするけどあそこで焦げるよかマシだろう。

一方のセシェン君はどうやらヴィスカスと魔法合戦中らしい。つってもオレにはその辺がちかちか光っちゃあどっかが抉れ消えてるだけで、何やってるかさっぱり分からんけど。

某虎金井兄弟の喧嘩を見てる孝士どのみたいな、或いは後期の天下一武道会に来てる一般客みたいな。

目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬる、って感じ。いやー、置いてきぼり感バリバリですな。

「ナカバ様」

そんな（多分）一瞬の集中力の途切れが勝負の分かれ目っぽい（多分）戦闘の真っ最中に、セシェン君が後ろに居るオレに向かって前を見たまま声をかけてきた。

「はいはい。どうしたのセシェン君」

「わたくしがヴィスカス様のお相手をする間に外へお逃げください」

……あまり、時間を稼ぐ事は出来ないかもしれませんが……」

「え？ そんなにあのゴツキー強いのか？ 昨日良く見えなかったけどデュランにボコボコにされたじゃん」

「陛下は別格です」

足元に青白い魔法陣っぽいものを展開しつつ、セシェン君が低く唸る。

「四大卿ともなればその力は我らドラゴンに匹敵いたします。加えてヴィスカス様は陛下の血を頂いており、その力は四大卿の中でも群を抜いて強力な方。わたくしが万全な状態でも五分五分となるかどうか……」

あ、そう言えば今セシェン君弱ってるんだっけ。

主に、オレのせいだ。

「具体的にどれぐらい頑張れそう？」

「……正直に申し上げて、次の一撃が受け切れるかどうか」

「ダメじゃん」

「申し訳ございません」

「あ、ごめん」

うつかり突っ込み入れてる場合じゃ無かったよ。

見た感じ向こうはまだまだ余裕っぽいけど、セシェン君は確かにきつそうだ。

魔力がごっそり例の輪っかに奪われてまだ回復しきって無い上に、オレみたいな戦闘能力皆無な奴庇って、屋敷守って戦わなきゃならないんだもんな。そりゃきついよ。

となればオレはとっとと撤退した方がセシェン君にもオレにも良いて訳で。

ジョースター家の伝統的な戦闘の発想にもこう記されている。
それは、逃げる。

「つて、燃えてるんですけど」

「何か仰いましたか？」

「いや、ドアの方向にこうダアーツと炎の廊下がですね……」

「……退路を断ちましたか、ヴィスカス卿はやはりそこまで甘いお方では無いと言う事ですね」

「いや、オレこの場合どうするの？ 床に穴あけるとか？」

「それは大変危険です。陛下が空間を繋いでいる場合がございますので、狭間に落ちればわたくしとてナカバ様を探し出せなくなる危険性がございます」

「つまり、後は飛んで逃げると？」

「……ナカバ様、飛べるのですか？」

「いやいや、無理無理」

空を自由に飛びたくても、竹トンボぐらいしか作れんし。

「デュランの登場は望めそう？」

「……いえ、陛下の御手を煩わせる訳には」

苦悩の滲むセシエン君の声。

うーん、「やっぱり」そうなのか……そうするとどうするかなあ……。

と、

「めておすたらあああああああああいくっ!」

空が自由に飛んできた。

格差社会とオレ（後書き）

【作者後記】

ナカバ視点での戦闘シーンのぐだぐだっぷりに我ながら驚いています。まあ、まったく何が起こってるのか分からないというのと、ナカバの正確によるものなんでしょうけど。

あまり見えてもまずいので、どこまで情景を描写するか意外と難しいです。

さて、次は傘を持って上から降って来る人の登場です。

また日付変更前に間に合わなかった…… 作者拝

落下傘とオレ

傘をさして空から降ってくるものの代表と言えばメアリー・ポピン。だろう。

まあ、確かにそれは傘をさしてたし、ドレスを着て空から降ってきた。けど、映画の彼女はけっして天井をぶち破って、ドロップキックをかましつつ登場とかしなかった気がする。

ま。つまり。

空から降ってきたメアリー。ポピンズもどきは天井を景気よくぶち抜いて、ついでにセシェン君の忠告も綺麗に無視して床にでっかい静かの海を作り、ついでに行きがけの駄賃程度の気軽さで着地地点に居たヴィスカスを蹴り潰すという衝撃的な登場をしたのだった。

沈黙。

ドガシャアッ！ と音を立てて陥没した床下から瓦礫が吹きあがる。

ついでに、さっきちらつと見た空色のソレが下から元気よく飛びあがって出てきた。

軽く3mくらい跳躍した。

「うつつ すわったままの姿勢でジャンプを！」

思わずお決まりのセリフを叫んでしまったオレの前で月面宙返りを決めてふわりと着地する空色。

すちゃっ。

決まった！ 10点！

「じゃじゃーんっ！ 着陸成功っ！ いえいつ！！」

ピシリ、と両手をYの字に広げて、自分で高らかにファンファーレを宣言するメアリー・ポピ。ズ。

でも、それは黒い髪じゃなくて銀色の髪をしてて、碧い眼ではなくて墨を溶かしたような真黒な目をして、蝙蝠傘じゃなくてレースたつぷりの日傘をさしてて、おまけに言うならオランダ人形じゃなくて。

「リ。ちゃん人形……？」

眉上でそろえた前髪、ちっさい頭、ほっそい首とか手足、ふんわり広がった空色のドレスと、髪に結んだ同じ色のリボン。花のコサージュ。空色のミニール。

着地と同時にリボンの先に結んだ小さな鈴がチリンとなる。

それは年齢10歳くらいの、世界遺産レベルでの美少女だった。

美少女は着地した新体操選手みたいな両手万歳の姿勢のまま、元氣よく鈴を振るような声を上げる。

「たっだいまーっ！」

「……ただいま？」

「お嬢様……」

「……お嬢様？」

「あっ」

呟いたセシエン君の声に、クルンと可愛らしい動作で振り返る美少女。

その顔がパアツと笑顔になった。花開くような笑顔って奴があるならまさしくそんな感じの、そんな無邪気で明るい、笑顔の中の笑

顔だった。

その姿勢からトン、と一歩。

「セシエン――」

加速した。

「――君っ!!」
「ぐっ!」

美少女がビュオンと風を切って、セシエン君の腹部にタツクルをかました。

当然のように後ろに吹っ飛ぶセシエン君。

ドオンと運動会の太鼓みたいな音を立てて、セシエン君が突っ込んだ壁が鳴動して、ガラガラと崩れ落ちた。

ついでに崩れた破片の中でも一際でっかいのがモア。の後頭部を直撃した。

バツタリと前のめりに倒れる。アイ。ころころーっと転がり出る目玉。

哀れ、撲殺か。

「……」

今はつきりと分かった。

あの子、。カちゃんじゃなくてア。レちゃんだ。

「……もう何が何やら」
「あれっ?」

ター。ネーターよろしく瓦礫をあっさり押しのけて復活した美少

女がこつちを見て、きょとんと瞬いて首をかしげる。動作だけならその辺のロリコンな皆さんが悩殺されそうに愛らしい。

その手にアフリカゾウサイズの元壁とかを持ってなければだけど。

「お客さんっ?」

「あ、はあ……えーと、どちらさまでしょう?」

「ボクツ?」

自分の胸を指して首を反対側にコテンと倒す美少女。

「ボクはねっ、あのねっ、プチだよっ!」

ボクっ子だった。

「君はっ、誰かなっ?」

「ナカバ様は陛下の御客人でいらっしやいます……よ、お嬢様」

「あ、セシエン君生きてたんだ」

「ええ……」

はりつけにされた殉教者みたいな恰好で壁にめり込んだまま、セシエン君が弱々しいながらも苦笑交じりに答えて、オレの方に金色の目を向ける。

「何とか」

「……」

何か今日のセシエン君、やたら死にかけてるよね。

不憫だとは思ってたけど、ここまで来ると何か哀れを通り越して痛々しくって見てられんよ。

オレはそつと目を背け、黄色いハンカチで目元を抑えてみる。

「お客様っ？」

「うおっ?! びびったあっ！」

いつの間にかオレの懷まで入り込んでたよこの子。おぬしやるな。てゆうか、遠くから見てもかなりハイレベルな美少女だったけど、近くで見ると本当にばっちり整った本当に人形みたいに可愛い顔してるよなあ、この子。

こんな状況じゃなかったら是非、着せ替えショーをやって色々飾ってみたい。

え？ 美形嫌いじゃないのかって？

もちろん嫌いだ。笑顔でスカツとさわやかに言い切れるぐらい大嫌いだ。

某魔王とか、脳内シャットアウトで存在にモザイクかかってる状態でも思い出したくも無い。

でも美少女は別腹でしょ、普通に。

可愛い女の子は見てるだけで幸せになれる。世界の幸せに貢献してるんだから。

ま、性格悪いのはお断りだけど、遠目に眺める分には問題ない訳だし。

で、このボクっ子なプチちゃんは性格は悪くなさそうだ……「難」はありそうだけど。

「えーと、あんまり傍でじろじろ見られるとものっそい居心地悪かったり？」

「あっ、ごめんねっ」

オレの言葉にぱつと離れ、両手を合わせて「ごめんね」と小首をかしげてはにかむように笑うプチちゃん。

文句なしにこう言う仕草が似合う。
中身。ラレちゃんだけどね。

「お嬢様、本日はどのような御用件で……」

壁から脱出したセシェン君がぶるりと体を振るって着いた細かいほこりや破片を吹き飛ばし、舌で毛づくろいを終えてから尋ねて来る。

それにプチちゃんは開きっぱなしだった空色のレースをふんだんに使った日傘をパチンと閉じて、

「パパになつ、会いに来たのっ」

と、につこりと笑んだ。

……パパ、とな？

オレはギイッと首をまわしてセシェン君を見る。

「苦労人な上に、子もちだつたんだ」

「わたくしではございません」

即行で否定された。

ま、これは軽い冗談だけどね。

いくらセシェン君でも、実の娘相手に「お嬢様」はないだろうし。

そうするとあのゴツキーの娘かあ。うーん、まあ美形の子は美形
っていうことわざもあるしね。

え？ カエル？

やだな、カエルの子供はオタマジャクシじゃん。

「で、踏んじゃって良かったの？」

「あのねっ、踏んだのはねっ、うっかりなのっ！」

「そっかー、このうっかりさんめー」

ドジっ子にも程があるだろ。

「パパだっ！！ ってねっ、思ったのっ！ だからねっ、えいって
したのっ！ そしたらねっ、つぶれちゃったのっ！！」

「……。それ、普通は故意って言わない？」

「どうしてっ？」

「……。うっかり？」

「うんっ！」

何か微妙にかみ合わない会話をしていると、唐突に向こうの方で
火柱が上がった。

ぽっかりと開いた空への穴を貫くような黄金の炎の柱。

「へ？」

「……ヴィスカス卿、もう復活されたようですね」

「え？」

「バラバラだったのにねっ！」

いや、可愛らしく物騒な事言わないで。

そう思っていると、クレーターの底からゆらりと金色の髪をなびか
せてヴィスカスが浮かび上がってきた。

これはやっぱり、第三ラウンド開始……って感じなんだろうか。

落下傘とオレ（後書き）

【作者後記】

我が家にあつた人形Ⅱ怪獣人形or超合金合体ロボットでした。怪獣人形は総勢10体を越えてた気がします。

なお、たった1体存在したバービー人形は無残に髪を切り落とされ（当時はその方が似合うと思った）、顔に油性マジックで落書き（当時は化粧のつもり）をされ、最終的に悪の魔女役を振られてました。

今思うと可哀そうな事をしたもんです。

さて、評価ありがとうございました。

それと、本日現時点でこちらにご訪問くださった305名の皆さま、ありがとうございます。

それに励まされて今日は何とか今日中に書きあげられました。

仕事の都合と筆運びの許す限り、これから定期的に書いていきますと思いますので宜しくお願いします。

多謝 作者拝

三回戦とオレ

第1ラウンド：ゴツキーことヴィスカス VS 一般人才レ。
結果、ヴィスカス圧勝。
ま、当然だ。こいつに勝っちゃうほどオレ人間やめてない。

第2ラウンド：ストーカーことヴィスカス VS 弱体化セ
シエン君。

結果、場外乱入により中断。

そして、第3ラウンド。

「陛下と私の邪魔をするものはすべて排除するのみ」

地獄の釜の底、もとい陥没クレーターから復活してきた変態貴族
ことヴィスカス。

VS、

「おうちを壊す悪いこはっ！ 月に代わっておしおきっつ！！」

どっかで聞いたような台詞を高々と宣言すゴスロリ美少女戦士こ
とプチちゃん。

「さあ、いよいよ始まりました第三ラウンド。突如として流星のご
とくリングに降り立った謎の美少女戦士プチちゃん。迎え撃つは成
績不敗の性格腐敗のヴィスカス。一体どんな試合が繰り広げられる
のでしょうか。なお実況担当はわたくしナカバ・マサキ。解説にア
ンジェロラッシュ……じゃなくてセシエン君を迎えてお送りいたし

ます」

「あんじえろらっしゅ？」

「あ、ううん。気にしないで。ただの冗談だから」

稀にしか発動しない某魔女の技である。

近所の犬をつかつてこれを弟にかましたのは良い思い出だ。いやあ、ごめんねわんこ。

そんな和やかな会話を瓦礫の中で交わしてる間に既に何か向こうじゃドンパチが始まっていた。

まあ、相変わらずなにやってんだかオレにはさっぱりちつとも分からないんだけどね。

とりあえずさっきまで大苦戦してたオレやセシェン君に比べてプチちゃんが割と余裕っぽいというか、あの焔を防いじゃうあの日傘何者？　ってゆうか。

「てゆうか、今素手で炎はたき消したよね。びんたでバシーンと」

「はい」

「良く腕燃えないよね」

「お嬢様ですから」

「……そっか」

まあ美形が勝つより美少女戦士の勝利の方が良いけどさ。

ひらりと交わすたびにスカートの中の……えーと、あれは何だっけ。今時電気街とかでよく見かける……えーと、ジャージでもスパッツでもないのは確かなんだけどなあ。うーん……ま、ゴスロリだな。うん、ゴスロリ。どうせ細かい服の名前はオレには分からんし、ふわふわとかひらひらとか言っておけば間違いないだろう。

この前それを言ったらクラスメイトに憐れみの視線で見られたけど。

良いじゃん。どうせオレには関係ないんだし。

とにかくそいつがひらりひらりと可憐に動いて、なかなか目の保養つてものである。

ついでに髪の毛結んでるリボンの鈴がリンリンうるさいが、美少女だからその辺は大目にみるとしよう。

「この……どこの馬の骨とも知れぬ小娘が！」

「べーっ……！」

飛んできた火球を例の水色日傘でカッキーンと場外ホームランして、プチちゃんが目の下に指を添えて舌を出す。

すげー、炎の魔球とか御目にかかる日が来るとは思わなかった。空想科学ばんざい。

「プチちゃんがんばれー！」

手を振ると、プチちゃんがにこっと笑って手を振り返した。

おお、アイドルだアイドルだ。

「何か楽勝モード？」

「いえ、ヴィスカス卿はそう容易く屈するようなお方ではございません」

すっかり観戦モード、別名傍観者モードに入ったオレとは対照的に、近くに伏せの姿勢で座ったセシェン君が厳しい声で言う。

「ヴィスカス卿ご自身が魔界でも屈指の実力者。今はああして魔法のみの攻撃を行ってますが、これで剣を抜けばお嬢様とて無事ではすみすまい。加えて陛下の血では今のヴィスカス卿は不死に近い再生能力を備えてらっしゃいます。長引けばお嬢様とて御身無事

であることが出来るかどうか……」

「何その無敵設定」

「無敵ではございません」

気を悪くしたようにこっちに顔を向け、セシェン君は鼻の頭に皺を寄せる。

いや、その狼形態でそれされると怖いんだってば。

「如何にヴィスカス卿が優れてらっしゃるとしても、陛下の足元にも及びません」

「あーはいはい……」

そーでしたね。君たち陛下大好きっこクラブ所属だもんね。会員ナンバーとかもっちゃってるもんね。

「でもさ、セシェン君」

「はい、なんでございましょう」

「長引くと不利以前に、長引いたらまずくね？」

「……そうですね」

控え目に言つて、昨日の状態の館が再現されそうな勢いだ。

炎で溶ける、焦げる、炭化する。

プチちゃんがまた壁を垂直走りした跡に残っているのは元足場なボッコボコの穴。ヒビ。亀裂。

他にも衝撃波だとか余波だとか、弾いて明後日の方向に吹っ飛ばした火球だとかがあちこちに炸裂して、さっきまでエルミタ。ジュ美術館だった室内は今は廃墟マニア垂涎な状態になってきつつあった。

ま、デュランの指パッチンでどうせ直るんだろうけど。

「拙い、でしょうね」

忘れてる人が大半だろうが、ここ、デュランのコレクション部屋なのだ。

オレの予想だと、あいつは「俺の言う事は正しい 俺の成す事も正しい 俺が他の人間の物を壊そうとも 他の人間が俺の物を壊す事は赦さん」とか普通に言っちゃうタイプだ。

珈琲豆一つでうじうじやってる奴が、このありさまを見たらどう言う反応をするのか。

想像するだけでも寒気を感じる。

主に拒絶反応系の鳥肌の事だけだね。

もう声とか姿とか、想像する前に脳が拒否ってる。ワンギリ状態だ。

「オレじゃ止めるのどうやってもムリだしなあ……セシェン君、まだ動くのきつい？」

「いえ、これしきの事で休んでいては陛下の従者は務まりませんので」

「真面目だよねえ」

「白銀狼の性、^{さが}でございますので」

「他の人も皆セシェン君みたいな感じの人ばっかなの？ 親とか、兄弟とかも？」

「ええ……兄は特に歴代の白銀狼の中でも最も優秀と言われる人でしたよ」

立派な、自慢の兄でしたと笑むセシェン君。

ふむ……。

自分の兄弟の事をどう思つかと聞かれて、こんな風に堂々と胸張って自慢出来るってのはちと羨ましい。

オレの弟にオレの事聞いたら、絶対こんな答えは返ってこんだろ
うしなあ。

まあ、その辺お互い様だけど。

「じゃあ、止めて来る？」

「はい」

言って、苦笑するセシエン君。

「と、申し上げたいところですが……」

む？

その視線を追って目を上げ、オレは「あちゃー」と額に手を当てる。

マリア様ならぬ、魔王様が見てた。

三回戦とオレ（後書き）

【作者後記】

ついにお気に入り登録50人目です。

評価の方もひっそりと数値が変わっているの、こちらにもどなたかひと手間頂いたのだと思います。

有難い事です。どんな形でも誰かから意見をもらえると云うのは貴重なものです。重ねて御礼申し上げます。

さて、次の展開で陛下を魔王モードにするか、あくまでギャグっぽく軽くするか…。

どちらが良いですかねえ？

マリア様と家政婦で迷いました

作者拝

立体映像とオレ

魔王が空中に浮かんでいた。
ただし、

「ちっさ！」

小さかった。

「すんごいちっさ！」

感動したので繰り返してみた。

おお、ついにオレの縮めの呪いが実を結んだか。

毎日お星様に願ったたり、地獄通信にアクセスしたり、パールで
ピッピにおまじないさせたりした甲斐があったもんだ。

いや、実際はやってないけどね。

「で、何でそんな歯ブラシサイズに縮んでるわけ？」

普通あのサイズになったら妖精さん、みたいな感じになると思う
んだが、デュランの場合はミニサイズでも雰囲気から態度までバツ
チリ魔王でしかなかった。多分顔の前に腕をやって開きながらガオ
ーとかやっても、多分大魔神じゃなくて大魔王になるんだろうな、
こいつは。ハックシヨン。

「違う」

オレの問い掛けに黙って様子を眺めていたチミで無駄に偉そうで、

無駄に美形なデュランが答える。

「これはホログラムだ」

うん？

あ、良く見るとデュランの居る場所の少し下のところに銀色のスニッチみたいなのが飛んで、そこからデュランの方へ光の帯が伸びていた。ああ、成程……ホログラムね。デュランにはブラッジャーの方が似合いそうだけど。

「……ちつ。縮めば良いのに。むしろ死ねばいいのに」

「ナカバ様……」

「まあ、お前の身長のような先の無い話はさておいて」

「可能性の芽を摘み取りやがった！」

「良い加減、治まるのを待つのも飽きたからな……そろそろ止める
としよう」

相変わらず飽きっぽいなあ。

「で、どうやって止めるのさ」

「取り合えず場所を変える」

言ってパチンと指を鳴らす偽ティンカーベル。

途端に足元が消えた。

「はい？」

ジャックザリッパー・クリスマスブラッド着用の大悪魔の落とし
穴ですかこれは。

……。

うん、普通にオレ舞空術とか無理だからね。

「ぎゃああああ！」

落下。

1秒後きやつち。

「あああああー……はぁ……叫び疲れた」
「お疲れ様でございます」

普通にオレを下ろしてくれるセシェン君。どうも。

「さてと」

強制移動させられたオレ達を壁際で見回すデュラン。サイズは元のサイズに戻っている。

「派手にやってくれたな、プチプーペ」
「あつ……」

その声に気付いてさつと戦闘態勢を取るプチちゃん。
そこから一気に猛ダッシュ。

「たっ」

既に距離は半分。
はやっ？！

「だっ」

垂直ジャンプ。

おお、カインっばい。

「いつ」

空中で一回転。

「まあああああっ！！！！」

そこから足を延ばして斜めに落下。

その攻撃目標のデュランはどっからか……いや、何かこの感じ前にもあったな……フッ素加工のフライパンを取りだし、

パコン。

無造作に飛んできたプチちゃんを叩き落とした。

「お帰り」

「他に何かもつと言う事あるだろっ！！」

てかフライパンって。フライパンって！

美少女を何だと思ってるんだ！

「ぷはっ！」

オレが抗議してる間にあっさり床から復活するプチちゃん。

あら、頑丈。

「元気そうだな」

「うんっ、元気っ！」

「そうか」

「……………」

「どうしたナカバ、不満そうだな。これは取っ手は取れないぞ」
「そこに別に期待はしてない」

何故ティファ。ルの宣伝をする。

じゃなくて。

じゃなくて……まあ、いつか。つつこむのそろそろ面倒になってきたし。

「陛下……………」

あ、あっちの方でヴィスカスが何か悲しげな瞳でこっち、つかデュランを見てる。

まるで売られてゆく仔牛のようだ。

「おや」

デュランが呟いて、ヴィスカスを見た。

かわいそうだけど明日の朝にはお肉屋さんの店先に並ぶ運命なのね、という視線で。

そして、何事も無かったかのように顔をそらした。

「ヴィスカスの声が聞こえたような気がするな。しかし気のせいだろう」

存在否定しやがった。

「そうだなセシェン」

「陛下の仰るとおりです」

顔色一つ変えずに（つつても毛皮もふもふで顔色何か分からね
ど）肯定するセシェン君。

「陛下の仰る事に間違いがあるはずがございません」

「……セシェン君、根に持ってる？」

「何の事でございましょう」

……どうしよう、白かったセシェン君がブラック魔王に侵されつ
つある。

ケンケンなセシェン君とかイヤだなあ。

「まあ、どうでも良いものはさておいて、どうしたプチプーペ」

「えつとねっ！」

無駄に背の高いデュランを見上げているせいで、殆どイナバウア
ー状態のプチちゃんはそのから更に胸を張って、元気よく手を挙げ
る。

「パパにねっ！ おみやげっ！」

「ほう……」

ポシエットから水色の風車を取りだすプチちゃん。

それを受け取ってデュランは小さく微笑んだ。

いつもへらへら笑ってばっかの奴だが、ちょっと今は良い感じ
の笑い方だった。

黒く長い爪が風車の柄を取る。

「受け取っておこう」

良い子だ、と頭を撫でるデュラン。えへへ、とはにかむプチちゃん。

「って待て待て」

「ん？ どうしたナカバ。お前が欲しかったのか」

「イヤ要らん。じゃなくてあんたが受け取っちゃ駄目だろ」
「何故だ」

いや、何故だ、じゃなくて。

「プチちゃんがえーっと、パパさんの為に持って来たんでしょう？」

「うんっ！」

「つまり私のだろう」

「うんっ！」

「いやいや……」

……いや？

「パパって誰？」

「これっ！」

びしっとさしたその指先にはどう頑張っても魔王様しかないが。

「……パパ？」

「お前の父親になった覚えはないがな」

いや、オレもあんたみたいな親は嫌だ。

立体映像とオレ（後書き）

【作者後記】

まずしさに負けた？ いいえ、眠気に負けました。

昨日帰って食事前に一眠りと思っただら……軽く13時まで寝てました。

眠りすぎて軽く脱水症状起こしてました。怖い怖い。

お気に入り登録51番目、52番目の方ありがとうございます。
もう少しで総合評価150行きそうな勢いです。

……良いのだろうか。

箱入り娘ならぬ箱入り神ですよ、魔王様って

作者拝

親子関係とオレ

この場合のパパとは何でしょうか。

A・あだな B・父親 C・援助交際のパパ D・デュランには
幼女にそう呼ばせる趣味がある

テレフォンはここじゃ使えないし、フィフティ・フィフティかな。

「BかDだな」

「じゃあD」

ジャラララライン。ドラムロール。

「残念」

「ええっ?! ありえねー!!」

「そこでDを即答するお前の思考がまずあり得ん」

眉を顰めつつデュランが肩を竦めた。

「で、Bってなんだっけ……エンコー?」

「親だ」

何故そう話をおかしな方向に持ってゆく、とかデュランが何か言
ってるけど……。

プチちゃんを見る。

デュランを見……目を逸らす。

「……ナカバ」

「イヤだやっぱり見たくない。正視とか無理。眼が白内障になる」

「安心しろ。ならん」

「てゆうか、父親って何？」

「やれやれ、そんな単語も知らないとは……最近のゆとり教育はどうなっているのだろうな」

「ゆとり言うな」

「あのねっ！　パパはねっ！」

馬鹿パパとは似てもつかないプチちゃんが何故かVサインをこっちに向ける。

「ねじを巻いてくれたんだよっ！」

「……ねじ？」

「うんっ！」

「要は刷り込みだな」

「いたいけな美少女に何を刷り込んだ。ついでにオレをどう改造したかキリキリ白状しやがれ」

「これは人形だ^{オートマタ}」

はい？

「なのっ！」

「……えーと？」

「機能停止していたこれを発掘して、再起動させたのが私だ。つまり親代わりという事だな」

……はあ、つまり？

「巻きますか、巻きませんか、という奴だな」

り。ちゃんでも。ラレちゃんでもなく、ローゼ。メイデンだっ

たつてことですか。

「じゃあ、あんたに惚れた拳句もてあそばれて捨てられた女性が数千人とか、ある日家の玄関の前に「貴方の子です、お願いします」とかいうメモがあったとか、実は後宮があつてとか」

「無い」

何故かうんざりした視線のデュラン。

「ちつ……赤ん坊のおしめとつかえてるデュランとか笑えそうなのに」

「あいにくこれは製造段階からこの姿だ。これ以上体が成長する事も無い……その体と同じだな」

「黙れデュラン」

オレはまだ伸びるんです。誰が何と言おうとも。

「まあ、取り合えず『娘』だ」
「パパだよっ！」

いやあ、さつぱり似てないけどね。

ふむ、つまり養子つてとこのなのかねえ。まあ、あの可愛いプチちゃんがデュランの血筋じゃないと分かっただけでも安心だけどさ。

「まあ、ネジが切れかかっているのではないのならば良い……」

「うんっ、まだへいきっ！」

「ついでに少し巻いておくか？」

「うんっ」

応えてプチちゃんがデュランに背中を向けて頭を垂れる。

その長い銀色の髪を掻きわけ、デュランがうなじに触れる。

パキンと音がして、首の部分が開いた。あ、ほんとだ……中にゼンマイとか歯車が詰まってるのが見える。

普通に見た目は人間そのもので、ガシヨンとかガチャコとか音しないのに中身はやけにアナクロだなあ。

うーん、しかし絵的に怪しさ爆発というか、完璧に危ないおっさんといわずらされてる幼女だな。

見てるとこっちにうなじまで痒くなってきた。

うーん、掻きたい。むずむずする。何かオレまでここがパカッと開きそうというか……。

「よし」

言ってデュランが顔をあげ、開いていたうなじをパチンと閉じる。閉じるともうどこが境目だったのか分からない。ただの首だ。

「起きろ」

ポンと背中を叩くと閉じていたプチちゃんの目がパチツと開く。

「おはよっ!」

「おはよう……終わったぞ。不具合は無いか」

「へいきっ!」

「そうか、では遊んでおいで。くれぐれも壊しすぎるなよ」

「はいっ!」

「……放任主義?」

「陛下ですから」

小声で呟いたオレに、セシェン君が小さな声で呟く。

「お嬢様は『めんでなんす』以外はこちらにお戻りになる事はまず
ございません」

「え？　じゃあ衣食住は自前？」

「はい」

「うわー、それ一種の放置じゃない？」

「ナカバ」

あ、気付かれた。

「何でしょう」

「私が誰かを育てるのに向いていると思うか？」

「いや、全然」

「なら自主性に任せたほうがベターだとは思わないか？」

「…………… 思います」

不本意だが、正しい。いや、何か決定的に違う気もするけど、デ
ュランに子育て…………… 子供可哀そう。

ぐれるどころの騒ぎじゃ済まない。

「まあ、どうせ面倒をみるにも表立っては出来んしな…………… 魔王の娘
だと妙な喧伝をされてはこれも氣づまりだろう。まあ、加減を覚え
るのも兼ねて好きにさせておいたほうが建設的だ」

「？」

「ああ、まあね…………… 分かった」

「分かった、とは？」

「訂正する。よりによってアンタに関わったプチちゃんが可哀そう」

オレの言葉にデュランは一瞬紫の目を見開いて、それから愉快そ
うに笑った。

親子関係とオレ（後書き）

【作者後記】

特に何も書く事がありません。どうも尋です。
なのでご来訪の皆様への感謝だけ述べておきます。ありがとうございます。

相変わらずWeb拍手の設置方法が分かりません

作者拝

かさ増しとオレ

「さてと、プチプーペの件はひとまずは片付いたとして……セシェン」

デュランが指をパチンと鳴らすとセシェン君の目の前に直径3cmくらいの小さな桃のような物が現れた。

ちなみに色は灰茶色。熟しすぎちゃったバナナの色。

間違つても「わぁ、おいしそう！」とか思えない。

むしろこの色痛んでるだろ。腐ってるだろ。そうしか見えな
い。

瀕死なところに変質者ゴツキーに襲われ、疲労困憊のところに腐
った桃もどき。

某高校生のように「不幸だ」とセシェン君が嘆いたとしても誰も
責められまい。

まあ、神の御加護^{ラッキー}は魔族のセシェン君には関係なさそうだけどね。
さすがのセシェン君もこれを受け取る気にはならないのか、謎の
実(?)を見たまま停止してる。

「食べる」

響く鬼畜魔王の声。

あ、あセシェン君の耳が垂れた。

「聞こえなかったのか、セシェン」

「……このようなもの、いただけません」

おお！ 良く言ったぞセシェン君！

しかし、デュランの方は大人げなく顔に「ふきげん」の札をぺた

つと張り付けたように片方だけ眉をあげる。

顔に浮かんでるのは笑みだけに、ものっそい性格の悪さが露呈されている。

泣く子も黙る、魔王来々って感じ。

「セシエン」

猫なで声で名前を呼ばれ、セシエン君が俯いて体を震わせる。
がんばれ、負けるな、力の限り生きてやれ。

「セシエン、三度目は無いぞ」

「……。はい」

あー、負けちゃった。

まああんな風に笑顔でやんわりと脅されたらオレでも断り続けるのは無理だろうけどさ。

セシエン君は覚悟を決めたのか、牙牙した口をあけてガブリと丸ごと桃もどきを食べた。

セシエン君が某人食いザメに見えた。

「……大丈夫？ 死んでない？」

「人聞きの悪い事を……」

「いやだって、アレ食べた瞬間に吐き出しそうな色してたよ」

「クコだ。まあ、栄養ドリンクだと思えば良い…魔力を回復するものだ」

「へえ」

あつそ、まあ本音はアレが何だって良いんだけど。

お、セシエン君がいつの間にかSサイズからLサイズになってる。ちみワンコもなかなかラブリーだったが、オレ的にはモ口様みたい

なこっちのサイズの方が良い。

チワワより土佐犬がオレは好みだ。小型犬うるさいんだもん。

「あの小さかったセシエン君がこんなに立派になって……ばあやは嬉しゅうございます」

「いえ、ナカバ様はまだお若いかと」

「セシエン、その突っ込みは無粋だぞ」

「ボクもっ、立派っ！」

小柄でもビリリと危険なプチャんが無い胸を張ってる。

あなたはそのままいてください、とか思わず心の中で呟いてしまったほど彼女は輝いていた。

「でー、何故に拡大？」

「魔力が戻ったからな。幼体では内包する魔力に体が耐えられない。よって無意識に体を成長させたのだろう」

「えーっと？」

「体と力のバランスを取る為に本来の姿に近づいたと言う事だ。空気を風船の中に吹き込めば膨らむだろう」

「ふむふむ、じゃあ魔力が高いほど体は大きくなるわけ？」

「いや、そうでも無いが……力に見合った体でなければ崩壊するからな」

さらっと怖い事を言うデュラン。

まあ、魔力ゼロらしきオレにはさっぱりちっとも関係無い話ですが。

「まあ、セシエンが自力で回復するのを待つのも面倒だったのな」「面目づきません」

うなだれるセシエン君。

「さて、セシエンは放置するとして」

放置すなよ。お前本当に非道だな。

「ナカバ」

「何」

「貸しておく、使え」

オレの目の前に銀色に光る立方体が現れる。
ん？ この感じ前に何処かで見たような。

「ああ、キューブの原型か」

「陛下！ それは陛下のキューブではございませんか！」

「替えが今は無いからな、貸しておく。セシエン、ナカバが妙な事をしないように見張っておけ」

オレの事なんだと思ってる。

「サルの前に核兵器のボタンを並べて置いてあるようなものだからな」

「サル言うな！ つーかそんな物騒なものよこすな！ 返す！」

「まあ、カードキー機能以外は弄るなよ」

「そう言う事言うとやるぞ」

ちなみにオレは機械クラッシャーとして知人間では有名である。
近寄るだけでGPSを狂わせる魔性の存在とか勝手な事言われてるが、オレが乗った車のカーナビが暴走したのは事実なので言い返せないのが悔しい。

多分偶然。

計10回以上ジャイロが狂って、全部オレが助手席だった時だとしても偶然だったら偶然だ。

「まあ、その為の安全装置セシエンだからな」

「セシエン君不憫だ……」

「そう思うなら大人しくしている。一応後でそちらにコレも行かせるから、大抵の災害は大きくなる前にプチプーペの騒動に飲み込まれるだろう」

「ダメじゃん」

被害拡大してるじゃん。

「てゆうか、あんたはどうするわけ？」

「ヴァンパイアの当主を少し黙らせてくる予定だ」

じゃれついてるプチちゃんを片手であしらいながら、デュランが何気ない調子で言う。

でも、オレはその言葉にセシエン君が微かに緊張するのを見てしまった。

「何だ」

「うんにゃ、別に」

ま、あのゴッキーがどうなろうとオレには関係ないし。
でも、

「ほごほごにね」

「……ああ」

オレの言葉にデュランは小さく笑い、その場からプチちゃんごと掻き消えた。

かさ増しとオレ（後書き）

【作者後記】

どうも、尋です。月曜日です。四月最終週です。

あとちよつとでGWですね。お仕事されてる皆さん、無事にGWはやすめそうですね？

お互い休めると良いですよね……一日中寝ていたいダメな大人になつてしまいましたけど。

最近お気に入り登録繋がり小説を読んでいます。後読んでないのは多分2作品ぐらいですかね。他は読しました。

他の人の文才が羨ましいです。

綿密な構図とか惚れ惚れしますし、読んでいて思わずニヤツとしてり噴き出してしまったり、ああ言う話が書きたいですね。

読みたい放題。幸せです。

カーナビのくだりは実は実体験。

作者拝

おふくろの味とオレ

その後の3日目、4日目の様子は割愛する。

簡単に言えば屋敷内探検ごっこの続きだったり、主都観光に出かけたりしてた。

オレのお供はプチちゃんとセシエン君。

右手にプチちゃん、左手にセシエン君。おててつないでさしずめオレはグレイってとこだっただろう。オレの方がプチちゃんよりは背は高いけどさ。いや、むしろ大中小トト。？

それはまあ置いてあの2人、目立ちすぎる。

片やある時は破壊神、ある時は愛の美少女戦士。しかしてその実態はオートマタなプチちゃん。

片や一つ暇な余の弄られを受け、二つ普段はパシられ三昧、三つ皆の期待を背負い、今日も不憚なセシエン君。

両方ともサラサラ銀髪的美男美少女ときて、間にオレである。

何、この景気の底的立場。

昔聞いた話じゃあ、美人の左右にそれほどでもって人を配置すると、美形っぷりが際立つそうなの。

オレがその時体験したのはその逆バージョンだった。

あの場で切れて2人を追い返さなかったのはオレの人徳って奴だろ。

や、まあ追い返すどころじゃなくてプチちゃんが「勢い余って」「ついうっかり」その辺を荒涼たる大地に変えないようにセシエン君と一緒に奔走しまくってそれどころじゃなかったのが実態なんだけどさ。

はー……。

あの子良い子なんだけど、悪気が無い分始末が悪いっつーか……

デュラン、やっぱ前言撤回。

「娘」の教育しつかりやれよ。

放任すな。

一度ぐらい顔貸せや……じゃなくて顔出せや。あ、やっぱいい見たくない。

ま、そんなんで何だか無料で働かされまくって5日目の静かな朝。昨日の夕方またプチちゃんがあてどない放浪の旅に出たのでオレとセシエン君も子守の御役目ごめんとなり、平和なにちじょーというやつが戻ってきた訳なんだけど。

なんですけどね。

ですけどね。

「カップラーメンが食べたい」

「はい？ 何か？」

「いえ言ってみただけです」

健康的なメニューを前にオレはつつましく沈黙を守った。

いや、美味しいんだよ。すっごく美味しいのコレ。

ホテルの朝食かってな感じの中はもっちり外はパリパリ焼き立てクロワッサンとか、サクサクしっとりなイングリッシュスコーン。トロツとしてるけど味はさっぱりなレモンマレードとか、ヨーグルト。フルーツサラダ。ピンクの肉と白い脂身が折り重なって、ちよろつと焦げ目がついた香ばしいベーコン。温野菜のコンソメゼリ寄せ。えーと、これはなんのスープだっけ……とにかく美味しいスープとか何とかエトセトラ。

そりゃあもう、至れり尽くせりな訳ですよ。

しかも全部タダ。出来たて手作り、とれたて新鮮。

飲み物だって水だろうが野菜ジュースだろうが牛乳だろうがお茶

だろうが、頼めばすぐに出してくれる。

こんなのが、朝、昼、晩。要求すれば三時のおやつに「当店のシエフの自信作でございます」的なケーキだとかクッキーだとかパイだとかアイスクリームだとか、そんなものまで出してくれるんですよ。

しかもこれ全部セシエン君一人で作ってるんだよ。

某魔王様は「食べる気が起きない」とか勝手抜かして部屋で引きこもりのニートやってらしいんだけど、つまりイコールこれ全部オレー人の為にセシエン君がせっせと腕揮ってくれてるんですよ。ありがたくて涙ちよちよぎれるような話なんですよ。

ちなみに、初日のあの料理は本当にデュランの嫌がらせ（自称「お茶目」……死ね）だったそうで、その後の食事は食材から見た目から至って普通。

何でもセシエン君がデュランからオレらの世界の状況を聞いて、少しでも食べやすく馴染みやすいものを選んで作ってくれてるんだそう。

つまり、目の前のこれはそういう努力と善意と親切の結晶だつてー事で……

言えないよなあ。言えねえ。ああ言えねえよ。

ジャンクフード食べたい、とか。

こちらら一般ピープルなんで、学校帰りのファーストフード立ち寄りだとか、コンビニでスナック菓子買ったりだとか、休みの日の昼飯は冷凍食品とかお湯注いで三分のインスタントラーメンを食べたりだとかして育ってきている。

で、まあ……異世界五日目にしてああ言うチープな味が懐かしくなっちゃった訳でして。

でも、この世界にそんなもん無いよな。

大体が電気ポットがなさそうだ。

機械自体ほとんど存在しないとかデュランが言ってた……や、あいつは信用ならないけどさ。

これも冗談だとかお茶目だとか抜かしやがったら、今度こそあの目に唐辛子塗り込んでやる。

あー、でもす。屋の牛丼とか食べたいよう。

そんな事を考えつつママレードの瓶から中身を匙で取ろうとすると、セシエン君が控え目に「ナカバ様」と俺に声をかけてきた。

「あ、ちよつと待って……今顔あげたら確実にジャムと俺の服が結婚するから」

「畏まりました」

「で、何？」

スプーンを置いて聞き返すと、セシエン君がじつとオレの方を見ていた。

「ナカバ様、何かご要望がございましたら仰っていただけないでしょうか」

「いや、特には無いけど……美味しいよ、すごく。感謝してるし」

これは本音だ。

でも、セシエン君は少し表情を曇らせただけだった。

「何かお悩みのように見えますが」

うーん、そんなに顔に出てたかなあ。

某ハンバーガーのCMのゴルフの王子様みたいになってたんだろ
うか。

どうやらごまかしてもセシエン君の追及は止みそうになかったの
で、オレはなるべく婉曲に話をした。

つまり、

「成程……元の世界の味が恋しくなられたのですね」

「うん、まあ一種のホームシックかもねえ」

和食も食べたいし。まあ、あれは実家でもあんまり口にする回数
は少なかったけどさ。

炊き立てご飯は神だと思う。

「ナカバ様の世界の独自の技術による加工食品なのですね」

「うん、まあね」

「それでしたら、少々心当たりがございます」

「だよねえ、やっぱ無理だよねえ」

……。

ナンデスト？

「え？ それってつまり」

「はい、お任せ下さい」

につこりと爽やかに微笑んだセシエン君に、オレは黙って合掌し
た。

おふくろの味とオレ（後書き）

【作者後記】

こんばんは、ご来訪ありがとうございます。

評価を入れて下さったその貴方、ありがとうございます。

お気に入り登録に新たにお願いで下さったその貴方と貴方、ようこそいらつしゃいました。

心より歓迎いたします。若干逃げ腰なのは大目に見えていただけると助かります。

三日目後半と四日目はぐだぐだ感が加速しそうなのでちょっと省いて異世界五日目朝です。

セシエンの「心当たり」とはいつたい何なのか。

次回をお楽しみに、していただけると嬉しいです。

作者拝

インスタントとオレ

「本当、に、あつ……たよ……オイ」

ここはセシエン君の記憶力に感謝する場面か？

それとも変人魔王の趣味に……あー、いややっぱりこっちは感謝とか無理だ。

とにかく、黒いビロードの上に仰々しく飾られたカップラーメン、もといカップヌー。ル・シーフード&カレー味（ぷろでゅーすどばい「日。」）を前にオレは呟いた。

さすがノーボーダー。

世界の壁も越えやがった。

ちなみにオレの言葉が途切れがちなのは笑いすぎて息切れ起こしたからだ。若干わき腹痛い。

いや、だってスーパ―の棚に並んでる一個１７０円の奴がご丁寧に飾ってあつて、しかもセシエン君、毎日これを布で磨いてたそう。その衝撃的告白がオレの腹筋にトドメを刺したのです。

いやあ、笑った笑った。涙が出る程笑ってしまった。

「大丈夫ですか？」

「何とかね……」

呼吸困難だった。

はー、疲れた。

おなか減った。

「もう減ったのですか……」

「笑うのって結構体力使うしね……どれどれ？ 賞味期限切れてな

いな、よしよし」

さすが保存食。

「シヨミキゲンとは？」

「今なら美味しく食べられるぜ時間制限、みたいなもんかな。えーつと、干し肉だって長持ちするけど、一定期限過ぎたら味が落ちたりする……と、思うんだけど」

「それで賞味期限なのでございますね」

あ、味やつぱり落ちるのか。

あてずっぽう万歳。

「カップラーメン、ふんふんふんふん、ぱんぱんぱんぱーん」

「楽しそうですね」

「まあね」

興味深そうに見て来るセシェン君にオレは頷く。

「どのように調理するのですか？」

「蓋開けて、お湯注いで、終わり」

「何と……」

オレの説明に何か感銘を受けたっぽいセシェン君。

「そのような便利なものがあるのですね」

「結構色々な種類揃ってるしね」

「干し飯のようなものですかね……」

「え？ 欲しいの？」

「いえ、干し飯です」

「……えつと？」

「米の事です」

「そんな品種、聞いた事無いけど」

「左様でございますか」

何か、また会話が微妙にかみ合って無い気がするけど、気にしていても仕方ない。

お湯沸かさないと食べれないし。

部屋までもどればＨＩコンロがあるけど、帰るまでがかったるい。展示品にティファール。の電気ポットがあっただけどここにはコンセントが無い。

しょうがないから、セシエン君に頼んで普段デュランが珈琲作る時に使ってるサモワールを借りてお湯を沸かすことにした。

これは炭でお湯を沸かす古くからの型らしくって、現代っ子のオレでは使い方はちんぷんかんぷんだったので、ここはセシエン君にお任せしよう。

「てゆうかさ」

セシエン君が慣れた仕草でサモワールの中に炭を入れるのを見ながらオレはふと思いついて聞いてみる。

あ、真ん中の空洞部分に炭入れるんだ。

「デュランって何かこういう手動式とか、古いグッズが好きな訳？」

「古い、でございますか？」

「うん、ほら。あの何だっけ……コーヒー淹れてたのも何かちょっと見かけない感じの道具だったじゃん。ヒョウタンみたいなのを火で炙って……」

「あれはサイフォンと言う名前だそうですよ」

「あー、うん。それぞれ」

もつとさくつとすぱつと素早く作る事も出来そうなもんを、わざわざ手間かけて時間かけてやっている。

豆をおままごと用みたいな小さなフライパンでローストし、手動式のミルでガリガリ挽いて、お湯だつてこれつかつてるし、一杯の珈琲が出来上がるまでに相当かかつてる。

デュランは待つてりやセシエン君が用意してくれるから良いけど、セシエン君は他にも仕事抱えてる訳だし、これがインスタントコーヒーで済むならセシエン君大分楽になるんじゃないだろうか。

「お湯が出来ましてございます」

「あ、ども」

蓋をひっぺがしてお湯を注ぐ。蓋をする。

「三分間待つてやる」

「は？」

「いや、一種の様式美ですから」

ビルの高層階から下を見下ろして「見ろ、人がゴミのようだ」とやるのと一緒。

「まあ、出来上がるまで三分ほどかかるんで」

「成程」

「あ、折角何でセシエン君も食べてみます？」

「……そうですね、頂戴しましょう」

食堂に移動するのも何なんで、このままここで食べる事にした。カレーの匂いはセシエン君は苦手だったらしく、けどシーフードはわりと好評だった。

こういうスパイスの強いものはセシェン君あまり口にしないんだ
そう。味覚嗅覚が鋭い体質だっていうのも理由の一つらしいけど、
毒見役も場合によってはやる必要があるから刺激物は避けてるんだ
とか。

でも、あの魔王様なら毒食っても平然としてそうだけだなあ……。
いや、案外ダメなのか？ 仮にダメージあっても見栄張って平気な
顔してそうではあるけど。

「えーと、でさ。さっき思ってたんだけど」

床に胡坐いへかいてラーメン啜りながら、オレはセシェン君に「イン
スタントコーヒーって知ってる？」と聞いてみる。

案の定セシェン君は「いえ……」と首を振る。

「申し訳ございません」

「そっか。ここにかっぱらって来てれば良いんだけど」

「かっぱらっ……」

「じゃあ誘拐？」

「……」

「インスタントコーヒーで済むならセシェン君楽になりそうなの
なあ……今度デュランに聞いてみよ」

「それは珈琲なのですか？」

「うん、こんな風にお湯注げばいいだけの奴」

「人間とは色々考えつくものですね」

「基本的に非力だし、楽するの好きだしね」

カレーの絡んだ縮れ面をフォークに巻きつけつつオレは言う。
お陰で万能包丁が一能包丁になるオレでも餓死しないで済んでる。
文明ってありがたい。

「ナカバ様は」

「ん？」

「いえ、わたくしの事までお気遣い頂いてありがとうございます」

「や、世話なってるし。普通だって」

そういうほめ言葉とか聞くとムズムズするから止めて欲しいんだけどなあ。

視線を明後日の方向に逸らしつつ、オレはとりあえず今度デユラに会ったらインスタントコーヒーについてどうやって聞きだそうか、とか色々考えていた。

インスタントとオレ（後書き）

【作者後記】

凄い雨でしたね。こんばんは、作者です。

本日もお越しいただき、誠にありがとうございます。

今、別の話というかこの話のセッション視点を書くかどうか考えてます。
読みたい方いらっしゃるのでしょうか。

ナカバの視線は大分偏ってる（かつ知識が欠けている）ので大分雰囲気は変わってしまうかとは思うのですけど。

ともあれ、一先ずこの話に決着をつける所までしっかり進みたいと思います。

宜しくお願い致します。

作者拝

二者面談とオレ（前書き）

液体ヘリウムのような目をこちらに持ってきたので、立体映像編を少し一部書きなおしました。

二者面談とオレ

「乳酸菌とつてるう？」

「何だそれは」

深夜。

例によってデュラン不在の夕食を済ませて、風呂も入って、そろそろ寝つかないと思つてたその矢先、セシエン君がオレの部屋を訪ねてきた。

簡単に言つとデュランへの面会許可が下りたんだそう。面会謝絶解除、みたいな？

ま、会いたいならば来ても良いし、ほつといても構わない程度の話らしくて、セシエン君も「夜も遅いですし、おやすみになられては？」とか気遣つてくれた。

でも、あえて俺はデュランの所までてくてく歩いてやつて来たんだけどね。

気になつてたからさ。

色々と。

久々に見た生魔王は相変わらずムカツクを通り越して細胞単位で拒絶信号受信しそうなほどイケメンだった。

願掛けでもしてるのか、やたら長い黒髪は今は結んでなくて、最初に出会った時みたいに長椅子に横になって、肘ついて上半身だけ軽く起こした姿勢。

ふむ。さつきまで寝てましたってな感じだな。

「具合悪いんじゃないの？」

勧められた白い一人掛け用のソファーにどっこいせーと腰をおろしつつ、オレは聞いてみる。

それに饒舌な奴にしては珍しくちょっと黙って、それからデュランは苦笑した。

「まあ、だいぶ落ち着いたがな」

「ふうん、なら良いや」

「何だ、心配でもしたのか？」

「当たり前。またセシエン君に齧られたらイヤだし」

「ああ、あれは悪かったな」

あっさり認める魔王。ふむ、やっぱりそうなのか。割と勘だったんだけどな。

「で、齧られたのか？」

「や、未遂だけどさ……あ、そうそう。それで思い出した。指輪サックス。あとこれ返す」

銀色のキューブを投げると、デュランは見もしないで無造作にそれをキャッチした。

……。何この運動神経の差。

「リングか……また作っておこうか？」

作って早々に役立つとは思って無かったしな、と物憂げな眼差しで頬杖をつくデュラン。

「何だ、心配でもしてくれたの？」

お返しに今度はこっちから聞いてみる。

「当然だろう」

微笑セツトで返されてしまった。

「……」

「……」

「……」

「……。え？ オチなし？」

「ん？ ああ……考えていなかった。お前が適当に作ってくれ」

「おい」

「まあ、悪かったな」

ちつとも心のこもらない、申し訳なさの欠片も無い謝罪だな。

セシェン君みたいに切腹しかねない恐縮っぷりは心臓に悪いが、こっちは精神に悪いな。

足して二で割って薄めれば良いのに。

「さて、何か質問があるらしいな。セシェンからそのように聞いているが」

「ゴツキー元気？」

や、これは本題じゃないんだけどさ。一応。

「……お人よしだな、お前は」

ややあつて、デュランが苦笑する。

や、別にゴツキーはぶっちゃけどうなってもいいんだけどなあ。さすがに殺しかけられて赦すほどオレは心広くないぞ。

「まあ、消しては無いぞ」

言いつつデュランがボンと何か投げて寄越す。

うおっとおおっ！ 取り損ねたー！！

あーあー、転がってちゃったよ。

「下手だな」

「うっさい！」

取り合えず真っ白い上に物が無い部屋なんですぐみつかったけど、何この赤いの。ベビーベ。？

「それを抜いて追い返した」

「抜いた、って……まさか心臓とかじゃないよね？」

「魔力を使用する為の核のようなものだ。車でいう燃料貯蓄槽とハンドル、両方の機能を兼ねている」

「うわ、えげつな……」

車に貯蓄槽が無ければ燃料を取り込めない。

ハンドルが無ければ車として殆ど使い物にならない。

エネルギー……この場合魔力を体内にため込めないし、コントロールも出来ない状態ってことか。

改めて言おう。

えげつないぞデュラン。

「抜かれたら死ぬんじゃない？」

「生存最低限ぐらいは残してある。それに一切の外部干渉を断つようカウンターをかけてある。魔法も物理干渉も今の奴には無効だ。

まあ、俺の力より強い力で干渉されればその限りではないがな」

「それって親切なようで、実はちっとも親切じゃないよね」

一切のつてことは回復とか治療もムリってことじゃん。
オレがつっこむとデュランは愉快そうに唇の端を吊り上げた。
悪役スマイル。

「まあな」

「うわー……確信犯だし。しっかしさあ、良くそんな重要なもん差し出したね、あのお貴族様」

「ん？ いや、それは自分で取りだそうとして出せるものではないからな」

「あ、そう」

つまりお前が強引に引っこ抜いた訳か。

デュランは レベルが あがった！

えげつなさが 2ポイント あがった！

デュランは きちく のしょうごうをてにいった！

「その「2」の根拠が良く分からんな」

「テキストです」

「まあ、お前が程々というから手加減はしておいた。消しても良かったのだから」

暇そうに指遊びをしながらデュランが呟く。

……うん、そうだと思ってた。

実際あの時デュランはほぼヴィスカスを消す——殺すんじゃない
くて、消すつもりだったんだと思う。

「陛下は特別ですから」——セシェン君の口癖。

別格の存在。

魔王は魔界で最も強い魔力の持ち主。最強の称号。

デュランは基本的に鷹揚、つーか大雑把。大抵の事はあまり気にせず流してる。

オレが悪口言おうが、口横に引つ張ろうが、蹴ろうが笑って気にしない。

ま、それはそれでむかつくんだけどさ。

あー、それはさておいて、こっから先は想像だけどヴィスカスのストーリーも嫌がっちゃいたが、大目に見てたんじゃなかるうかと思う。

この前の森林伐採の時もデュランは言ってたしね、「手加減してる」って。

屋敷に侵入して小物をちよろまかしてくのも多分アレが初めてじゃないだろうし、ぶっちゃけ今までは見逃してたんだろう。

でも、一昨日はヴィスカスを見るデュランの目が違ってた。

液体ヘリウムみたいな目。

あーやばいなーと思ったから釘刺しといたんだけど……うん、刺しといて正解だったっぽい。

「ま、意外とセシェン君大事にしてたんだねえ」

ちよっぴりほほえましいぞ。

「当たり前だろう、気に入らない奴をここに置いておくほど俺の心は広くは無い」

「いや、心の狭さって傲慢にならないから」

「それで」

軽く肩を竦め、デュランが背中に入れたクッションの位置を動かして座り直す。

「聞きたい事とは何だ」

オレはまだ肝心の事を確認していない。

二者面談とオレ（後書き）

【作者後記】

こんばんは、尋です。

本日もお越しいただき、誠に光栄の限りです。

さて、ナカバの異世界旅行もあと残す所僅か……日数的には、ですけど。

次の次辺りでまたちよつと場所移動ができるはずなんですけど、どこまでデュランに内実を喋らせるかわりと迷ってます。
もう少々お待ち下さいませ。

作者拝

独白とオレ（前書き）

いきなり追及に入ると少し不親切かと思ったのでインターバル。

これだけの材料で考えるとか無理じゃね？ と思いますが大目に見て下さい。

さて、ナカバが「気になっている事」と「推測」そこから導き出される「聞きたいと思った肝心の事」とは何か。

宜しければ考えてみてください。

独白とオレ

あ、ともども。こんばんは。

ナカバ・マサキです。

いつもお世話になって……るのか？

いや、どっちかつーと付き合わせてすみません、って感じなのか。

うん、どうもです。

べ、別にあんたの為に礼言ってるんじゃないからねっ！

……よし、一応これで義務は果たした。

ま、オレがツンデレったところで大半の人は42・195Kmほど後じさるぐらいだけだろうが。

前置きこれぐらいにして、以下注意事項。

最初に言つとくとこの回はぶっちゃけ読みとばしてOK。

中休みって奴だから、気にせんで問題なし。

うん、つまりあれだ。

出題編と問題編の間の「読者への挑戦」みたいな？

や、オレは挑戦する気とかさらっさらないけどさ。

オレイン酸もびっくりなぐらい、さらっさらに無いから。

「私、貴重な時間を割いて来て差し上げてますのよ」みたいな人

は、このまま次の話に飛ばせば良いと思う。

時間大事。

少年老い易く、金出来難し。昔の人は良い事言っね。

さすが時は金なりって言葉を作っただけはあるね。

春宵一刻値千金ってやつは微妙だけど。

詩自体は好きだけどね。

で、だ。

本題。

何しよかつつーと、単純に今までの疑問とかをまとめとこうかって事。

これからあの外は美形、中はもっちり……じゃなくて古ダヌキなあの魔王様から答えを引っ張りだそうってんだから準備は必要だろう。

オレは勇者でも、真の。国無双でも、超監督でもない、ただの一般なんだし。

しっかりこっちの攻撃の一手を固めてから行かないと。

異議あり、で突っ込ませてくれるぐらい容易い相手じゃないんだし。

オレの頭ん中で今、この五日間で得た情報がぐちゃぐちゃしてる。

ひっかかった事。

違和感を覚えた事。

気がついた事。

知った事。

つまり。

魔王の称号とはいったい何を示すのか。

魔法と魔術の差とは何か。

魔力と魔族の関係はどんなもんか。

デュランのチート能力の利点と欠点。

どうして三日目の朝に限ってセシェン君は暴走したのか。

黒い輪っかは何のために存在するのか。

どうしてデュランは機械オタクなのか。

二日目のゴツキー襲撃が与えた影響とは一体何だったのか。

最後にオレがデュランと「直に」顔を合わせたのはいつか。それは計画通りだったのか。

「陛下は別格ですから」のセリフの裏にあるものは何か。

最後に、

じゃあ、どうしてデュランは」

「のか？」

これが情報を繋ぎ合わせて、導かれる一つの推測からの疑問。

オレの考えが正しいなら、デュランはこれの答えをごまかしてる。

でも、何故それをデュランが隠しているのかが分からない。

そこが、分からない。

分からないから迷う。

聞いて良い事なんだろうか。

聞けば、多分こいつは答えるんだろうけどさ。

良いのか、聞いても？

……ま、いつか。

悩むのは後でもできるし、大体上手く聞き出せるのかも分からん

し。

やれるところまでやって、後でそれは考えよう。

さてと、

じゃあ、始めますか。

自称24歳のこの無駄美貌相手に、
一般人からの追及劇^{ファルス}を。

さてさてお立会。

開幕。

独白とオレ（後書き）

【作者補記】

最初「毒吐く」になって似合いすぎると大笑いしました。
さて、今日中にもう一つ行きます。

前哨戦とオレ（前書き）

間に合わなかった……おのれプロバイダー……
すみません、お待たせ（？）しました追及編です

前哨戦とオレ

促されて、オレはうーんと唸ってソファアの背もたれの方へ体を傾ける。

キシ、とスプリングが軋んで心地よい反発のクッションがオレの体を受け止めてくれる。

革張りより、こつ言う布系の肌触りの方がオレは好きだ。
さらつとしていい。

「聞きたい事はさ、突き詰めると一個だけなんだけどね」

「ふむ？」

「先に幾つか質問して良い？」

「どうぞ」

優雅に微笑むデュラン。

元が男か女か分からん顔してるだけに、こつ言う表情が妙に似合うの。

何か悲しくなってきた。

「……ナカバ？」

「はぁ……」

「どうした？」

「いや……うん、じゃあデュランに魔族は逆らえないらしいよね」

「あぁ……」

取り合えず遠回りすることにしたオレの質問にデュランは小さく苦笑する。

「正確には自意識を正常に保ち難くなる、と言っべきか。セシェン

が起こしていた魔力酔いの状態だな」

「んーと、あれって結局どう言う事だった訳？」

「文字通り「酩酊」状態だ。正常な思考を失い、渴望……一種の飢餓に似た衝動を引き起こす。元より俺の力は奴らにとってはネコにまたたび、アル中にアルコールのようなものだからな」

俺の力、ね。

しかし、身も蓋も無い例えだな、相変わらず。

「通常状態でも一定時間以上近くに居る程に正常な判断力を失い、無条件に支配されることに喜びを感じるようになる。洗脳、服従、隷属……まあ訓練次第である程度この呪いからは自由になれるがな」

「ふむふむ。じゃあさ、もう一個質問」

「あんたのチート能力……あの指パツチンって魔法？ それとも魔術？」

「ふむ」

オレの質問にデュランは一度瞬いて、それから目を伏せた。

「やはりお前は実に面白い」

「いや、そんな某物理学教授の台詞みたいな事言われても……」

原作お勧め。実に面白い。

「答えは魔術、だ」

最初からそう言えよ。

「まあ、魔術自体は随分古い方法論だからな。今時使うのは俺ぐら

いだろう」

「というと？」

「そもそもこの魔術という概念が発見されたのは今から数千年ほど前の話になる。このキューブが開発され、プチプーペの作成原案が出来たぐらいの時期だな。世界を解析する試みというのが当時なされていてな」

姿勢を変え、組んだ膝の上に手を置いてデュランは何処か面白がってるかのような表情で語る。

「その研究の副産物として発見されたのが「魔術」だ。魔法が言葉ならば魔術は機械語というところか……根本に近く、その分理解しなければ扱えぬ難物だ。もっとも、この魔術を含めた当時の研究成果は、研究者本人が志半ばで事故死した事と、難易度の高さ、そして経過年月の関係で現在は散逸、或いは変形し、当時の形のまま残っているものはほぼ零と言っていい」

「へえ、でもよく知ってたねそんな古い技術」

「ああ、一応開発当時に現場に居たからな」

「ふーん……で、あんたいくつだっけ？」

「24」

「この期に及んでまだ言うか」

数千年ほど前の技術の開発当時に生きてたってさっき言ったばかりじゃん！

「ちなみにセシェン君は幾つ？」

「あれか？ 確かまだ227歳ぐらいだったと思うがな」

「あんたとどっちが年下？」

「セシェンだな」

「……じゃあ、あんたは何歳？」

「永遠の24歳だ」

「はいはい、何かもうどうでも良いですよ」

「何だ、若さの秘訣でも聞いてくるかと思ったんだがな」

「別に興味無いから良い」

こちらとれたてピチピチカニ料理……ならぬ現役学生だし。

普通に年とって、将来は「今時の若いもんは」とか愚痴りながら茶すするのが昔からの夢だし。

「変わった将来の夢だな」

「うっさい」

「まあ、悪くない夢だな」

パチンと指を鳴らすデュラン。

オレの前にテーブルに乗ったホットミルクが現れる。

「少し飲んでおけ。長い話になりそうだからな」

「どうも」

舌火傷するとカッコ悪いので、表面をよく吹き冷ましてスプーンで掬って少しずつ飲む。

猫舌の悲しさって奴だ。

「まあ、魔術自体はベーシックなものだ。構成はシンプルだがそれ故に理解していないものには使いづらい。その為にその発展形として作られた簡易版が今の魔法になるわけだ」

「はあ」

「自動販売機を使った事はあるだろう」

「当たり前」

「コインを入れてボタンを押せば、欲しい飲料が手に入る。この手

順が通常魔法の法則とされているものだ」

「ふむ」

「しかし、実際は自動販売機内部へ飲料を補てんしたり……まあ、ボタンを押すことによる稼働、そう言った物を経て飲料が購入者の手元へ届いている訳だ。この背景での動きが魔術になる」

「あー、うん何となく分かった」

ボタンを押す、出る。これが魔法。

そのボタンを押すと出る背景には色々な仕組みがあつて、その仕組みとか機械とか材料とかをつくる過程から始まるのが魔術と言う事か。

なるほど、すっげー不便そうだ。

どうりで廃れる訳だよ。めんどいもん。

「汎用性は魔術の方が広いがな」

「ふーん……で、魔術を使うのはあんたの懐古趣味だって言いたい訳？ それとも汎用性？」

「懐古趣味、か。まあ否定はできんな」

「でもそれだけじゃないんでしょ」

苦笑したデュランにオレは続けて言葉を重ねる。

言っていいのか分らない。

けど、ここを逃せば言えなくなりそうだ。

だから踏み込む。

「デュラン、あんた魔法、使えないんじゃないの？」

前哨戦とオレ（後書き）

【作者後記】

ネット環境の復旧で真っ白に燃え尽きました。

こんばんは、自分で言っておきながら昨日中に間に合わなかった作者です。

接続は切れ、メールサーバーは動かず、小説を書くころからはログイン記録が消え、おまけにパスワードが思い出せず、ついでお腹を下し、足を通勤途中にやられてまともにあるけません。

泣きたいです……折角のGWに向けて仕事片付けたのに……。

愚痴ばかりになりましたが、ナカバがポイントの一つに切りこんできました。

次から徐々に狭めていきます。そのはずです。

遅ればせながらお気に入り登録ありがとうございます。

ご訪問の皆様へ感謝を。

皆さんの身に災難が降りかかりませんように。

作者拝

追及とオレ

「使えるぞ。そもそも、魔術が使える者にとって、魔法など容易い事だ」

予想通り、デュランは即座にそう返してきた。
だからこっちも同じ手を返す。

「実際に使ってたしね、二日目に」
「……」

森を切り開いてた軍師ビーム。

四方八方にずらずら連ねてた魔法陣。

あれらは多分魔法だ。

「変だなーと、あの時思ったんだよね。何でこいつこんな必死なんだってさ」

魔王は魔界で最も強い魔力を持つ者への称号。

ぱつと聞いた感じゴツキーより紫変人オーラのデュランの方が強そうなイメージだと言っのに、声を上げてまでセシエン君を呼び出してたデュラン。

ゴツキーに触りたくないって事かなーとも思ったが、それならセシエン君があの場合で青ざめる理由が微妙だ。

主人がお怒りの時に一緒に慌てるほどセシエン君の執事レベルは低いとは思えんし。

じゃあ、何で？

「デュランの方が弱いから主人がピンチだと思った。これなら理屈

は通るんだけどさ……そうするとまた三日目とかの状況と食い違っちゃうんだよね」

『如何にヴィスカス卿が優れてらっしゃるとしても、陛下の足元にも及びません』

セシェン君が心外そうに言った言葉。

これを信じるなら実力はデュランの方が上じゃないと可笑しい。実際デュランは何度かヴィスカスを撃退してるし、今回は手加減したとか言いつつ体内の重要器官を引っかくような芸当をしている。そもそも、前魔王の城に一人で乗り込んで殲滅しやがったこいつが、あんまり弱いとは思えない。

じゃあ、何で？

「そうすると今までと何が違ったかって考えると、あんたが指パツチンの魔術じゃなくて魔法を使ってたって所にポイントがあるんじゃないか……と、思ったんだよね。実際あの後妙にあんただるそうだったし、セシェン君はアンタ甘やかすし……ってこれはいつもの事か」

「ふむ」

オレの話を妙に楽しそうに聞いていたデュランは、ここで足を組み変えて背もたれに肘を預けるような格好に座り直す。

おい、またムダ色気が駄々漏れってるぞ。その服ちゃんと着ろよ。

「……今聞いた話では根拠として弱いな」

ですよー。

「じゃあ、これはどう？」

マグカップをテーブルに戻し、オレは少しだけ体を前に傾ける。

「黒い……リング、だっけ？ とにかくあんたが身に着けてるそれ。何でそんなの大量に着けてるのかって事」

「趣味だ」

「あとは、破裂しないように」

オレの言葉に奴とオレの視線が一致する。

「崩壊、だっけ？ あんたの台詞だとさ」

黒い輪っか。リング。

高位魔族、つまり魔力たっぷりもってまっせーなセシエン君でも、劣化版で瀕死に追い込めるくらい大量の魔力を吸い取る効果があるそれを、デュランは全身にじゃらじゃらつけまくってる。

最初見た時はそのファッションセンスにどん退きしたね。

全身ピアス男みたいじゃん。

耳とか指とか腕とか首回りとか、服が白だから引き立て合っちゃって絶妙な不協和音奏でっぱなしな感じ。

でも、これは魔力を抜き取る装備だ。魔族にとってはHP削る物。それをこんだけ身に着けてるってのはDMとしか思えない。

けど、幾つかの話をかけ合わせるとどうなるだろう。

例えば、クコとやらを食べて魔力を回復し、モロの君になったセシエン君。

『幼体では内包する魔力に体が耐えられない。よって無意識に体を成長させたのだろう』

『体と力のバランスを取る為に本来の姿に近づいたと言う事だ』

『力に見合った体でなければ崩壊するからな』

例えば、魔王の称号。

これは初日に聞いた。

魔王とは、魔界の中で最も強い魔力を持った者への称号。

例えば、紫の美形背景効果。

二日目のヴィスカス来訪時にセシェン君が教えてくれた。あれは、デュランの魔力だって。

デュランは魔界で最も強い魔力の持ち主。

それだけリングを大量に身に着けていても、外に溢れ出して見えてしまうほどに。

つまるところ、

「あんたの体、あんたの持つてる魔力の量に見合って無いんじゃないの？」

デュランは魔力と体の関係を空気と風船にたとえた。

空気を風船の中に入れば膨張する。

膨張のいきつく先は破裂だ。

ねえ、デュラン。

アンタの体は、そんな自虐プレイみたいなことまでして、そこまでするって抑え込もうとしても足りないぐらいのギリギリ——破裂寸前じゃないの？

オレの問いにデュランは微笑ってるだけで答えない。

だから、オレは言葉を重ねる。

こいつ相手にカードを出し惜しみする余裕はこっちには無いんだ

から。

「そう考えると全部引つかかった事の辻褄が合うんだよ。魔法が使えない——能力面では可能でも、その反動に体が耐えられない」

「魔法より、多分魔術の方が省エネモードなんじゃないかな……だから普段は魔術を使ってる。同じ理由で普通の魔法をなるべく使いたくないから機械に頼る」

「二日目のあの時にもセシェン君が顔色変えてた理由にもなるよね。あの時のあんたは本来使うのなるべく避けるべき魔法を使ってヴイスカスに対抗してたから」

「普段はそこをセシェン君がサポートする事であんたの負担を軽くしてたけど、あの時はセシェン君は居なかった。だから一人で魔法を使い続ける状況になって……相当な負荷を受けてた」

「あんたの背景効果があのにスーパー。イヤ人になってたのも、魔法を使ってたせい」

「だから、それを知ってるセシェン君はやバイと思って顔色を変えた。あんたが怒ってたせいじゃない。主人に身の危険が迫ってたから青ざめたんじゃない？」

「結果としてあんたはヴイスカスは撃退したけど、ダメージは大きかった。だるそうにしてたしね」

「三日目に限ってセシェン君が暴走したのもそのせい、違う？」

一気にオープンにしたカードに、デュランは一度眼を閉じてやけ

にリラックスした様子で天井を仰いだ。

何かワイン片手、膝には白いシヤム猫でも置いてそんな雰囲気だった。

後は葉巻があれば完璧かな。

その状態で第九にでも耳を傾けてればあんな感じになるんだろうけど。

……何故その反応になるんですくあ。

「お前はなかなか面白い」

ややあつて、デュランはそんな事を言った。

いや、別にオレは面白さに人生かけてる芸人でも何でもないんですが……普通の学生だし。

「まあ、一部訂正があるがそれは後回しにするとして……三日目のセシエンの暴走、か」

「うん」

「話は面白いがそこが弱いな」

うーん、やっぱりそうきますか。ここで退いてくれれば本題に入れるのに。

「退かないぞ」

笑うデュラン。

「久々に愉快だ。ああ、それと……お前から始めたとは言え分かっているな？」

「何をさ」

投げやりに返したオレに、デュランはにっこりと、花が綻ぶような笑みを浮かべた。

「これがテストだと言っ事だ」

上等だコノヤロウ。

追及とオレ（後書き）

【作者後記】

ご来訪ありがとうございます。作者です。
なんか「その考えたところが矛盾するぞ」とか色々突っ込まれそう
な回になりましたがまだ続きます。

検証とオレ

「三日目は……要は余談みたいなもんでしょ。何で突っ込むかなあ……」

ぼやいたオレにデュランは「お前が話を振ったからだ」とあっさり返す。

はい、そうでした。

言わなきゃ良かったなあ……しょうがない。

「まあ、じゃあ折角だから先に言っときます。デュラン、オレに何か言う事ある？」

「さっき謝っただろう」

「反省の色ねえし!!」

「贅沢な奴だ……」

ぶつぶつ言いながら、デュランは姿勢をだらけた状態から直し、両手を膝の上に揃えて頭を下げる。

「俺の計算違いゆえに危険な目に合わせてすまなかった。……これで良いか？」

「最後のが余計だけどまあ良いや」

「普通はせんぞ……一応魔王だからな」

まあ、あんまり王様がぺこぺこ頭下げちゃまずいのは分かるけどさ。

あんたのそれは殆ど地だろ。地。

「じゃあ、やっぱ三日目に会っちゃったのは事故だったわけね」

「どっちのだ？」

「朝のに決まってるじゃん」

この期に及んで試してくるデュランに、オレはうんざりしながら答える。

「あの日はその一回しか顔は合わせて無いんだからさ」

「ご名答」

「うっさい黙れ」

朝の一回だけ。

隠し通路とやらから出てきたデュランとオレが出会ったあの「事故」だけだ。

それが無ければ一日中、それこそ四日目と今日の今までと同じようにデュランはオレに会う事は無かっただろう。

会えるような状態じゃなかったろうし。

「で、三日目をお前は どう読んでいる」

「読むってほど大層な事じゃないけど、出来ればあんたはあの日は表に出たくなかったんだとは思ってるよ」

「根拠は？」

「セシエン君が輪っかを預かってたから」

あれはオレがデュランに直接頼んだものだ。

しかもデュランの手作り。

わざわざ間にセシエン君を仲介して渡さなくても良いはずなのに、何故か事前に預かってたのはセシエン君だった。

そんな事しないで先にデュランから俺に渡してれば、オレは齧られかけずに済んだのに。

セシエン君にとっても劇薬になるあれを、わざわざ彼に預けた理

由。

それは直接会つのを避ける為と考えればすんなり話は通る。

「そうだなあ……うん、多分二日目夜にはあんたは相当体調悪化してたんじゃないの？ 少なくともうつかり朝オレと出くわすぐらいには注意力散漫になってた。頭がぼーっとしてたんだか、そこまでは分からんけど」

「それで？」

「だから、護身用にキューブ以外の手段としてリングを作った。念の為だっただろうけど」

でも渡す段になって問題が起こった。

「デュランからオレに直に会つのは避けたかった。何でかつーのは朝にオレがセシェン君に襲われた時みたいな事態が起こる可能性があったからなんだろうけどさ」

「オーバーフローによる、魔力の他者付与だ」

「えーっと？」

「要は、余剰分の力が傍にあるものに付着する事だ」

「ああ、はいはい」

そう、結局朝出会ってしまった時点でオレはデュラン菌に感染……
…もとい、デュランの力が付与されてしまっていたのだ。

けどそれを除去する為のリングはセシェン君にあの時点で預け済みだ。

じゃなきゃあその後食堂でセシェン君から渡される事なんてできない。あの後、食堂に行くまでデュランはずっとオレと一緒に居たのだから。

ずっと、一緒に。

「護衛だったんだなー、と」

食堂にこそ一人で行けみたいな反応をしてたけど、あそこでオレが適当に流したら別の理由をつけてくつついて来たに違いない。

いくら目の前のごちそうが落ちてても、デュランが一緒なら最悪オレが襲われる事は避けられる。

デュランの方が多分魔族にとっては「美味しそう」に見えるんだろうし、デュラン自身は飴と鞭の鞭——セシエン君の言うところの存在感なり威圧感でそうそう襲える相手じゃない。

「館に侵入できる奴が居る状況で、オレを放置できなかったってとこかね。多分」

「ふむ……」

「何さ」

「いや、案外その侵入者の点をあっさりとクリアしたな……と少々感心していた」

「あー……うん、まあ実際見ちゃったしね。ゴツキー」

もう皆さんすっかり忘れているだろうが、この館結構セキュリティは高いのだ。

中に入れる条件は二つ。

キューブを持つてるか、デュランから「ケツジュ」なる物を入手してるかどっちか。

キューブはぶっ壊れた時にデュランが自分のを「予備が無いから」と投げてよこした事から多分希少品だし、メールのやり取り先に「私かセシエンだな」と言ってた頃からして存在するのは三つ。

つまり、オレ、デュラン、セシエン君。

ま、もしかしたらプチちゃんも持つてるかもだけど、ヴィスカスに渡してるとは思えない。

そうすると、ヴィスカスが持つてるのは消去法で「ケツジユ」とやらになる。

この「ケツジユ」が何かと言うと、その辺はもう大体見当がついてる。

「ケツジユ、つてさ。あんたの血の関係？」

「そのものだな」

デュランがあっさり肯定する。

「血珠……まあ、俺の血液の凝固形状のものだな。プチの内部にも入っているし、これを持っていれば俺自身としてこの屋敷の結界からは認識される」

「だから、『血をやったら懷かれた』ヴィスカスはあんたと認識されて中に入れるようになる訳か」

「そう言う事だ」

三日目のプチちゃんの襲撃もそのせいだろう。

最初の一撃で「うっかり」ヴィスカスを踏み潰した彼女。

うっかり。

うっかり、人違い。

デュランの血を前日に貰ったばかりだった奴を、プチちゃんはデュランと間違えて飛び蹴りかましたのだろう。

あの後デュランにも同じ事やって、フライパンではたき落とされてたし。

セシェン君の反応から見るに、あれ、多分親子のコミュニケーションの一環なんだろう。ごく「当たり前」の。

だから彼女はあの時オレの問いに「うっかり」と答えたのだ。

「うっかり」、パパと思って攻撃しちゃった。

「ヴィスカスには前日にオレ見つかったちゃって、目え付けられてたつばいし。その状況でオレを放置出来なかった。だからアンタは食堂……輪っかを持つてるセシエン君とオレが合流するまでは一緒に居た」

「ふむ。その後は？」

「後？ 会って無いじゃん」

直接は。

コレクシオン部屋に来てたのはスニツ。で映し出されたホログラム。

その後移動後に見たデュランの姿は本人じゃなくて、これまたどうか別の場所に居るデュランの映像だった。

あの時点でオレ達は三つに分けられてたのだ。

オレとセシエン君。

ヴィスカス。

プチちゃんとデュランに。

「最初はさ、ヴィスカスだけ別部屋かと思ったんだよね。でもプチちゃんがあんたにアタックしかけた時にこっちには衝撃どころか風すら来なかったし、あんたも別の部屋に居るって言ってたし」

「言ったか？」

「後でプチちゃんだけ『そっちに向かわせる』……って」

「ああ……成程」

あの後同時に消えたデュランとプチちゃん。

何の事は無い。それこそ見えるようにしていた別室VTRをオフにしただけの話だったのだ。

オレに会えばまたデュラン菌がくつついちゃうし、セシエン君やヴィスカスは魔族だから当然ナシ。

プチちゃんは……まあ、やってきてもあの子なら自力で撃退するだろう。

マジであの力加減シヤレならんし。
軽くトラウマになってるんですけど。
マジで怖えよあの美少女。

「まあ、二日目の影響であんたにはセッション君達魔族に会える状態でもなかったし……出来ればオレにも会いたくなかった。けど、誤算があつてあの一連の騒ぎが起こってしまった。いわゆるイレギュラーの連続。三日目の事はそんな感じって事で良いんじゃない？」
「ふむ、まあ及第点だな」

及第点レベルなのか。

「魔王」

「何だ」

「しぶといね」

「魔王だからな」

はあ、さようですか。

オレは何か妙に疲れた気分になりながら、だいぶ温くなったホットミルクをずーっとすすった。

検証とオレ（後書き）

【作者後記】

お気に入り登録して下さった方ありがとうございます。

そしてご来訪下さって、こんな所まで読んじやってるその貴方にも感謝を。

こんばんは、作者です。

次辺りでそろそろ本題に入りたいです。

いつまで引っ張ってるんだろう……はい、そろそろ「本当にナカバが知りたいポイント」に入ります。

上手く陛下がそれをはぐらかさずに相手してくれると良いんですけど……。

作者拝

疑問とオレ

「冷えて来たな」

喋り続けだったオレが一度口を閉じたせいで降りた沈黙を破るように、デュランがぼつりと呟いた。

そりゃそーだ。今真夜中だし。

「知っているか」

「何を」

「成長ホルモンは睡眠後約二時間ほどしてから分泌されるそうだし」

「……」

「まあ、今のお前には関係ないがな」

寝たい。

今すぐ布団に帰りたい。

が、肝心な質問をまだしてない。ここで逃がしたら多分こいつの尻尾を踏んづけるチャンスはもう来ない。

今こうやって付き合ってるのも殆どこいつの気粉れだろうし。

気粉れは、まぐれなのだ。

まぐれは次が無いと言う事だ。

「で」

そんなオレの内心を見透かすように、デュランが紫色の目を細めてやんわりと笑む。

「何か言いたい事はあるか」

何度目かの問い。

その後ろに「これで聞くのは最後だぞ」という幻聴が聞こえた気がした。

仏の顔は三度まで。魔王の我慢は何度までなんでしょうかね。

まあ、外堀は大方埋まった。

突貫工事だったけど、そろそろ攻め込んで良いだろう。

オレは一気に核心に切り込む。

「オレを召喚した理由は何？」

「最初に話しただろう。暇潰しだ」

「誰の？」

言って、オレは首を振って言いなおす。

「そんだけのリスクを負って、オレを召喚する理由って何？」

リスク——魔法。

「召喚した方法は魔術じゃなくて……魔法でしょ」

初日にセシエン君とオレは赤の他人同士だった。

だから、あの時点でセシエン君がオレの都合を慮ってオレを元の世界に返す必要なんて無い。

彼はあくまであの時点では、主の為に反対していたのだ。常識的な反応？

そう、常識的な反応だ。

オレにとっての常識では無くて、セシエン君にとっての常識——
主人を守る事。

だからこそ、目の前に居たオレに気付けないほど焦って、駆けつけてきた。

デュランがそれだけの無茶を、身の安全を脅かす規模の魔法を、つまり異世界召喚を行使したから。

「これってさあ、言ってみれば暇潰しに自分の命を賭けてるみたいなもんでしょ」

「いけないか？」

「や、生きざま的には割と好きだけどね、そういう馬鹿っぽい感じでも、あんたはそんな事出来るはずがない」

「はずがない……か。また大きく出たな」

デュランが更に目を細め、唇を三日月の形に歪める。

ぞつとするほどに妖艶な微笑み。

悪魔的なほどに艶麗な眼差し。

美形嫌いとか関係なしに、オレは背骨に液体窒素を流し込まれたかのような気分に陥る。

舌が急に干からびた感じ。

喉が締めつけられたようで、呼吸が上手くできずにオレは喘ぐ。

「……飲め。落ちつく」

「う、うん……」

言われるままになるのは癪だったが、とにかくオレは手を伸ばして残りの温い牛乳を一気に煽った。

……はい、そりやもう派手に噎せましたとも。

「計算通り」

「てめっ……このやろっ、お前がキラか！」

「私が魔王^{かみ}だ。まあ、あの状態で飲めば確実にそうなるだろうとは思っていたが……そこでさらに一気に煽るとは勇者だな。よし、勇者の称号をやるう」

「いるかあっ！！」

こっちの勇者なんざ実体ない名前ばかりの存在だって話じゃなかったっけか？　んな自宅警備員みたいな自由称号要らんわ！

げっほげほ……あゝ……。

はあ、でもまあ調子は戻った。

「それで？」

「え？　何の話だっけ？」

「出来るはずが無い」

同じ言葉をさっき自分が言ったばかりだっつーのに、デュランの口から出ると途端に不吉な響きになるから不思議だ。

やっぱり些細なセリフにも邪悪さとか腹の黒さとか心根の恐ろしさというのが滲みでるのだろう。

間違ってもこんな大人になってはいけない。

デュランは「良い」見本だった。

「いや、伸びるはずが無い、だったかな？」

「言って無いし……！」

この野郎。

愉快そうに顔を背けてクツクツと肩を揺らしているデュランを睨みつけつつ、オレは話を続ける。

多少ぶっきらぼうになるのは仕方ないだろう。

「あんたは何か目的あつて魔王なんて面倒な事引き受けてんでしょ」

生憎とか言いつつ、未だに魔王。

自ら乗り込んでつて、前の魔王を配下もろとも虐殺して王位を篡奪したデュラン。

退位も陛下なら可能でしょうとセシエン君は言っていた。

同時に、デュランには何か考えがあつて退位するつもりは無いらしいとも言っていた。

『色々と必要でな』

色々と。

自分の主義とか、他の魔族の命とかを犠牲にしても魔王という立場、手段が必要だから。

「ま、魔王の仕事は相当さぼつてゐただけだね……」

嫌みを混ぜてみたが、デュランはどこ吹く風だった。

チツ、無駄に太い神経してんな。

「とにかく、やる事残つてゐるのにセシエン君がすつ飛んでくるような……それだけ負担のデカイ魔法をわざわざ使つて、当たり前外れどつちか蓋開けてみるまで分からんような相手を呼びよせる。そんな危ない橋を好んで渡るほど、あんた自暴自棄タイプじゃあ無いと思うんだよね」

言いながらオレは内心結論のお粗末さにがっくりくる。
思つてなんだ、思つて。

結局今までの話も推論と感想だけで出来てるのがまるっとお見通しだよ。

「……うん、まあそんなとこ。だからさ、理由が暇つぶしだったんなら……あんた自身の為の暇潰しじゃないんじゃないかって」

微妙に言葉が弱くなったのは大目に見て欲しい。

最後はフリーリング頼り。

うん、我ながら微妙だ。

オレの言葉が終わってから、デュランは暫く黙っていた。
オレはやる事がないんで、取り合えず空っぽになったカップを観察する。

ややあつて聞こえたのは小さな溜息とやる気の無い拍手の音だった。

「へ？」

「充分だ。さて……やる事が出来たな」

「は？」

「お前もそろそろ戻って休め。出発まで少し眠った方が良い……お前ではあの獣道はきついだろうしな」

「え？ いやちよつと待って、何？ え？ オレ何か聞き逃した？」

「お前の質問には後七時間後に答えてやる」

何処までも上から目線な台詞をほざきつつ、デュランはパチンと指を鳴らしてテーブルとカップを目の前から消す。

「それまで睡眠をとっておけ。それと、山道を歩いても構わないよ。うな服装を探しておけ……まあ普段の恰好でも問題なさそうだがな」

「いや、話がさっぱり分からないんだけど」

さっきまでのオレの努力とか緊張はどうなっちゃったわけ？
おい答えるマイペース。

「さっき言っただろう。今は寝ておけ。後で会わせてやる」

「だから何の話か、って」

「暇を潰させてやりたい相手だ。お前を連れてゆくかは正直迷っていたがな……まあ、面と向かってオレに噛みついてくる程度の気概はあるようだし、そう馬鹿でも無いようだ。まあ、せいぜい乳歯が生えて無い子タダヌキ程度の噛みつき具合ではあったがな」

「お前こそ古ダヌキのくせして」

「まあ、とにかく数時間後にはお前を連れて外出するから今のうちに寝ておけと言っただ」

「はあっ！？ 何その勝手な決定！」

「良いぞ、別に起きていたいならば止めん。眠気と疲労で意識を失っても知らんがな」

その時は、背負って運んでやろうか？

クスと笑われて、オレは無言で手に持っていたヴィスカスから引っこ抜かれたベビーベ。もどきを投げつける。

それを当然のようにキャッチして、理不尽魔王は優雅に微笑む。

「で、最後に何か質問は？」

「インスタントコーヒー飲んだ事ある？」

「いや、無いな……ナカバ、代わりに買っておいてくれ」

ふざけんな。

疑問とオレ（後書き）

【作者後記】

肩透かしですみません。やっぱり逃げられました。後でと言ってるのでちゃんと後で回答出ますけど……残念な感じですね。

こんばんは。ようこそいらっしやいました。いつもお世話になっております。作者です。

お気に入り登録ありがとうございます。

最初0だったのが71……少々感慨深いものがあります。

1件増えることにビクビクしているのは相変わらずですが、最近は当初に比べて素直に感謝出来るようになった気がします。

登録してないけど読んでる、という皆様にも深い敬意と謝意を。ありがとうございます。

異世界五日目（から六日目未明）から次は六日目朝へ移ります。残り僅かな異世界探訪ですが、宜しければお付き合ってください。もう一つほど仕掛けは残してあるので、宜しければその辺予想なさってみるのも面白いかと……お、面白いと良いな？

（そっちはちゃんとはつきり結論出しますので）

作者拝

匿名希望とオレ

「おはようございます、ナカバ様」

「おはよーセシェン君」

「おはようナカバ」

「死ねデュラン」

「セシェン。ナカバが冷たい……今でも小さいと言うのに反抗期だろっか」

「ちっさい言うな！」

「わたくしには人間の反抗期など分かりかねますが……」

「いや、そういう問題じゃないから」

朝。

あれから部屋に転送されて、取り合えず不貞寝……じゃなくて寝て、朝。

食堂にはセシェン君の他になんか余計な+αが偉そうに足を組んで居座っていた。

まるでこの主人は自分だ、的なくつろぎっぷり——あ、主人だっけ。忘れてた。

まあ、そんなんで久々のデュラン脱ヒッキーの図である。

相変わらず自分の家から一步も外に出てないけど。

「昨晚は良くお休みになりましたか？」

オレンジを半分に切ってぎゅっと絞った奴、本物のフレッシュジュースをオレに渡してくれながらセシェン君が爽やかな笑顔で気遣いの言葉をかけてくれる。

「や、全然」

「然様でございますか……何か、不便などございましたでしょうか？」

「いや、ベッドメイキングは完璧だったから気にしないで。セシェン君のせいじゃなくてどっかの我がまま五歳児に振り回された揚句、腹立って微妙に寝付けなかったただだから」

「ほう、お前のその図太い神経をそこまで侵害出来るとは私もまだ魔王としてやっていけそうだな」

「滅びろ」

古い様式に則って印を結んだオレに、デュランが小さく声をあげて笑う。

何だよ。何がおかしいんだよ。

「ふう……面白かった」

「……。どいてセシェン君、アイツ殺せない」

「いえ、ナカバ様……さすがにこればかりは……」

「さて、ナカバ。行くぞ」

「嫌だ。遠慮します。まっぴらごめん。絶対に行かない」

「セシェン。ナカバをつれて向こうで一泊してくる」

「勝手に決めんな!」

「帰りはそうだな……明日夕刻になるだろうから、夕食以外の用意は不要だ」

相変わらずオレの意志は無視ですか。そーですか。

「あの方の所、ですか」

デュランに例によって手間暇かけてる珈琲を渡しながらセシェン君がやや困惑したように尋ね返す。

「ああ、彼の所だ。【門】は既に整えてある」

「然様でございますか。あの方もさぞかしお喜びになれるかと」

「あのさあ……何でさっきからそんな指示語が連発されてんの？

あの方って誰さ？」

どうせこれはもう逆らっても無駄だなーと諦めの境地に達しつつ、ぐさぐさとハムに八つ当たりしていたオレにセシェン君が小さく苦笑する。

「あの方は、みだりに名前を口する事が許されないお方なのですよ」

苦笑しつつフォローしてくれるセシェン君。

ふむ、言われてみれば傲岸不遜天上天下唯我独尊自信過剰自己主張要自重一応魔王のデュランも名伏せしてるし……相当偉い人なのか？ 神様とか？

「そうして無駄に文字を連ねるのは見苦しいぞ」

デュランが苦笑いしつつ、言葉を継ぐ。

「私の友人だ。昨日……いや、今朝方お前が聞いてきたあの質問の答え、だ」

「友人……あんだ、友達居たんだ」

「一方的に友人に認定した」

「寂しい奴。で、誰？ ドラゴン？ キメラ？ スライム……いや、そもそも生きてる？」

ぺ。ちゃん人形とサ。ウくんだったら退くぞ。

そんなのに「君は僕の友達だよ」とか話しかけてる寂しい奴と

関わり合いになりたくない。

そんなオレに、デュランは一瞬目を細め、

「人間だ」

元、だがなと付け加えて珈琲を一口飲む。

え？ つまりあれですか？ 俺は人間をやめるぞデュラン！！
とかつて仮面を、

「違う」

「そっか、残念。じゃあ行かない」

「向こうは和食文化なのだが」

「行きます」

一昨日うつかり「和食が食べたい」とか言っちゃった後、その時の夕食は微和風だった（味噌汁だけ惜しい感じだった……ウチは赤味噌派なのだ）けど、はつきり言おう。あんなの和食じゃねえ。

ご飯食べたい。ご飯。

パエリアじゃなくて炊き立ての白米が食べたいんです！

お粥じゃなくて炊き立ての白米が食べたいんです！

ピクルスじゃなくてキュウリの浅漬けが食べたいんです！

「……」

あ、何かデュランが肩を震わせて笑っている。

「駄々もれだな、食欲が」

「……悪かったなあ」

美味しい食事が出来なくなったら、人生の楽しみの八割は消える。

これ持論。

「まあ、お前からの異論も無くなったようだな。と言う事で、これを手土産に見舞いに行つて来る。留守中頼むぞ、セシェン」
「畏まりました」

セシェン君が恭しく、誇りを持って頭を下げる。
ふむ。

デュランから「頼むぞ」なんて言う事あるんだねえ。

匿名希望とオレ（後書き）

【作者後記】

食い意地張ってる主人公。

可愛いと思うか意地汚いと思うか単純と思うかは人それぞれだと思います。

新たにお気に入り登録下さったそのあなた、ありがとうございます。

ちょっと短いでしょうか……いや、前が長かったのかな。

次の次辺りで魔界から一度離脱します。

宜しく願います。

作者拝

二時間ドラマとオレ（前書き）

ちよつと短め

二時間ドラマとオレ

つくづく、この館の中はブラックボックスだ。

明らかにそこ道じゃねえし、というような場所を「隠し通路だ」の一言で連れ回されてぐるぐる歩き回り、

「えーっと」

気付けばそこは不思議の国でした。

「ここ、さっきまで室内だったよね」

「そうだな」

「なのに今、何故崖っぷちにいるんでせうか……」

二時間ドラマのクライマックスに出て来そうな、波ザッパーンな崖の上に俺とデュランは居た。

まあ、足元が何か奥の方で青白い光がちらちらしてる黒いタイルで、打ち寄せてくる波が紫色な時点で明らかにドラマじゃねえ、つてな感じなんだけどさ。

崖っぷちには何か床からにゅーっと白と黒の馬鹿でっかい角みたいなのが一本ずつ生えてる。

おまけに何か空中にはでっかい紫のシャボン玉というか……真珠・紫ばーじょんみたいなのがぶかぶか浮いてるし。

何だろう、このぶかぶか。

「触るなよ」

オレの方を見もしないでデュランが言う。

「血管の中身を沸騰させられたくないのならばな」
「げえっ」

そんなグロい死に方は嫌だ。やめておこう。
てか、そんな危ないもんがごろごろしてる所に連れてくんよ。

「あれらは一種の増幅、安定用の媒体だからな。俺の後ろに居れば安全だ、そこで大人しくしている」

「そしたら前みえないじゃん」

「縮むのはまた今度な」

「えー」

「死にたいか？」

「……」

あんたがそう言うセリフを言うと洒落に聞こえないんだってば。
オレはブチブチ言いながらデュランの陰に入り、さっきから空間に手をかざしているデュランの手元を覗き込む。

「何やってんの？ それ何？ 何かの記号？ 文字？」

「沈黙文字だ」

「文字は喋らないけど？」

「そうだな」

キータイピングって奴にちょっと似てる。

そんな動きをデュランの指がするたびに例の二本の角もどきの間の空間が上から順番にシャッターが下りてくるみたいに発光する文字で埋め尽くされてゆく。これ、二日目に見た奴だ。

「魔法使って良いの？」

「必要だからな……さて、開くぞ」

デュランが手を引くと同時に、輝く文字で埋め尽くされた空間の間に線が縦に一本入った。

そう思った瞬間、パリンと何かが割れる音がして突風がそこから吹き出した。

「っ！」

突風なんてレベルじゃない。

台風の実況中継——傘がおちよこになっちゃう奴。

ぎゃー、飛ばされるー！！

「落ちつけ」

「落ちつけるかつ！」

「その風は幻だ」

「幻っ?!」

これが？

「足の裏に意識を集中しろ。靴底の感覚が分かるか？」

「靴底の感覚とか言われても……」

「足の指を動かしてみろ。中敷きの感触をまず確認しろ。そうだ……」

…その調子だ。

強風が吹いていればそんな風に呼吸が出来るはずもない。出来る
と言う事はこの風は幻だ。

目を閉じて、自分の体の輪郭を意識しろ」

命令口調なのがプチむかついたが、まあこう言うのは一種の暗示とか落ちつかせるテクニクだと言うのは分かるので、一先ず言われたとおりに目を閉じて意識を集中する。

つつても、体の輪郭何か意識した経験ないんだけどな……。
とにかく集中。集中。集中。

頭の中でそう繰り返していると、唐突に、風が、止んだ。

「……上出来だ」

「あんたに褒められてもね……」

「思ったよりも早く立ち直ったな。さて、目を開いてみる」

「何で最後まで命令口調……」

「お願いされたいか？」

訊かれて、頭の中でお願いするデュランをシュミレートしてみた
無理だ。

句読点の入る余裕すらなく即座に脳が拒否した。

「やつばいい。キモイ」

「まあ良いから見てみる。この光景はなかなか見られるものではないぞ」

「む……」

良いなりになるのは癪だけど、折角の「なかなか見られない光景」
とやらを意地張って見逃すのもアレだな。

オレは言われた通り渋々目を開け——息を、呑んだ。

二時間ドラマとオレ（後書き）

【作者後記】
移動します。

絶景とオレ（前書き）

GW最終日なので、続けてもう一本投下
貧乏性とも言つ。

絶景とオレ

残念ながらオレはあんまり感動すると言う事が無い。

はあ、へー、ふーん、ほー、と八行活用みたいな言葉が出るだけ。ああそうなんですかすごいですねー、で大抵の事が終わる。

この前やってた世界の感動できる絶景ベスト100みたいなもの途中で飽きたしなあ。いや、百も出すからさあ……せめて二十ぐらいに絞ってくればまだ良かったんだけど。

涙もろいのに情緒に欠ける、とは友人の評だ。まあ、お陰で魔界なんぞに強制召喚されても正気保ってられてるんだろうけどさ。普通に情緒欠陥がこんな風に役立つなんて考えてる奴が居たら、そいつはどっか可笑しいだろ。オレも出来ればこんな役立ち方するとは知りたくなかったし。

閑話休題。

とにかく、そんな「はあ、多分何か凄いんですね」みたいな反応がナチュラルな俺からしても、今見えている景色は凄かった。

語彙が足りないのが悔しいんだけど、とにかく凄かったのだ。

雪原。

雪の色は白じゃ無くて薄いブルーだったのが良く分かるような、何だろう、縁の部分がうつすら青に染まった雪原が広がっていた。周りは空に向かってそびえ立つワニの背びれみたいな山脈でぐるっと囲まれていて、その上の空は群青というか雲の陰り一つない澄んだ濃いブルーだった。

いや、これじゃ何が凄いんだかさっぱり通じないだろうけど……綺麗過ぎて、息が止まりそうなほどの衝撃と言う奴を俺はこの時初めて知ったのだった。

「ここ、北の大門……?」

「そうだ。ノーストリア北端、レト山脈の更に向こう側。狂戦士達ベルセルクの守護する土地だ」

さくさくと雪を踏んで歩きだしながらデュランが言う。

「人間達は聖地、とも呼ぶようだがな」

「聖地……うん、見た目はそんな感じだよな」

雪が降ったせいだけじゃない。

空気が空気清浄機を通してマイナスイオンとか色々入ってるみたいな感じで清々しい。ピシッと張りつめてる——ま、ただの空気なだけだよ。

でも、呼吸してるだけでドロドロ血液がサラサラ血液に代わりそうなすつきり具合だった。

いや、変わらんのは分かってるよ？

「ベルセルク、って何だっけ？」

「人間だ」

雪の上に残るデュランの足跡を踏みながら後に行く。

こう言う時は先に行った奴の後を踏んで歩くのが一番楽なのだ。問題は歩幅だけだ。

……くそー、お前は妖怪足長か。

ジャンプして次の足跡のところへ辿り着くと、デュランが振り返ってこっちを見下して（だから見下すなって）、それから歩調を緩めた。

幾分歩きやすくなったけど、微妙に屈辱だった。

「人間だ、ってさあ、微妙に、説明に、なって、なくなっ？」

「人間であることに変わりはない」

一、二、一、二、と弾みをつけつつデュランの足跡を踏む。結構必死。

これもう自力で歩いたほうが楽じゃね？

「で、何で、こんな、秘境に、来てる、訳？」

「ベルセルクの長に会いに行く」

「ああ、例の、元、人間？」

「そうだ」

デュランの声は普段と同じように、何気なく淡々としていた。けど、何気なく淡々としていなかった。

出来て無かった。

多分それは顔を見ないで足元ばかり見てた（だってこれかなり難易度高いゲームだって、足跡踏み）せいで気付けただけで、あの無駄美貌を見てればごまかされた程度のごくごく微かな差だったけど、デュランは何かをごまかそうとして、ごまかし切れていなかった。

それはもしかしたら、悲しみとか、憐れみとか、そういうものだったのかもしれない。

「古い、友人、だっけ、かつ、とうっ！」

「そうだ」

一度足を止めて振り返り、デュランが苦笑する。

「もっとも知り合ったのは彼が長になる直前だな」

「へー、やっぱりデュランの方が年上？」

「今存在している者で、俺より前に生まれている者などまず居ない」

再び歩き出したデュランの声には少し笑いが混ざっていた。

「でも自称24歳でしょ」

「そうだな。永遠の24歳だ」

だから何処のアイドルだと。

「それより先に俺は成長しないからな」

「え？ 精神年齢の話ならもっと幼いんじゃないあ……」

思わずもれた本音にデュランは前を見たまま愉快そうに笑っただけだった。

だから何故そこで笑う。お前の笑いのツボがさっぱり分からん。

「で、その彼？ あの人？ 長さん？ って人……元人……っがー

！ めんどい！ 呼び名統一を要求します！」

「要求を吞もう。普通に長と呼ばば良い」

「長、ねえ……名前は？」

「彼の間人だった頃の個人としての名は消滅したからな。無い。今は称号のみだ」

「いや、待て待て」

消滅？ 何故に？ てかそもそも名前って勝手に消えたりしないだろ。勝手に着けられる事はあるけどさ。

ちなみに、オレはハンパと呼ばれていた時期がある。あんまり連呼するのでもかついておっかけて膝蹴りかましたのは今では良い思い出だ。若かったなあ、オレ。

……。

ん？ あれ？ この辺りでそろそろデュランから恒例の解説が入っても良いはずんだけど……何か知らんが未だに返事が返ってこ

ない。何でだ？ 話したく無い、のか？

「ま、良いけどさ。とにかく長って呼べばいいんだよね？」

「ああ」

「変なあだ名着けて良い？」

妙な物を見る目で見下された。それからデュランは小さく笑う。

「多分問題ないぞ」

「ふーん」

「外の人間は滅多に入れない場所だから……お前のような自由気ままなタイプは良い刺激になるだろう」

「何か微妙に老人ホームの訪問みたいな感じだね」

「似たようなものだ。人間はそう、長い時間を独りで生きる事に耐えられるように出来ていないからな」

「……なにそれ」

「独り言だ」

ふーん……。

随分声のデカイ独り言だなあと思ったけど、オレは突っ込まずに黙ってデュランの足跡を踏んで歩いて行った。

絶景とオレ（後書き）

【作者後記】

と言っ事で移動しました。

こんばんは、作者です。ご来訪ありがとうございます。

お陰様をもちまして、もうすぐでPVが1000・000行きそうです。

今96・500ぐらいだったような……ユニークは本日10・000越えました。

これだけ多くの方に一度は足を運んでいただいたと言っ事で、有難い限りです。

お気に入り登録も増えてましたね……50話目ではご挨拶してませんでした、気付いてはありました。
ご登録ありがとうございます。

異世界六日目、七日目は多分まったりペースですが、どうぞ宜しく
お願い致します。

作者拝

和風とオレ

純和風の御庭に純和風の家屋。

ししおどしがカッポーンとか言いそうなお屋敷がベルセルクの皆さんの家だった。

歩きまわる人たちも和服を着ていて、なんつーか緊張して損した感じた。

いや、何かもつとこ熊の毛皮とか鎖帷子とか着ちゃって、肌には呪いっぽい刺青いれずみがあつて、全身毛むくじやらのむくつけき筋肉だるまとかがそろそろ出て来るんだと思つてたからさ。

それが茶色の長いストレートの髪を綺麗な赤い紐とかで結えちゃった美人なおねーさんだとか、灰色の髪に藍色の作務衣が似合ったガテン系にーちゃんとか、普通に小学校低学年くらいのオコチャマ達とか……見た目レベルも並みの人も多いから、オレでも安心して中に入れると言うか。うん、まあ要は普通でした。

ちなみに、彼らの班長、もとい長さんがどんな人かと言うと。

「どうぞ召し上がられよ」

「いっただつきまーすー!!」

良い人だったー!!

ああ、焼きおにぎり。ああ、ナスのお新香。ああ、岩海苔とネギとお揚げの味噌汁（ちゃんと赤味噌）。

幸せだー!!

がつがつと箸を進める俺に長さんが静かに微笑む。

デュランより年下だけど、それでも相当年食ってるらしいという情報からてつきり白髪三千丈な爺さまが出て来るかと思いきや、長さんは二十代半ばぐらいのおじさん……じゃなくってお兄さんだった。

美形じゃないけどかつこいい感じ。

ピンクとオレンジを混ぜたみたいな……あー、あれだ、新品の銅鍋みたいな色の髪に真つ赤な目。肌の色はオレと同じ。相変わらず背は高いが、この人の場合最初に出迎えに来た時に膝を折って挨拶してくれたからその辺はOK。そしてやっぱり和服。男の人にこう言う表現では微妙と思うが、和服美人だった。粹と言うよりも渋い感じ。

おまけに良い人。

「直ぐに用意出来るのがこのような物で、誠に申し訳ない……」

「ひひへ、ふっほくおいひいれふ（いいえ、すっごくおいしいです）」

もぐもぐもぐもぐ。あー、生き返る。

やっぱり米食ばんざい。炭水化物が好きで何が悪い。

「ところで御客人」

「はひ？」

「魚は好きであろうか？」

「……」

「じっくん。

「魚によります」

「キンメの煮付けなど、いかがであろうか？」

「ごめん、物凄いい好物です。

「てゆうか、海魚獲れるんですね、ここ」

「海に接する地もある故」

声は良いのに口調はジジイ。まあ、何か雰囲気も渋い感じだし、似合ってるんだけどさ。デュランなんかよりこっちの方がオレは良いな。落ちつく。

「少し表情に生気が戻ったようだな」

無駄に色気満載のあるとの声で、和風くつろぎ空間を台無しにしてくれやがったのは、勿論某魔王様だ。

ここまで来てもやっぱりコーヒー飲んでる辺り空気読めない奴だと言うのが如実に表れている。

茶飲めよ、茶。

まさか味噌汁にも珈琲とか言うまいな？

「お前は老けこみ過ぎだ」

「そなたはいつまでも変わらぬな」

皺が寄るぞ、と自分の眉間を指すデュランに、笑ってさらりと流す長さん。

ふむ、確かに友人っぽい感じ。

デュランの表情がセシエン君をいびってる時と違う、美味く言えないけどくつろいでるっぽいような雰囲気。長さんの口調も窘めるようできて、少し柔らかい。お客さんのオレへの対応とは微妙に違う。

何か微妙に疎外感。

がしがじと焼きおにぎりについた味噌のお焦げを齧りながらちょっと拗ねてみたり。

「ナカバ、お前もこいつに何か言ってやれ」
「むみ？」

口の中に物が入ってる時に話しかけないで欲しい。

「……で、何を？」

「もう少しうまく気分転換をしろ、とな。見ろ、俺より老けて見える」

「いぶし銀で良いんじゃない？」

デュランが痛さ全開のパープー……もといパープルなら、長さんはいぶし銀。もしくは彼は色みたいな渋くて落ち着いた色だ。オレは断然そっちの色の方が紫より好きだ。

が、どうやら常識的なオレの意見はデュランのお気に召さなかったらしい。

「お前は分かってないな」

ダメ出しまでされた。なら聞くなよ。

「全く……こんな調子では先が思いやられる」

わざとらしく腕組みして溜息まで吐いてるデュランに長さんは小さく苦笑している。

何か、なあ。こう言うのはどっかで見た事がある。秘密を共有している雰囲気。

うん、すっごく居心地悪いんですけどね。良いですよ。オレは空気ですから。ご飯がおいしけりゃ良いんです。

取り合えず大人しくむしゃむしゃ食べてると、長さんが手を伸ばしてオレの頭を撫でた。

いや、オレはもうそんな事されて喜ぶ年齢じゃないんですけどー、

と思ったんだけど、オレは黙って食べながら撫でられていた。

うん、老人ホームの慰安訪問みたいなもんだとは聞いてたし、多少ご飯食ベにくいぐらいは我慢しよう。うん、これ食べられるのは長さんのお陰だしね。白米白米。

「おい、適当にしておけよ」

「む……ああ、すまぬ」

「いいえ」

ちよつと目が回っておりますが。

「まあ、久しぶりの混じりけのない人間が珍しいのは分からんでも無いが」

「人を珍獣か珍味のように言うな」

「すまぬ。彼は悪気はないが、気に入りの相手には少々口が悪くなる傾向があるのだよ……」

「いいいえ、長さんは悪くないので」

てゆうか気に入りつて……あー、すっかり忘れてたけど最初に何かそんな事言つてたつけ。

つまりあれですか。気に入ったものは苛める、と。

サドなのか、ガキなのか微妙なラインだなあ。両方かもしれないけど。

「てっ」

「何か余計な事を考えただろう」

ペチツと額で良い音がして、とっさに手を当てた瞬間デユランから声が飛んできた。

「い、今何……」

「ん？ ああ……何か失礼な気配がしたのでな。お前の額にそのナスを弾き当てておいた」

「漬物じゃん！」

食べ物で遊ぶんじゃないやねえっ！ この罰あたりっ！！

こっちが抗議していても、例によってデュランは知らん顔して箸置き、陶器製のウサギを物珍しそうに弄っている。

話聞けやコラ。

「聞いている聞いている」

「おーまーえー、喧嘩売ってんのか」

「売る訳が無いだろう。どうせ俺が勝つと分かっているからな」

「長さん、こいつにこの箸刺して良いですか？」

ついうっかり普段の調子でそう尋ねてしまったオレに、長さんは一瞬目を丸くして、それから可笑しそうに笑った。

「控えていただければありがたい」

ですよ。

和風とオレ（後書き）

【作者後記】

やつとこさ最後の登場人物の登場です。

こんばんは、お世話になっております。作者です。

ご来訪ありがとうございます。

この話は、主人公は何も解決せず、どんな問題にも当事者にならず、ただ漠然と振り回されるまま流され、核心に迫る話はいつの間にかやはぐらかされ、キャラクター間で恋愛感情が芽生える事も無いまま進み続ける……あれ？ この話何がしたいんだろう？

取り敢えず、だらだらとした心温まらない日々をつづるだけですが、宜しければ最後までお付き合いくださいませ。

作者拝

長さんとオレ

晩ご飯は長さんとオレ、ついでにデュランの三人で囲炉裏を囲んで食べる事になった。

「食事を運んできてくれた和服のおかつぱの女の子達（双子でちょー可愛かった）は普段は長さんの給仕をしているらしいんだけど、デュランが来る時は同席が許されないとかで、お膳を外の廊下まで運んで下がってしまった。

目がオレとデュランを睨んでたのは気のせいだと良いな……何でお前から来てるんだ的な視線がビシバシ飛んでいた気がするけど、気のせいだと良いな。

見ず知らずの、あんな可愛い女の子達から睨まれたとなったら、オレでもさすがにへこむ。

オレはデュランに連れてこられただけで悪くないんです……とか、そんな言い訳聞いてくれる機会なんて無いよなあ。はあ。

「放っておけ。あいつらはこいつに依存し過ぎだ。良い薬だろう」

諸悪の根源が小さな白身の魚から上手に骨を取り除きながら、冷めた口調で言う。

どうでも良い話だが、てつきりフォークとナイフの世界の住人かと思いきや、デュランは普通に箸も使えるらしかった。学校で見る他の箸使いなんかよりよっぽど綺麗に扱ってるし。黒く長い爪があるのに器用なもんだ。

ちなみに長さんは当然のように箸が使えた。こんだけ和風な格好だけど実は箸使えませんかという残念なドッキリが無くて良かった。で、献立は何かと言うとオレと長さんは同じキンメの煮付けだ。

キラキラのピンクの薄い皮、ぷりっぷりの脂の乗った白身。目が

純真な子どもみたいに澄んでる新鮮な奴。砂糖、酒、醤油、みりん、生姜……甘すぎず辛すぎず、良い感じのしみ込み具合ですなあー。

白いご飯が進むぜこんちくしょー！。
ほかにも三つ葉のお浸しとか、生湯葉のお刺身、小松菜の白和え、里芋と筍の煮物などなど。
うまうま。

「……………」

「……デュラン殿」

ん？

見るとデュランが魚が三匹あった魚の内一匹だけ食べて、残り二匹は丸ごと残して箸を置いていた。

他の副菜やらお澄ましにも手が殆どつけられていない。

「……悪いが、これ以上は無理だ」

なぬいつ？！

「ちょっとデュラン。人んち来てご飯ごちそうになって、それ失礼じゃない？」

「そうだな」

そうだな、じゃないだろ！

そう思うなら食え。

胃を四つに増やして反芻^{はんすう}してでも良いから食え！

「……デュラン殿、少し休まれては如何か？」

心配そうな長さん。良い人だなあ。

でもデュランを甘やかすとつけ上がって碌な事しないぞ。

「ナカバ、お前これ食べないか？」

「自分で食え」

「焼き魚というのもなかなか旨いぞ。塩加減も良いし、この時期に最高に良く脂の乗っている魚だ。骨も身から直ぐに離れる新鮮な奴を焼いたのだから不味いはずが無い。この透明な脂、引き締まった身の色艶」

……。

「それに……この料理人の瑪瑙は相変わらず良い腕だな。見る、この金色に焼けた皮を。触れるだけでパリンと弾けるのが分かるか？」

む……。

「大根下ろしも見ての通り雪のように白く軽く滑らかで、味は辛みがあるがさっぱりしている。これにここの庭でとれた酢橘を絞ってかけると実に良い香りがするぞ」

むむ……。

「折角こんな上物を二種類も食べる機会があると言うのに、試さないなど愚の骨頂だな。……ああ、しかし一種類しかナカバは食べる予定が無いのだったか？　そうか、悪かったな無駄な話を聞かせてさて、勿体ないがこちらは下げてもらおうとしようか。瑠璃か玻璃をここへ呼ぶ鈴は……」

「残すなら貰う」

ああ、俺は今確実に太っていつている。

まあ青魚の脂は頭が良くなるらしいし？ 悪玉コレステロールに
対抗できるらしいし？ 良いんだ、別に。

デュランが丸ごと残してた皿をこっちにレスキューし、有り難く
いただく。

そろそろ冷めてるかと思ってたんだけど、お魚はまだ焼き立てみ
たいに熱くてじゅわじゅわ言ってる、とても美味しかった。大根お
ろしや酢橘も勿論試しました。
はー、幸せ。

ふと顔を上げると微笑ましい、ってな表情の長さんとばっちり目
があってしまった。

う、うむ……まあ、確かに良く食べてますけどね、オレ。

「こちらの料理はお気に召していただけたのであろうか」

「あ、はい。すごくうま……美味しいです。オレこう言うのが好き
なんで」

「それは重畳」

ちよーじょー……頂上？

「ナカバ殿、と申されたか」

「あ、いえ。こいつ……デュランはそう呼んでますけど出来ればマ
サキでお願いします。ナカバって名前、あんまり好きじゃないんで」

あっちじゃこいつの顔立てておいたけど、別にこっちに来てまで
わざわざナカバとか言われる筋合いも無いのでオレは軽くお願いし
てみる。

それに長さんは妙な顔一つしないで笑顔で快諾してくれた。

「では、マサキ殿」

「はい」

「本日は遠路はるばる、よくぞお越し下さった。心より感謝申し上げます」

「うえっ?! いや、いやいやいや……その、オレはデュランに引つ張り込まれたただけなんで。えーと、だからその、あんまり頭下げてもらえるような事はしてないと言いますかね」

そんな風に畏まれちゃうとこっちは小市民だから恐縮してしま
う訳でして。

しかも、今はデュランの皿から獲物をかつさらったりしてるよう
な格好な訳でして。

……うん、まあ成長期だからその辺大目に見て欲しいな。うん。

「つまり、感謝するなら俺にしろと言う事だ」

「そうは言ってないし!」

「無論、そなたには常々感謝しておるよ」

オコチャマ魔王の空気を読まないセリフにも微笑でフォローを入
れる長さん。大人だった。

これでデュランの方が実年齢上だってんだから、ねえ……。

「……何だ」

「いーえ」

「……」

「……」

「なかなか打ち解けておられるようだな」

「解けてません」

大人じゃなくて、もしかして天然なんだろうか、この長さん。

「長さんって、普段何やってる人なんですか？」
「何もしておらぬよ」

あり？

「偉い人、なんですよね」
「いや、私は何の権力も持たぬよ」

ありやりや？

「ベルセルクさん達のまとめ役なんじゃあ……」
「纏めておると言うよりも、彼らが私を血の盟約により従ってくれておるにすぎぬ」

「そうなんだ、ちょっと意外です」

でもデュランと違って人望ありそうだ。

「……また何か考えただろう」
「いいえ、別に、何でもございません」
「嘔吐きだな」

食事を途中放棄しやがった無礼者が、箸置きでピラミッドを作りながらぼそつと言う。

「嘔吐き小人だな」
「何か余計な語句を増やしやがった！」
「ないない小人の親戚か」
「その顔でないない小人とか言うな！」

知らない人の為に。ないない小人とは目に見えない小人さんで、人が必要な時に必要な物を隠し、要らなくなつて忘れた頃にベッドの下とか机の引き出しの奥とかにそれを入れて返却する迷惑な妖精さんの事である。

「自分こそご都合主義なお伽噺の顔しやがつて……」

「何だそれは……」

「知らん」

「……慕われておるの、デュラン殿は」

「違いますつてば」

長さん、もしかして天然ボケじゃなくて、本物のボケじゃないよね？

そんな疑惑を抱きつつ、オレは口の中に沢庵を投げ込んだ。

長さんとオレ（後書き）

【作者後記】

こんばんは、お越しいただきありがとうございます。

お陰様をもちましてPV10万達成（現在103,440）です。
新規にお気に入り登録下さったそのあなたにも、以前からご贖
下さってるそのあなたにも、うっかり何かの間違いで入っちゃっ
たそのあなたにも、上記のどれにも当てはまらないあなたにも、
感謝しております。

遅くなりましたが53話目です。

ご指摘、ご意見、ご感想、放置、いつでもお待ちしております。

深謝を込めて 作者拝

進路相談とオレ

「デュラン殿」

お膳を下げて、食後の口直しで出された濃くて熱い抹茶と桜色のアイスクリームを交互につつついてると、長さんがスツと居住まいを正してデュランの方を片方しか見せてない赤い目で見つめた。

「此度は……」

「止せ」

言いかけた言葉をデュランが途中で遮り、正坐していた（魔王が正坐……笑っちゃだめだ。ぷぷぷ）足を片立て膝の形に崩して膝に頬杖をつき、煩そうに手を振った。

「お前は直ぐにそうして話を急ぐな……ナカバを見る、何も考えずに生きてるぞ」

「うつさい、勝手に頭の中身を決めんな」

「どうせ今も退屈だとか、そのデザートのことぐらいしか考えてないのだろう」

「違いますー」

いや、凶星ですが。

見栄張ってみた。

「てゆうか、デュランこそ何か将来の事とか考えてるわけ？」

食べる気配が無いデュランの前から半分溶けかかったアイスクリームを奪いつつ尋ねたオレの言葉に、デュランが馬鹿にしたように

フフンと笑う。

「お前と一緒にするな」

「……いや、してないし。むしろオレが断る」

同じカテゴリーとか止めて欲しい。

長さんとか見てみるよ。顔が微妙に厳しい感じで強張ってるぞ。

「まあ、まず家だな」

「家？」

「大きな窓と、小さなドア……古い暖炉」

「ふむふむ」

「真っ赤な薔薇と白いパンジー。子犬セシエンの横には……」

「まんまパクリじゃねえか!!」

「気付くのが遅いな」

「んな古い話ふってくんなあっ!」

てゆうか、既に豪邸持つてるじゃんお前は。

「まあ、俺達はマラソンランナーのような物だからな」

苦笑したデュランが、訳の分からない戯言をまた言いだした。

「ゴールは知っている。途中の補給ポイントも頭に入っている。後はどれだけうまく間をペース配分しつつ、途中のトラブルに対処するかだけを考えていれば良い。楽なもんだ」

「えー、オレならマラソンつった時点で最初からリタイアするけど

……」

「あいにくそれだけは出来なくてな」

苦笑するデュラン。

「そう言うお前は何か将来の事を考えてはいるのか？」

「うん？ うーん……いや、特には」

何か急に戻ってきた話題に、オレは残り少なくなったアイスクリームを大事に口に運びつつ首を捻る。

「何か考えてそれに絞り込むってのも悪くないんだろうけどさ。今の時点でしっかりしたゴール決めといて、ってゆうのは何か、嫌なんだよね。途中でダメになった時とか、どうすんだらうとか思っちゃうとね」

好きだった玩具は親の手で取り上げられるとか。

走ってた足は途中で捻挫するとか。

一方通行の道を行ったら行き止まりだったとか。

時間切れで途中で打ち切られるゲームとか。

どっから、いつ、それが潰れる原因が降ってくるか分からないのに、今から確固たる目標を持つ事が出来るかと言われるとオレはN Oだ。

自分の特性とかやりたい事とか趣味とか、それを仕事にするのが幸せなのかとか。

考えてるとますます良く分からない。そんな事決めてなくても明日は来るし、死ぬ時は死ぬのに。

それなのに、どうして一つの目標を決めてそれに向かって進めるんだろう。

「まあ、明日の宿題が間に合えば良いかなーとかぐらいかな」
「……」

何かダブルで微笑されてしまった。

長さんには何か懐かしい物を見るかのような優しい目で。
デュランには仕方ないな、とかいう感じの憐れみの目で。待て何故お前に憐れまれにやなんのだ。

「マサキ殿はお若い。確かに、先の見えぬ事は恐ろしい……不確定な立場の不安は私にも覚えのあるものだ」

「長さんも？」

「昔も私は人であり、そなたぐらいの年齢であつた頃もあつたのだよ」

あ、そつか。元、人間……だっけか。

抹茶を飲む長さんを見てオレは今更そんな事を思い出す。
でも、長さんが学校通う姿とか想像がつかないんですけど。

「周囲からの期待もあるう。世間の言葉に疑問を覚える事もあるう……されど、それもまた良き事よ」

「そうかなあ……」

「求められる物だけを備えても、それだけでは人は立てぬ。早くに指針を定め進むのも難しく尊き事であるうが……可能性を広く持つたまま進むのもまた尊く難しい事だと私は思うのだよ」

可能性というのは壊れやすく、得難い。

長さんは微笑む。

そして迷うのは可能性があるが故の事であろう、と。その可能性を知る力がそなたに備わっているが故であろう、と。

残念だけどオレはそこまで考えて迷つてる訳じゃない。

リーダーシップを持てと言うけど、船頭ばかりでは船は進まな

いんじゃないのかとか。

上手く喋れるのが良いとか言うけど、それじゃあ上手く話を引きだしたり理解する才能はどうなのかとか。

そんな疑問は、ただの世間の要求からの逃げなんだろうとかとか。ただグルグルしてるだけだ。けど。

「マサキ殿が今迷う事も過ちとは呼べぬ……道を決めた時に、その道が塞がれている事の無きよう、広き可能性を持ち、世界を見てゆけるよう進まれるが良からうよ」

「……」

長さんの言葉に不覚にもじわつと来てしまった。

そんなオレの姿を長さんは笑ったりとかしないで、慰めたりとか、何か言ったりとかもせず、ただ黙って待っていてくれた。それが、オレにはすごく有り難かった。

オレにだってプライドってもんが、立派なもんじゃなくてもあるのである。

進路相談とオレ（後書き）

【作者後記】

迷えるつてのは幸せなんじゃなかるうか。

迷いなく進む強さにも憧れつつそんな事を言ってみたりしている作者ですこんばんは。

ご来訪ありがとうございます。

新規にお気に入り登録して下さった貴方と貴方と貴方ありがとうございます。

人生に無駄な事など何もないとは思わずとも、一期一会というのは良い言葉だと考えてます。

今、ここを訪れて下さったその事に深い感謝を。
もう少し続きます。

作者拝

夜話とオレ（前書き）

下記の書名で伏字になって無いものは基本、思いつきで書いた書名です。

現実が存在する一切の書物とは関係ありません
（デュランが読んでいた本は除く）

夜話とオレ

床に布団敷いて寝るのはいいちゃんちで良くやってた事だし、枕が変わったら寝られんとかいう性格でも無いんだけど。

「……」

まったく眠れません。

オレは溜息を吐いて布団の中でうつぶせになる。足をばたばた布団の中でさせてみちやったり。

「うーん、寝不足のはずなんだが」

妙に神経が騒いでいるのか眠れない。

まあ、このただっ広い座敷で一人ぼつんと寝ると言われているせいかもしれないが。

障子に外の立派な庭の植木の陰とかが映ってざわざわしている。天井の木目は見上げたらどっかに一匹くらい隠しミツキ。が居るかもしれない感じた。

床の間には何か高そげな陶器の花瓶があつて、花が活けてあつたし……多分良い部屋なんだろうけど、広すぎる。落ちつかない。体育館の床に一人で寝そべってる感じ。

羊も二十を超えた辺りで数え飽きてから放置されてるし……今頃牧場主は脱走したつきり帰ってこない奴らの為に大慌てだな。戯言だけだね。

「はー、ダメだ。諦めよう」

何か水でも飲んでこようかな……ここの部屋の間取りとかさっぱ

り分かんないけど。

起き上がって、まだ若干寒いので埃よけ用と思われる正方形の判の布を肩に巻いて、オレは障子を開いてそつと縁側の方に出た。

木の板の感触が裸足の足に気持ち良い。

どっかで水の流れる音がする。庭で金魚でも飼ってるんだろうか？
しっかし暗いな……月明かりだけってのは。

「ナカバ」

「っ?!」

び、びびった……何か前にもこんな事あったな。

オレは足を止めて、幽霊のような格好をしてるはず（長い黒髪、白い肌と白いずるずるした服……ほら、幽霊じゃん）のデュランを
探す。……ん？ どこだ？

「ナカバだろう。どうした」

「あ、部屋の中か」

障子の向こう側から聞こえた声にオレは胸を撫で下ろす。

「いや、ちょっと喉乾いてさ。水どっかで飲めない？」

「ここにあるぞ」

あ、ラッキー。手間省けた。

オレは障子を開いて中に入る。

同じく無駄にだだっ広い部屋の中にデュランがいた。

まだ灯のともってる燭台の下に藤編みの椅子を置いて、座って足を組み分厚い革装丁の本を読んでいるようだった。へー、珍しい。

「まだ起きてたんだ」

「寝る気分じゃ無かったからな。水はその棚の上に水差しがあるだろう」

「あ、それが」

傍に伏せて置いてあつた茶碗に水を注ぎ、遠慮なくいただく。どうせデュランは珈琲しか飲まないだろうし。

ついでに肩越しにデュランの読んでる本を覗き込んで見る。

『Jenseits von Gut und Böse』

……なんのこっちゃ？

ついでに脇に積んである本を見てみる。

『週刊少年ジャンプ』 『胸部画像診断技術の推移』 『ミレイ式建築』 『365日のおにぎり』 『古着のおしゃれな着回し』 『ネコ日和』 『これが怖い！ 嵌りやすい金融の落とし穴』 『人はなぜ衝動買いするのか』 『配管の全て』 『—— 識の人間関係』 最後のはタイトルの上が良く見えないが、まず間違いなく某人間シリーズのどれかだろう。

……。

デュラン、雑読にも程があるだろ。

「面白い？」

「まあな……前に読んだ事はある物だが」

ボタンと本を閉じ、闇の中のパープルアイでオレを見上げてデュランが微笑する。

「そっちのはもう読み終わってるからな。読みたいのがあれば持つて行っていいぞ」

「ふーん……」

ネコ日和とかミレイ式建築と、あとは……おにぎりとかちよつと

気になるけど。

「良い。要らん」

「そうか」

気にした様子もなく読み終えた本をサイドテーブルに置いて、デユランは足を組み換えた。

そしてオレの方を見る。

「……何を着ているかと思えば、そんなものは外せ。埃がつくぞ」

「いや、微妙に寒いし」

「そこにタオルケットがあるからそれにしろ」

寝る気配もなくなつたんだままの形のタオルケットを指したデユランに、オレはそれもそうかと埃よけシーツを外して、肩を払つてからタオルケットを借りる。おお、こっちの方がやっぱ良いな。

「で、眠れないのか」

「あー、うん。まあね。セシェン君のベッドメイクが上手すぎてあつちに慣れちゃったのかも」

「ふふ……奴が聞いたら喜びそうだな。後で伝えておこつ」

「喜ぶかねえ。オレ人間だよ？」

「喜ぶさ……自分の仕事の成果を認められるのは嬉しい物だ」

ふむ。まあ、寝心地良かったのは事実だし。

「座るか？ 立ったままでは疲れるだろう」

「えー……うん、まあ、じゃあ座る」

何故にこいつが居る場所に、とは思ったけどあの寒々しい部屋に戻っても暫く寝られないだろうし。

オレは勧められて空いていた藤椅子に体を沈める。

灯りは燭台一つだけというこの空間は結構薄暗いし、デュランの姿もあんまりみえない状況だからまあ、これぐらいは我慢できそうだし。

「で？」

「で、って何さ」

「何か思うところがあって寝られないんじゃないのか？」

薄明かりの向こう側から柔らかい音質のデュランの声が聞こえてくる。

「いや、そう言う訳じゃないんだけど……」

普通に眠気がさっぱりやってこないだけだ。

まあ、デュランがこっち来る前に言ってた慰安訪問の意味は何となく分かったような気はするけど。

「デュランも眠れないの？」

「ん、まあな……俺は眠らない時の方が圧倒的に多いが」

「寝なくても平気なんだ」

「ああ……寝ても大して面白くもないしな」

「あんたねえ……」

面白いかどうかだけで人生渡っていく気かよ、こいつは。

オレはギシギシと揺れる藤編みの椅子に座り込んだまま天井を見上げる。

板で出来た天井。じいちゃん家を思い出す。

オレは何も言わない。

デュランも何も言わない。

ただ障子の向こうで遠く眠そうな感じの水の流れる微かな音とか、葉っぱの擦れる音とか、自分の呼吸とか、そんな音だけが聞こえる。静かだけど静かじゃない世界。

「……何か」

「……何か？」

「……。うんにゃ、やっぱヤメ」

ぐっと伸びをして、オレは体にタオルケットを巻きつける。みのむしみたいな恰好だろうな、オレ。

「デュラン」

「何だ」

「オレさ、ここに来て役に立ってる？」

オレの問いにデュランは一瞬瞠目して、それから小さく微笑んだ。殆ど灯りの無い状態だったけど、何と無くそんな顔をしたのが分かるような気がした。

夜話とオレ（後書き）

【作者後記】

こんばんは、ご来訪ありがとうございます作者です。

血沸き肉踊るバトルシーンは大好きですが、何もしないで近くに居てぼーっとしている場面も好きです。

長くなりそうなので肝心の部分はまた明日。

作者拝

迷惑な親戚とオレ

ここにきて思った事。

怖いくらいに澄みきった、汚い物なんか何も無いみたいな雪世界。その中にぼつかり緑色に浮かびあがってたベルセルクの集落はまるで場違いな箱庭。

その中で動き回ってる和服を着たベルセルクの人達は、見た目は普通なのに何かどっかがおかしくて。

長さんは優しいし、紳士だし、いぶし銀だけど……やっぱり何処かが変だった。

ちいさな子供とか、放し飼いの鶏とか、生き物の気配はあるけど、何だろう、妙に落ち着いてる感じ。

騒がしいのよりはずっと良いんだけど、のどか長閑なんだけど、どっかがずれてる感じ。

若いのに若くない長さん。

親しげなのにどっか遠慮してるようなデュラン。

穏やかな雰囲気なのにどこかぎこちないベルセルクの集落。

まるで、全部が慎重に息をひそめて平和のふりをしているみたいな。作り物めいた感じ。

ただ、外に広がる雪のあの光景だけが本物みたいに。

「何でここだけ季節が違うんだろ」

「長の力だ」

独り言のつもりだったのに、薄闇の向こう側からデュランの声がそう返してきた。

「本来ならここは生物の住めない環境になっている。だが、長の力

で集落の周囲だけは季節が狂い、生命が狂う……ベルセルクの長である彼によって、ここの豊かな生活環境は保たれている。水も、草も、動物も、風も土も何もかも、長がもたらす恵みだ」

「へー、長さん凄いんだ。伊達に髪の毛伸ばしてないね」

「何だそれは」

苦笑交じりの声。

いや、男の長髪ってあんまり好きくないんだけどさ。長さんの髪は夕焼けみたいで綺麗だからあれはあれでアリだなーとか思ってたのですよ。

「お前の趣味はどうでも良いが……あれはきちんと意味があって伸ばしてある物だ。ベルセルクの長たる彼が髪を伸ばすのは戦う意思の無い事を示している」

「ふーん、じゃあ戦時には切るの？」

「切るぞ。元は戦時には鬪いの邪魔にならぬように髪を切る習慣があったのだが、それが逆に髪を切らないイコール戦時では無いという意味付けがされるようになってな。それで、ああしてベルセルクの長は平時には己の髪を腰までの長さに保つようになった訳だ」

「へー」

ちゃんと意味があるんだなあ。

「じゃあ、あんたのその髪は？ 足首以上伸びてるけど」

「俺のは形状記憶だ」

……。

さ、要らない記憶はゴミ箱に捨てて置いて、

「……本当の事だと言つのに」

「心底どうでも良い」

役に立たない魔王デュランに比べて長さんは凄いなあ。人格は出来た人だし、皆の役に立ってるし。

「……出来た人、か」

微笑笑するデュラン。

「お前から見て彼はどう見えた？」

「どうって、渋いおじさま？　なんか悟りを開いてる感じ。達観してるっーか、仙人みたいなの？」

どこまでも子供じみてて、人間くさいどっかの魔王様とは全然違う。

「で、デュランはそれが気に入らないからあんな態度なの？」

「……。まあ、それもあるな」

大分闇に慣れてきた目に、向こう側で座ってるデュランの姿が見える。

何か、微妙な感じだった。

「彼はここを動けない。長になった時点で選べる道もただ一つだけだ……そして、相当無残な死を迎える事も既に決定されている」

「……長さんが？」

「そうだ」

「何で？」

「阿修羅王だからさ。修羅達ヘルセルクの王だからだ」

「それだけ？」

「それだけだ」

デュランは笑んでいる。いつものように。

「どうにかできないの？」

「無理だ……いや、出来なくもないがな」

「どっちだ」

反射的に突っ込みを入れてしまったが、デュランは表情を特に変える事は無かった。

「彼が今阿修羅王になったように、他の誰かがその立場を引き継げばその死に方は回避できる」

「え？ 長さんって昔から長さんじゃなかったって事？」

「言っただろう……元、人間と」

元、人間。

じゃあ長さんは昔はオレみたいなフツーの人で、それが何かのきっかけで自分からそんなヤバイ立場になったってことか？ 何で？ オレなら絶対にそんな死刑宣告的立場受けないぞ。

「原因は俺の同類だ」

デュランの声がそう言葉を紡ぐ。

「まあ、親戚のようなもの、かな……それを庇って、彼は阿修羅王になった。それが無ければ今頃は一人の人間として家庭を築き、家族を持ち、友人達と過ごしていただろう。だが、彼は選んだ。そしてそれまでの全てを失い、今ああして死刑台に座っている」

「……さすがあんたの親せき。やる事の迷惑レベルのケタが違うね」

お前らどんだけ迷惑なんですか……。
しかし、異世界に暇つぶしに呼び出されたオレとは迷惑のレベルが違うぞ。

「その親戚どうなった？」

「恋人と駆け落ちした」

「……」

絶句。

さすがのオレもそんなオチは想定してなかったぞ。

「長さん、一人で貧乏くじ引いちゃってんじゃん」

「その通りだな」

「その通りって……」

もうちよつと申し訳なさそうにしろよ。

「ちなみに、長さん知ってるの？ その……」

「知ってるぞ。役目も、結末も……愛の逃避行の話も。その結果が、あのざまだ」

「あのざまって……その言い方は無いんじゃない？ そりゃあ？

親戚のやった事まで責任取れとかは言う気無いけどさ。でも言い方ってもんがあるんじゃないの？」

「……あれでもまだ生きているからな」

ムツとしてらしくない事とか言ってみちゃったりしたオレに、デュランは笑みを浮かべたまま視線を灯りの方に移した。

もっただいぶ溶けて短くなつた蠟燭の先で炎がゆらゆらしてる。

デュランの目も、暗い所でゆらゆらと紫色の炎みたいに光を發し

ながら揺れていた。

「生きているなら、楽しまなければ」

先に何かがあるとしても、それを今日生きている事を潰す理由にするには勿体ないと思わないか？

「俺は彼を窒息させたくない」

「それは……自己満足？」

「そうだ」

俺が気に入らないからだ。

言いきったデュランには、まるで迷う事などなんにも無いみたいな、そんな目をしていた。

迷惑な親戚とオレ（後書き）

【作者後記】

元がシリアスな話なので、その辺に触れると話が重くなります。どうも今晚は、ライトに生きたい作者です。

ご来訪ありがとうございます。

新規にお気に入り登録下さったそちらのお嬢さん、或いは紳士のお方、ありがとうございます。

昔からご贔屓頂いているそちらのお方、ありがとうございます。

今日すっかり迷い込んでしまったそちらの人……これも何かの縁と言う事でご容赦ください。

さて、次は七日目朝です。

デュランの目的だった人物を知って、長とデュランの関係を聞きかじったナカバが改めて長と話します。
宜しければ、またおいで下さいませ。

作者拝

不器用とオレ

「……。マサキ殿、気分優れぬ様子と見受けたが何か粗相でもあったのであろうか？」

「いえ、まあ、ちょっと色々と……おかまいなく」

心労が重なってかるーくへこみつっ、かるーく苔栽培とか始めそうな感じになってるだけですんで。

何があつたかつて？

まず、鶏の声で起きて一発目にデュランを見てしまった。うっかりあのまま寝てたらしい。とりあえずデュランにはタオルケットを頭からかぶせて、ついでに水差しの水をぶっかけといた。当然の報復。

それから目があつた子供にもものすごい勢いで目を逸らされ、おまけに逃げられた。

そして朝ご飯の時に例の美人双子姉妹さん（彼女達が瑠璃さんと玻璃さんだった）に視線だけで呪い殺されそうな勢いで睨まれ続けた。

おまけに生きの良い里芋の煮っ転がしがオレの箸から床に向かつて華麗なダイブを決めやがった。

オレの里芋だったのに……。

まあ、そんな悲しいハプニングが朝から立て続けに重なったせいでオレはちょこつと庭の隅っこでいじけていたのである。

そんなオレを見かねたのか長さんが声を掛けてくれたわけでした。そのまま傷心のオレを散歩に誘ってくれちゃったり。気遣いの人だなあ。

ま、そんなんで今オレは山の中に居ます。

「……なんつーか、物凄いですね。ここ」

右側には七分咲きの桜。左側には真つ赤なモミジ。季節感丸ごと無視。

そう言えば食卓に出てた奴も何か季節バラバラだったし……今時養殖とか速成じゃない奴の方が珍しいから気にして無かったけどここは天然でも匂とかごっちゃごちゃな場所なんだろう。外は一面の雪景色だしなあ……。

「あー、これって長さんの趣味ですか？」
「……趣味、とは？」

この場合、「趣味」ってどんな意味の単語ですかという質問では無いだろう。

オレが黙って周囲を指さすと、長さんは得心が言った様子で頷き、

「私の意図したものではないが、好ましくはおもっておるよ。良き眺めであろう」

「あー、確かに。ダウンロード数稼げそうですね」

写真集とかも作っちゃいそうな感じ。

オレは普通に感想を述べただけだったんだけど、長さんには何故か妙に受けてしまった。

今の何が面白かったんだ？ やっぱリデュランの知り合いだし、長さんも笑いのツボがずれてるんだろうか。

……。

長。阿修羅王、だっけ。

「あの、何でオレを案内とかしてくれたんですか？」

言ってからふと思い出して、「別に嫌だって訳じゃないですよ」

とオレは手を振る。

怒ってる訳じゃないんだけど、言い方がきつく聞こえる事があるらしく……要らん誤解を招いて痛い思いをした事が何度かあるし。まあ、無愛想なのは自覚してるけどさ。

長さんはそんなオレの様子に微笑んで手を振り、

「そなたが元気が無いように見えたのだよ。余計な世話であつたやもしれぬが……」

「あ、いえ……ありがとうございます」

「デュラン殿の友人であるが故、と……そう考えておつたのであるうか？」

う……まあ、ちょっとだけは。

「つて、いやいや、友人じゃないですから」

「然様であつたか」

「さよーです」

オレは友達を頭からタオルケットで簀巻きにした上に水ぶつ掛けたりしません。

「デュラン殿はそなたに気を許しておるようだったのな……すまぬ」

「いえ、別に良いですけど……」

気を許すと言うより、一方的に玩具にされてるような。

オレの気持ち顔に出たのか、長さんはふわと笑んで「マサキ殿」とオレの名前を呼ぶ。

「デュラン殿の一人称は、何と聞いておるか」

「え？ えーと……」

んなどうでも良い情報殆ど気に留めて無かったけど……何だっけ。音声モザイクかった記憶を引っ張りだして、オレは自信無く答える。

「確か、俺、だったような？ ん？ 私？」

「然様。デュラン殿は一面酷く分かり易い方ゆえな……心を許した相手には俺、と名乗られるのだよ。公人としての彼は一つのけじめとして私と称するようだがのう」

「へー」

何だ、作者がアホだから文体統一出来てないだけかと思ってたよ。

「長さんとの会話も俺、でしたよね。確か」

「……うむ。デュラン殿なりの親しみの表現なのであるうな」

分かりにくい奴め……。いや、ある意味分かりやすいのか。

「でも、長さんに色々迷惑かけてません？ あの馬鹿」

「……デュラン殿の事であろうか？」

「クリ。ンの事じゃないですね」

冷凍庫様。

「デュラン殿には……世話になっておるよ。些こわやか心苦しい程に」

「つまり、迷惑なんですよね」

「迷惑、ではないのだがのう……何ぞ、デュラン殿から耳にされたのか」

「ま、ちよつとだけですけど……」

「何と申されてた」

「……どうしてオレに聞くんですか？ 本人が居るのに」

「……」

「……すみません」

「否。そなたに聞く事では無いのだ。分かつておる」

まあ、あの魔王様の事だから答えないんだろうけど。こう言うのはオレが聞かれる話じゃないし、お互いに腹割って話し合うしかないような気がするんだけどなあ……ま、そこまでこっちが言う義理もないけどさ。

「幾歳いくとせを重ねようとも、難しきは人の心よな……」

「長さんでもそうなんですか？」

「無論……私も未熟故、未だ己が心すら見極められずにおる。こうして悩んでも詮なき事とは知っておるのにのう」

長さんが未熟なら俺は無精卵だな。いや、我ながら意味分からん。

「デュラン殿の事をマサキ殿がどう見ておられるのか、私には分からぬ。分からぬが……嫌わないではいただけないだろうか」

「……」

「デュラン殿の業はあまりに深く重い。されどあの方はそれを表に出す事を良しとせぬ故に色々と誤解を招いておられる」

「はあ……それ、すつごく頭悪くないですか？」

「……そうかもしれぬ」

長さんの表情がようやく少しだけ緩んだ。

「実際、デュラン殿は不器用なのかもしれぬな」

案外この人たち、単純に不器用同士なのかもしれない。

不器用とオレ（後書き）

【作者後記】

イマイチ笑い成分が足りない、と思いつつ足りないまま終わる。
こんばんは、作者です。

ナカバがドライだったり、場の空気を読まなかったり、共感ゼロだったり……こんな主人公で良いんだろうかとたまに思います。
でも、そこにナカバを視点に据えた意味があるので。

同情しない、共感しない、引きずられない。

同じ空気に染まる事を拒否する姿勢って必要だと思っんで。

もう少ししたら軽い話になるはずです。

今しばし、お付き合い下されば望外の喜び。

作者拝

仕返しとオレ

戻って木製のくぐり戸を通った瞬間、目の前が真つ暗になった。それを理解する前に頭の上からバシャーッと冷たい水が降ってきた。当然ずぶぬれ。

こんなことする奴一人しかない。

オレは世界から光を奪った存在（つまり誰かさんが被せてきたタオルケット）を何とか脱ぎ捨て、

「なにをするだー！ 許さん！」

「ふっ……因果応報だな」

目の真ん前に居たデュランに向かって丸めたぐしよぬれのタオルケットを投げつけ、叫んだオレにニヤリと笑って腕組みしたまま偉そうにふんぞり返るデュラン。

こ、の、や、ろ、う！

「てめえの血は何色だ！」

「お前が先にやった事だろう。まったく、うっかり防衛し損ねたではないか」

「うっさい。それ言うならあんたがあの場合に居たのが悪い。ってにぎゃー！！」

「元気だな、本当に」

ネコにしてみたいに襟の後ろを掴んで持ち上げられた。

ぎゃー！ なにすんじゃー！ 服が伸びるー！！

「デュラン殿、さすがに斯様かような扱いは……」

ジタバタと暴れるオレに、先刻までのオレとデュランのやりとりをただ呆然と見ていた長さんが控え目に声を挟んでくれた。
が、

「ふむ……」

デュランの野郎聞いちゃねえな、こいつ。

表情がアレだ。見た事無い生き物を興味津々に観察しているガキ。
このやろう。オレはUMAですか。

「おーろーせー！ おろさんかー！ ぎゃーす！」

「何をだ？」

「オ、レ！」

「フラメンコか？」

「違ーうつー！」

絶対わざとだろ、貴様ー！

蹴ろうとしても殴ろうとしても紙一重で避けられるし、おまけに
しっかりオレの位置は宙吊りのままキープだし。

ちくしょう。

うーと唸って睨んでみると、長さんが困ったような顔をしてデュ
ランの肩に手を置いた。

「デュラン殿、そろそろ解放して差し上げよ」

「……つまらん」

ボソッと何か言いやがったが、デュランは案外素直にオレを地面
に下ろした。

ついでに長さんがおいで、ってな感じで手を広げてくれてたので
そっちの方に走って行って、よいせつと腕の中に入る。

イエイ、安全地帯！

「もっと大切に労らねば……マサキ殿が困っておられたであろつに」
「そうだそうだー」

「それに、マサキ殿のされた事など他愛ない悪戯であろつに……そなたが仕返しなどせずとも許せば良からうよ」

「もつと言つてやれー」

「……」

長さんの正論にデュランが腕組みしたまま柳眉を顰める。

「随分と親しくなつたのだな」

「はい？」

「勝手に二人だけで遊びに行つたしな。まあ、良い傾向だが」

「……」

えーと。

「もしかして、置いてつたから拗ねてんの？」

「……別に」

「……長さん、こんな奴ですよ、デュランって。良いんですかこんなんで？ 今のうちに関係見直した方が良いと思いますけど」

「何時までも若い心でおられるのだよ」

「いや、ああ言つのは普通精神年齢がガキっつーんです」

「……」

長さんと喋つてたらデュランがじーっと何か言いたそうな目でこつちをみてきた。

「……何？ 構つて欲しい訳？」

「待っている間退屈だった」

「ダメ人間だ……」

しかも偉そうに言うセリフかよ、それ。
結局仕返しとか何とか言うのも要は構って欲しかった訳ですか。
はいはい、しょうがないでちゅねー。

「じゃ、ほっときましょう長さん」

「いい度胸だな、ナカバ……後で覚えておけ」

だってあんたの相手より長さんの方がずっと良いんだもん。
てか、そもそもオレに長さんの相手させる為に連れ込んだんじゃないのかよ。

「つーか、暇ならここに居るベルセルクさん達と話すとかすれば良いじゃん」

「嫌だ」

「子供かつ！」

「つまらん……」

「デュラン殿……」

「……冗談だ。本気にするな」

長さんの困り果てた表情に、デュランが表情を苦笑に変える。
本当に冗談だったか？ おまいさんよ。

「まあ、暫く好きにしていれば良い……ただし、日暮れにはこちらから出るぞ」

「何で？」

「戻れなくなったら困るだろう」

「うーん……」

いや、まあセシェン君の料理は美味しいけど、ここの和食もけっこういけるしなあ。

まあ視線がガビガビしてますけど。

「……まあ、取り合えず後でまた行くからな。やりたい事があるのなら今のうちにやっておけ。俺も少しやる事があるしな」

「暇潰し？」

「そうだ。邪魔するなよ」

お前が言えた義理かよ、それ。

任務完了とオレ

夕暮れ。

空が長さんの髪の色になる頃、オレは長さんと館の門の前でお別れた。

柄にも無くしんみりしそうだったので、なるべく元気な感じで別れてきたけど……、

「長さん、また会えるかな？」

「気に入ったのか」

「うーん、まあ……気に入るっていうか……嫌いじゃないけどね」

ちよつとだけ、うちのじいちゃんみたいな感じだったから。

少し懐かしかったのかもれない。孫気分って奴。

帰りがけにまた、あの硬くて大きくてごつごつした手で頭を撫でられたせいかもしれない。

しかし、長さん意外と力が強かった。お陰でオレはよろけないように結構必死で足踏ん張るはめになったんだけどさ。まあ、気持ち嬉しかったから頑張って受けたけど。

「何か、うん」

「……多分無理だろうな」

「そっか」

やっぱりね、とオレは呟いてデュランの後ろを歩く。

「……残念か？」

「ちよつとだけね」

まあ、そんな気はしてたからショックは無いが。

「あっさりしたものだな」

「かなあ……いちいちへこんでたら人生やってけないしね」

「里芋の煮物の件ではへこんでいたようだな」

「うっさい」

てか何故知ってる。まさかお前もストーカーなのか。

「向こうの連中の間で噂になっていたぞ」

「……。やっぱりもう来れなくて良いや」

旅の恥は持ち帰ったり再燃させたりするもんじゃないのである。

そうこう言いながら歩いてるうちに空の色が段々黒ずんで、藍色になって、そうなってきた頃にやっとこさで例の【門】が見えてきた。

二つのねじくれた角みたいな白と黒のオブジェの間では例のうんちやら文字が光ってる。

もしかして、例の六甲おろしがまた来るんだろうか。

はーんしーんたいがーす。

「……予定より少し遅くなったか」

デュランが呟きながらその表面に触れると、文字が奴の手から逃げるようにざざーっと左右に割れる。

「文字にまで嫌われてるんだ……」

「何処から突っ込めと？」

じっとりした目でデュランが見下してきやがったが、オレは無視

してさくつと【門】の間へ足を進める。

今回は突風は無かったし。面倒な事しないで済みそうだ。
らっきー。

「おい、待て。勝手に行くな」

「やだ」

「ナカバ」

何かごちゃごちゃ言ってるデュランをほっというて先に行く。待つ
義理なんて皆無だし。

間を潜り抜けた瞬間、ぐらりと体が揺れる感覚がする。
うつつ、気持ち悪っ。

「……だから言ったのにな」

「言って無い、聞いてない……」

「どれ」

後から追いかけてきたデュランがちょっぴりリバースしそうなオ
レの顔を見て、「ふむ」と頷く。

「ふむ…… 変わり映えしないな」

「黙れ……」

「ああ、失礼。変わりはないようだな」

「絶対わざとだ……」

美形なんて死ねばいいのに。

「まったく、無茶をする…… 通る前にきちんとその体を調整しない
からそう言う事になるんだ」

「調整って……」

「まあ、要は身体改造だな」
「死ね」

蹴飛ばしておいた。

馬鹿な会話のせいで吐き気はどっかいってしまっただけ。

オレはとにかくこの変態から速やかに離れるべく、例のぷかぷかしている紫の謎物体をよけながらずんずん大股歩きで進む。

デュランの方はオレの方を見て何か言いたそうな顔をしたが、【門】を閉じる作業があるらしくまだ動く気配は無かった。

よし、チャンスだ。

えーと、まずはどっちにいったら部屋に戻れるかを探るところからだな。

……どっちだ？

ま、適当に歩けばどっかに出るだろ。

「何を不満な顔をしている。欲求不満か？」

ちっ、もう追いついてきやがったか。

あれか？ コンパスの差ですか？ 捻挫しろ。骨折しろ。むしろそろそろ締め。

「黙れ、息をするな、死ね変態」

「何故変態などと言われなければならんだ……」

「自分の目に指を刺して良く考えてみる」

「そこは胸に手を当ててではないのか？」

「ていつ」

目めがけてチョキを突き出してみたが、それにデュランは似非E。丁度いいにチョキを合わせてあっさり塞いできやがった。

良い子の皆は真似しないように。

「……」

「別段、その体をどう扱おうと俺の勝手だろう」

「いきなりご主人様宣言しやがったっ?！」

「ちなみに、純粋に学問上の興味しかないぞ」

「それはそれで嫌だ……」

どんな事されるか分からん。

朝起きたらアシユラ男爵とか、片目が車輪眼とかバツタの改造人間とか……。

「バツタをかけ合わせるのならばもう少しやり方と言うものがあると思うのだがどうだろう?」

「興味無いです」

割合重要な問題だと思うのだがとかなんとかデュランはまだブツ言ってたけど、オレは無視して歩き続ける。

そのオレの横にあっさり並び、デュランがこっちの顔を覗き込んでくる。

ぷいっと反対側に顔を逃がす。

「ナカバ」

「何さ」

「そんなに歩いて疲れないか?」

「……問題無いし」

ま、体力無いけどね。でも意地。

「大体、もう長さんに引き合わせたんだからオレのこっちでの仕事はおしまいでしょ?」

「ん？ ああ……そうだな、これで用件は終わりだ」

「ならもう良いじゃん。デュランも偶には仕事すれば？」

「仕事は何時でもできる。それに一応そろそろ止まった方が良い」

「デュラン、うざい」

言って振り切る為にスピードを上げようとし、

「っ？」

ガクン、と足が急に纏れて固まった。

顔面から床に突っ込みそうになって、慌てて手を着いて顔を庇う。
ガキン。

「セーフ……ん？」

ガキン？

何か妙に硬い音がしたような。

オレは床を見ている。

例の黒っぽいタイルみたいな、奥のほうで小さな青白い光がちららしてる奴だ。

音を立てたのはこれか？ でも、ヒビとか入ってる様子は無いし……。

「ああ、やっと効果が現れてきたな」

床に四つん這いになってるオレの上の方からデュランの冷めた声が聞こえる。

「効果？」

聞き返してから、オレは気付いた。
気付いてしまった。

「……あれ？」

座りこんで腹を一度抑え、それから手を見てオレは呟く。

「なんじゃこりゃあ……」

オレの指、こんなんだっけ。

硬くて、つやつやしてて、まるでマネキンみたいな……それが爪から始まってじわじわと手首の方まで変化が上ってきている。

……何これ。

「デュラン……」

「何を驚く」

デュランの嫌になるくらい整った顔が小さく笑う。

「おしまいだと言ったのはお前自身だろう？」

任務完了とオレ（後書き）

【作者後記】

お気に入り登録100件……何だ、夢オチか。

と、色々失礼な事を言ってますがありがとうございます作者です。
訪れて下さる全ての方に感謝を。

さて、七日目夜。

そろそろナカバの話も終わりが近づいてきました。

人形になってゆく体を抱えたナカバの運命やいかに、ですかね？

これから先はストックがあるので多少早く提供できるかと……頑張ります。

作者拝

さよならとオレ（前書き）

七日間のオレの異世界生活にお付き合いいただき、ありがとうございました。

長いですが、これで、さようならします。

さよならとオレ

「タイムリミットが来たようだな……おおよそ大凡予想通りと言うところか」

この分ならずすぐに終わるな。

オレを見下ろしてデュランが呟く。

「末端から硬直が始まるはずだが……痛覚はまだ残っているようだな。まあ、それも直ぐに消えるだろう」

まるで作品の出来を確かめる芸術家のような、冷たくて貫くような評価の眼。紫色。

オレはそれに射竦められて動く事を忘れる。

落ちつこう。

つまり、どう言う事だ？

終わり……オレを召喚した理由は果たされた。だから、終わり。うん、ただそれだけだ。

オレがデュランの言葉を勘違いしてるだけ？

きつとそうだ。

こいつ変だし。もったいぶるし。だから、今更怯えるなんて事しなくて良いはずだ。

分かってる。

けど、まるで物でも見るかのようなデュランの紫色の目が、喉を締め付ける。

「最初からこうなる計画……だった、の？」

微妙に声が掠れたけど気にしない。

オレの質問にデュランはゆっくりと瞬いた。それから、笑った。飲み込みの悪い子供に言い聞かせる大人のように一言ずつはつきりと、言う。

「当たり前だろう。そんなことも決めずにお前を呼びだすと思ったか？」

……。

駄目だ。悪い意味にしか聞こえない。嫌な想像しか湧いてこない。だって、実際目の前でオレの手が人形のそれにドンドン変わってるんだぞ？

この状態で、さっきの台詞で、この視線で——どう、他の意味に解釈しろってんだ。

デュランに、魔族の王にオレは何期待してたんだ？

「どうした？」

デュランが笑う。

憎たらしいくらいに綺麗な顔で。この一週間見てきた顔とおんなじ顔で、おんなじように笑ってる。

「ああ、そうか……後少しで別れの時だからな。名残惜しいのか」

クス、と笑うデュラン。

「ならば存分に、今のうちに惜しんでおけ。お前は直にこの世界から消えるのだからな」

消える、ね。そっか、消えるのか、オレ。

うん、ここまでではつきり断言されたら諦めるしかないでしょ。
デュランがそう決めたのなら、一般人のオレにどうこう出来る力は無いんだし。

ま、出来る事と言えば消滅させられるその最後の時まで、思いっきり悪態を吐くことぐらいだろう。

「気分はどうだ？」

「最悪」

「ふむ……まあ、そう言う事もあるかもしれないな」

そう言う事、って……お前なあ。

場違いなほどに暢気なデュランの言葉にガツクリ肩が落ちる。

お前、この場でそう言う事言っちゃいますか。

「どうした？」

「もうちょっと空気読め」

「？」

「？　じゃねえっ！　もっと魔王らしくしろよ！　そういう場面だろうが！」

「何故だ」

本気で首を傾げてるっばいデュランが真顔で言いやがった。

「オレは別段魔王としてお前を見送ろうとこの場に留まっている訳ではないぞ」

「そういう問題なのかよ……」

「ああ、そうだ。お前の言っていたインスタントコーヒーの件で頼んでおこうと思ってな。後で取りに行くから向こうに戻ったら確保しておいてくれ。一つで良いぞ」

「この期に及んで珈琲の話題かつ!!」

「ただ大好きなんですか！ 中毒ですかっ！

「ん？」

……。

「今なんつった？」

「オーダー、インスタントコーヒー1つ」

「違うその前」

「痛覚がまだ……」

「戻りすぎ！ そこじゃなくて……え？ 戻る？」

「ああ、そんな事も言っただな」

「……何処に？」

「お前の体に」

「何が？」

「お前が」

……。

……。

……。

「じゃあ、コレ何」

「ん？ その体か？」

ピノキオ化が進んでるオレの体を見て、デュランは至極当たり前みたいな顔をして、

「俺が作った召喚専用のボディだが、何か不具合でもあったか？」

「……ナンデスト？」

「だから、俺が作ったボディ……オートマタ人形だ。プチプーペのボディの改良版というか発展版だな」

「……オレの体はどこ？」

「元の世界にそのまま置いてあるぞ」

精神だけ此方の世界に引っ張り込んだからな、とデュラン。
……。

「そっ……」

「そ？」

「そ言う事は先に言えええっ!!」

オレの拳がこいつを倒せと輝き叫ぶ！ 平手だけどな！

ぺちんっ！

例によつてあつさり受け止められた。

「ハイタッチか？」

「違えよ！」

「何をそんなに腹を立てている……理解不能だ」

「お前の方が理解不能だ！ お前、これがオレの体だつたじゃんかよ!!」

「言つて無いぞ」

なぬい？

「その体に改良を施し、なるべくお前の元の身体感覚に近付けもしたし、翻訳機能を取りつけたとも言ったが、お前自身の肉体がそれだと言った覚えは一切無い」

……そついや無かったかも。

「大体、正規外ルートでの転移など普通の強度の肉体が耐えられるはずもないだろう。それに、万一こちらで何かあった際に肉体と精神が同時に消滅するような危険な真似をさせると思うか？」

「でも、これどっから見てもオレの体と同じじゃん。黒子^{ほくろ}の位置とかまで」

はっ！ まさかノゾキっ？！

「違う。それはお前の自己像へのイメージを元にその形をとっているだけだ。他の精神が入れば、その精神がイメージする『自分自身の姿』を形作る仕組みにしてある」

「じゃあ、もしかしてイメージ次第では実物より背が高くなったりする？」

「そのように自己を認識していればな」

「……オレ、一生この体のままが良い」

「何を狙っているかは大体想像がつくが、おそらく無理だぞ。実際は違つと分かっているからこそ、その姿なのだからな」

「うう……」

ぐっばいオレの夢。オレの身長。

「第一、タイムリミットが来ているとさっき言っただけだろっ」

そつだっけ？

何か色々起こりすぎてすっかり頭から消えてたけど、そう言えばそんな話もあったような。

「お前の肉体に精神が戻る時間が来ている……こうなるとは最初に説明しただろう」

「あー、そういう……でも、向こうに戻ったら確実にオレ病院じゃね？ 一週間寝たきりだろうし」

「知らない天井、とはならないぞ」

デュランが微笑する。

「こちらに召喚する直前の時間軸へ戻るからな。実際に向こうでは全く時が進んでいない事に修正される」

「タイムパラドックスとか起こらない訳？ それ」

「その辺は調整しているからな。それに、多少揺らがせた方が今は良い牽制になる」

牽制。誰への？

「まあ、お前には記憶が加算される以外には何ら影響は及ばないと言っ事だ」

「最初からこうなる計画だったわけね」

「さっきも同じ質問をしなかったか？」

軽く片眉を上げながらも、デュランはその通りだと頷く。

「精神を長期間分離しておくとお前の肉体に負担がかかるからな。かといって急激に戻るのも良くない……だから、こうして一定時間の経過に従って精神を元の体へ戻すようにしてある。まあ、戻すのに適切な時期と言うのは個人差があり、実際にそのタイミングを決

めているのはお前自身なのだな」

「オレ？」

「そう、お前が無意識にここが潮時と決めている訳だ……外から矯正すると、どうしても反動が精神を傷つけてしまうからな」

デュランは言ってた。

暫く付き合ってもらう。今はまだ返さない。そのうちちゃんと返す。

最初から、そのつもりだった。一番最初に目が合うその前から、一番良いように考えていた。
でも。

「あんたさ……説明足りなさすぎない？」

「ん？」

オレの言葉にデュランは一度きょんとして、それから唇の片端を吊り上げた。

似合いすぎる悪役スマイル

「その方が面白いだろう？」

ねえ、デュラン。
やっぱあんたは「魔王様」だよ。

さよならとオレ（後書き）

【作者後記】

お疲れ様でした。

七日間にわたったナカバの異世界訪問。

何一つ解決もせず、活躍もせず、出て来る相手は皆どこか変な魔王様と愉快的な仲間（？）達のだらだらとした日々。

少しはお楽しみいただけたでしょうか？

拙い文章でしたしょうが、ここまでお付き合い下さった全ての皆様に感謝を。

ありがとうございます。

これにてこの話は一先ず完結……………

しません。（嗚呼

次で終わりです。

後日談、宜しければお越しくださいます。

作者拝

後日談とオレ（前書き）

ヤマトの勇気が世界を救うと信じて、
ご愛読ありがとうございました。

後日談とオレ

オレがごろごろとベッドでねっころがってゲームをしていると、ピンポンとチャイムの音がした。

当然無視した。

だってパジャマだし。

昼間っから不健康この上ないがかもしれないが、これがオレのナチュラルだし。

休みの日ぐらいリラックスしておかないと、また妙な白昼夢見るかもしれんしなあ……。

いやさ、この前教室で地理の授業中にどうやら爆睡したらしくつてさ。

爆睡つっても目が覚めた時は黒板の文字は寝る前と比べて一つも増えてないし、時計の針も記憶してた時間から（早く終われーと思いつながら見てた）ちっとも進んで無かったし、まあ、要は何も変わって無かった。

ぶっちゃけ夢オチだった。

夢オチかよ！！

いや、最初にあの白昼夢見た時にこりや夢オチか異世界召喚か、どっちもやだなーとは思ってたけどさ。

マジで夢オチとは。びっくりだった。

自分にあんな妄想癖があったのもびっくりだったけどさ。

うん、でも夢とはいえご飯は美味しかったから良しとしよう。夢だから食べても太らなかつたし、お得ってなもんである（念のため家帰ってから体重計使ってみたけど増えて無かつたし、ついでに伸びても無かつた……いいもん）。

ピンポン。

「ナカバー、宅急便出てー」

うわ、めんどくさ。

「ヤダー」

「やだーじゃないでしょ。早く行きなさい」

親は横暴だ。

まあここでごねても後で一発殴られる可能性があるし、この事で明日までねちねち説教されるのもめんどいし、かつたるい。

オレは起き上がって、パジャマの上にパーカーとズボンを着る。

ピンポン。

はいはい、今行きますつてば。

「宅急便でーす」

「あ、どうも。お疲れ様です」

お、知らん人だ。この地区の担当変わったんかな……。

「こちら間違いないですか？」

「あ、はい」

「ではサインをお願いします」

「はいはい」

ナカバ・マサキ……っと。

サインを終えると宅配のあんちゃんは「ありがとございましたー」と爽やかに挨拶して去って行った。

元気だなあ。

しかしどこからの宅急便だ？

差出人確認するの忘れてたけど、まさか変な教材とかじゃないだろうな？

中身は「衣類他」。ってことは、また母親が通販で何か買い込んだんだろうか……ん？

「オレ宛てじゃん」

差出人は……見覚えがないな。

セシー。じゃなくてセシエン。セシエンってどんな会社だったかそんなのあったかなあ。

「む？」

おお、そうか。

ポムと手を打つ。

「何だ、セシエン君か」

はいはい、忘れてましたよ。

「……って、はい？」

え？

アレって夢オチとかじゃなくて？

いやいや、冷静に考えれば名前がダブっただけだろう。世界は広いんだし。

いやあ、世の中偶然つてもんがあるんだなー、とか思いつつとりあえずマイカッターを取り出してジャキジャキと梱包を開く。

でーんと万能包丁が鎮座していた。
下には夢の中で俺が馬鹿買いした洋服と同じものがみつちり詰まってる。

……あれえ？

「これも、偶然？ …… あ、何か手紙とか入ってるし」

封筒を開いて、中身を取り出してみる。なになに？

時候の挨拶に始まって、延々折り目正しく続く文章を要約すると、オレの服だからこつちに送りました。元気でね、と言う事らしい。
差出人は、セイリオス・セシェン・セイラム・セフィックス・シリウス聖王近衛主任。

……。えーつと。つまり。

「夢オチじゃなかった、って事……ですか？ これは」

痕跡皆無だったから、夢か妄想か、オレこんな夢みるなんてどんな欲求不満かと珍しく悩んだけど。

この万能包丁、この服の山、この手紙。

ここまで証拠がずらずら並んだら、名探偵でなくても分かる。
夢じゃ無かったって事。

「ふむ……」

でも、これだけだとかはいまいち落ちつかないと言うか、物足り

ないと言っか。

こういつ場合絶対奴が出張ってこないはずがない。どっかにオチが用意されてるはずなんだが。

オレは箱から万能包丁と手紙だけ取り出して、中身をバサアーッとひっくり返して床の上にぶちまけてみる。

うーん、他には何もなしか。

そうすると包丁か？ いや、これには特に仕掛けとかなさそうだな……刺したら刃がひっこむビックリ包丁かもしれないけど、それは試すリスクが高すぎるし。

そうなると、だ。

オレは手紙の入っていた封筒を開いてひっくり返してみる。

メモが一枚ひらりと出てきた。

きゃっち……て待てコラ逃げるな。どこいったー！！

……で、何とか見つけたメモには紫の文字が一行だけあった。

『インスタントコーヒー、一つ。忘れるなよ』

「本当に珈琲好きだな、あんたはさ」

うん、やっぱりこうじゃなきゃ「面白くない」よな、デュラン。

後日談とオレ（後書き）

【作者後記】

目が覚めて夢が夢だと分かるのは、そこに夢の痕跡が何もないからだから、夢でないとは分かる為には何かを覚えてくれないといけないと思うのです。

思いつきで始めたナカバの異世界生活ですが、皆様のお陰をもちまして一先ず此処で完了です（今度こそ本当ですよ）。

訪れて下さる人がいる事が、

お気に入り登録して下さる人がいる事が、

メッセージを下さった人が居た事が此処まで来る原動力になりました。

ありがとうございました。

皆様へ、心よりの感謝をこめて。

作者拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5422k/>

魔王陛下のヒマ潰し

2010年10月10日23時08分発行